禮吉は何となく差俯向いて頷かされた。

「眞個、大いに其處もある。」

「そして、あの、助けましたのは鳥なんでございますか。」

「青鷺と言ふ大鳥でね、唐土の鳳凰と同じで、天竺では此が舞へば天下太平、聖人出世の兆。面は美女のやうで眞白だ。青い翼が八枚あつて脚が一本だと言ふんです。」

禮吉は偶と、此の國の國主の愛妾が、忠臣等のために、あるまじき侮辱をうけて、嶮谷の叢に、裸にして白き豕の如く責殺された怨念の、やがて、人を殺し、城を焚いた、翼九枚にして、黒髪を亂した化鳥の、非なるが似つゝある事を、半ば思出しながら話した。

時に、織田の御前に擬した、汚い親仁の大鄕子の爪の、此の露野に加へられ、且つ己に迫る事を聯想して、黯然として心の暗かつたは言ふまでもない。

しかしながら、雪山遠く流沙川の彼方なる、青鷺の天は清朗明麗である。

「其の翼に縋つて救はれたんです。さすがの夜叉も、砂に頭を埋めて青鷺の蹴爪に謝恩を陳べると、いや禮には及ばぬ、たゞ此の後、たとひ如何なる事あつても、怨る處に我あり、と忘れても人に言ふなかれ。（確と誓へよ。）と矢張り人間の聲で言ふのを、謹んで聞いて、畏つて、夥び齒を叩き胸を拊つて誓つたんだね。さらばお歸り、やがて日も暮れよう、そなたの家路彼處ぞ、と

片翼をすらりと開いた。四つの青い影が、宛然一條の月の光と成る。白砂の道を辿ると……思つたより近かつた。あんな處に、あんな鳥が、あんな場所がと、思ふほどで、猫王山の半腹の住居へ歸る。……勿論、ぐしよ濡のへと〳〵だらうね。

何うしたんだい、と人間なみに、おつしやつたのは鬼子母神樣。此の時はまだ鬼の女房でおいでなすつた。

――然も此の日、此の夜こそ、お釋迦樣のため、成道正覺にお入んなさる日で、丁ど何さ、晩のお菜に、迦毘羅衞國の七歳の王子を、宮中から。引攫んでおいでなすつた日に當る。

豫て、城下へ出ては、何百、何千とも數知れず、人間の兒の餌食をお取んなさるものだから、國王から、辻の出口入口へ番兵番卒を配つて木戸を閉し、砦を鎖して、金網を張つたやうな、何と嚴重な用心の中を、事ともしないで、其の用心振が小憎らしい、と言ふので、故とお城の奥殿へ飛込んで、王子を一寸前垂の下へ、――なんぞは、お手輕なもんぢやないか。可恐しい龐の威力だね。

狼々を狩損つて、遁上つた樹から搖落されて、大川へぼちやんをし、鳥の翼で助けて貰つた御亭主とは、腕に於て、くらべものに成るんぢやあない。

――何うしたつて、お前、何うしたなんぞの處ぢやあねえ。生命拾ひをしたんだぜ、生命を拾

つて來たんだぜ——と夜叉が息急いて言ふほど、此方は薄笑をして、何處にさ、拾つて來た生命つてのを一寸お見せな、どんな形をして居るんだえ。——なんのつて、鬼子母神樣は洒落を言つておいでなさる。

處で、景氣直しに太子を料理つて、晩酌のお取膳と言ふ寸法で、此から妹の摩爾髮さんに手傳はせて大俎板を持出さうとなさると、臺所からも見えれば、座敷からも見える。……硫黄の煙と魑魅魍魎の蔭で、月夜も暗黑の此の猫王山の麓を、城下はづれの拔道に成る絕所に、其處から月が上るやうに、次第に岨路を近う來る不思議な光明があるんです。

此こそ、大聖釋尊が、お弟子の迦葉を一人連れて、近頃鬼の用心に、此の迦毘羅衞國で構へた新しい關所の人しらべの煩はしさに、此の間道へかゝつて、昔からいまだ嘗て人間の通はないと言ふ惡魔の山を、厭ひもなく、夜道を掛けて靜々と、隣國、法宜彌の都へ山越をなさる處だつた。

が、魔界の孤家では、見馴れない其の光を、われ〳〵人間が鬼火狐火を視るよりは不思議がつて、怪しや、何の影だらうと、巖端へ飜然と出て、鬼子母神樣がまくり手を下に翳して、輝く瞳で御覽なさると、靈鷲き昇る光明の裡に、歷然と尊い出家の姿が映る。相好と言ひ、容子と言ひ、豫て全天竺音に聞えた、摩迦陀國の悉達太子、釋迦牟尼に相違ない。……人間の教主、魔界の仇、あの迦毘羅城のハイカラ小僧。機會もあらば生首をと、一同手ぐすねを引いた處、對手から生命

を馳走に來た。が、手強い敵ぞ、油斷は成らぬ。豫ての手筈、速に魔軍を以て、取卷くやうに、夜叉どの疾く、提婆が方へ注進おし、私は彼等を欺いて、深切ごかしに、孤家へ泊めた上、頂の巖窟、お爺さんの許へ一走り行つて助を借りよう。何だねえ、油屋の眞似なんぞ、蝙蝠が笑つて居るよ、と壺に貯へた人間の血のどろ〳〵酒を、柄杓で德利に注いで居る具足夜叉を、せき立てて、命拾ひをした俺ぢやあねえか、邪險に扱ふなよ、と無性たらしく、生ぬるく、ぐんなりとして居る旦那を、えゝ、落したり、拾つたり、まるでお手玉だね、ソレ、ちやんぎりよと、黑雲の上へはふり上げて駈出させ、摩爾さんは其のお肴を、一度納戸へ藏つたりと、太子を納戸へ隱させる。

鬼子母神樣は八天下。はら〳〵と兩袖を拂いて、エ、と聲をお掛けなさると、白の蹴出しが、紅羽二重、然も人品な美女と變つて、柄にないねと、優容に、しやな〳〵と、旅の出家をお迎へ遊ばす。

話が枝に成りました、露野さん。……扨て肝心の、御亭主だが、具足夜叉は、鬼子母神樣が其の夜、正覺をおとげなさると、日蔭ものの宿なしに成つたのです。

養に成らうとした、孕の太子は、お釋迦樣が抱いて下山の上、めでたく國王の手へお返しに成る。猫王山魔の住家は其の國王の討手のために全く滅びたと言ふ段取なんだから。

時に、飛んだ事が出來た、と言ふのは、一度俎の上に縛められながら、生命恙なく城の奥へお歸りに成つた、其の迦毘羅衛國の太子だがね、間もなく、其の何なんだ……」

あはれ、又お身の上かと心弱くて、露野が憂慮はしさうに、肩をくねつて、胸を細うして聞入つたにも係らず、禮吉は言淀んだ。

よどみながら、

「身體一面……」

「お身體一面……」

「其の身體一面、目とも言はず鼻とも言はず眉も口も。……

南海慈航

鉢水楊枝」——

と心に念じつゝ言つた。

「潰れて、爛れて、お可哀相に、たとへやうのない、御苦惱。……

當時、國王は女帝でおいでなすつて、一人子の世子だもの、察しられるぢやあないか。典藥侍醫たち、夜に日に肺肝を碎いて、御療治を申上げるけれども、次第に病惱が重るばかりで聊かも驗がない。第一病體が分らないんだね。……」

——斑猫の毒にかぶれた、當國の貴夫人、お楊でさへ、——

「大方は猫王山の魔界の毒氣にお中毒んなすつたらうとばかりで、人の力に及ばないと、匙を投げて了つたんです。餘りの遣瀨なさに、母帝が御體を、露に投げて、天にお祈りに成ると、夢に、明星を手に捧げ、白銀の鎧おなじ甲した神將のお告に、——君が知しめす國の或處に、青鸞と言ふ鳥がある。

（先刻の不思議な大鳥です。）

白面の美女にして、八の翼云々と、其の形を教へて、其の翼を得て褥に敷くよりほか、太子を救ふべき道はない、と云ふお告なんだ。

母帝はお目が覺めて、尚ほ夢のやうな探しもの……國王の威と力で聞いても、見たものは愚、然うした鳥は聽いたものすら嘗てない。」……

お楊のために、白菊谷の菊の雫を、頭の形に頂くと言ふ、姫鮒と言ふものすら、此の大川に得られぬのである。

「其處で立札が立つたんです。青鸞を知るものあらば速に申出でよ、貴賤を選ばず、女帝自ら謁を賜ひ、一萬貫の恩賞の上、尚ほ一代を扶持せらるべきものなり。

と、さあ此處へ、——人間の下郎に化けて、のそ〳〵と顯れたのが、件の閻慢具足夜叉だね。

……はツ申上げますツさ。

生命の恩ある神とも言ふべき青鸞を賣るんです。一萬貫に、一代のお取立と來ると、人間でも、一寸遣兼ねないんだから、夜叉に取つてはお茶子だつたよ。

母帝は飛立つばかりの心を鎭めて、三日潔齋精進ののち、狩裝束で自ら鵠の羽の白羽の矢、二筋をお取遊ばし、綺麗な腰元、女中ばかりの一隊を率ゐて、具足夜叉の道しるべについて、お城を出發。日に夜に繼いで、三日目に志す場處に着いて、恁う御覽に爲ると、天地晴朗閑麗なる白砂の中に、唯一羽、白面の其の青鸞が、八つの翼に八つの光を月影の如く水に映して優長として、遊んで居る。

尊き鳥よ、迦毘羅衞國を統治すべき自らが唯一人の太子のために、御身の生命を給はれと、母帝は弓を挾み、矢を伏せて、樹の根に褄をお敷きに成ると、青鸞は砂の玉のやうに、さら〳〵と踏んで近づいて、女帝の御姿を熟と視ながら、兒を思ふ親の慈愛に、はら〳〵と涙を流して頷きながら、——出しやばつて指さしをしたのがさすがに後へ一歩退つた、具足夜叉の野良猫に似た面構を屹と視て、誓を忘れたな、と言ふと齊しく、翼をあげてハタと打つた。わつと叫んで、其の搏かれた顏を、兩手で壓へるのが、手に餘つて、見る〳〵うちに、胸も脚も、立處に眞赤に爛れる。

青鸞が、我が君、早く歸らせ給ひて、恙なき、太子殿下を御覽ぜよ、さらば、としつとりと翼を伸すと、輝く柳の靡くやうに、鳥の姿は、虛空遙に雲に乘つた。

其の雲の行く城の方へ、女帝の一隊は、色も姿も美しく虹の動くやうに引かへす。忘恩の惡魔は、獨苦しみ、獨悶えて、狒々も象も忽ち寄つて來て、見て居る前で、のたうち〳〵惱むうちに、手は手、足は足、胴は胴と、うみ、つえ、たゞれた處から、ばら〳〵に解けると、それがね、一個づゝ、びく〳〵と皆、血だらけの、汚い猫に成つたんだつて。」

猫魔

五十六

「まあ、可厭でございますこと、氣味の惡い。……それでは其の不思議な鳥の罰で、猫に成りましたのでございますか。」

「さあ、青鸞は、いづれ、世を救ひ、人を救ふための、神樣の化身の鳥だらうけれど、罰すると成れば、そんな可厭なものを世間に殘して置く法はない。……太子の惡病を其のまゝ身體に受けたのは罰せられたんだらうけれど、猫に成つたのは閻慢具足夜叉の怨念だよ。正法の威德に依

つて亡びこそしたけれど、夜叉だつて、強い魔ものが末期の一念、五體は碎けても一つ〳〵の猫に成つて、佛に祟り、世に仇して、草木一本石一つでも、此の世界を魔界にしよう可恐い呪詛なんだ。だからお釋迦樣の御涅槃の時も、猫ばかりは、歎きも悲しみもしなかつたと誰でも知つてるのは此の譯だとさ。」

「憎らしうございますわ。」

「具足夜叉ばかりでない。此より先に滅亡した、例の猫王山の大魔王ね、——鬼子母神樣が一度正法にお歸しなすつてから、魔界の道が開けたので、迦毘羅衛國から、討手の大將が、えい〳〵と、數萬の軍勢を率ゐて、押のぼると、此の軍勢の前へ立つて、それまでは形も見えなかつた……犬、猿、雉子は桃太郎の鬼ケ島のお供だが……象、猩々、虎、豹などと言ふのが、ぞろ〳〵と山へ上つた。おまけに、人間にゆかりのない處には、決して生えないと言ふ、柳の樹が、頂日山の此處彼處に丈のびて育つた、綠の影のさすのを視て、大魔王は既に運命の究まる處を知つたんだね。

百里岩のもの見の座を、數萬の軍兵に取卷かれながら、死しても釋迦に仇をする、記驗を見な、人間儕と、髮を拐り、爪を剝し、我と我が指を折り、手足を斷つては口に含んで、血と、煙と、火と一所に、虛空に向つて赫と吐くのが、一つ〳〵眞赤な炎と見るうちに、坩堝を出て、固るやうに、種々の猫になつて、其の數、幾千幾萬とも計り知られず、空中を縱橫無盡に飛行しながら、軍勢を驚かして、迦毘羅衛國の城を蔽うて消失せる。と、身體を殘らず、引裂き喰破つて、猫にした大魔王の、大きな顏ばかりが、一つ、賴光に退治された酒呑童子の首のやうに、ぽかりと巖の上にのつかつて、眼を睜り、牙を噛んで、がつ〳〵と齒だたきをすること暴風雨の如し。……」

「可恐うございます、若旦那。」

「忽ち其の首が、巖に附着いて、轟と鳴ると、俄然として其のまゝの大どら猫に成つたんだ。」

ニヤア——

「……」

ニヤア……

「あれえ。」

と取縋つた、露野の肩を、思はず確と抱込みながら、禮吉は呼吸を詰めた。途端にぬつと背を吹立てて、髯を蠢かしたのは、大なる茶の斑の三毛猫である。

唐突の鳴聲と、不意にむく〳〵と動いた影に、天から降つたやうに驚いたが、書院と境の、祖師堂の敷居際に、位牌堂の畫の暗さを後脚の尾に曳いて、目を光らしたのを、恁う見つゝ、振返つて、床の間に掛つた繪の、姬路の城の、名に負ふ白鷺の天守に對して、其の靈怪幻異の傳說を

思ふにつけ、何、こんな猫は何んでもあるまい。……
壁、圍の透間を潜つた、野良猫に相違ない。また其の汚い事、どろ〳〵に毛が抜けて、首筋に癩の、じく〳〵と爛がある。
「露野さん。」
身はわな〳〵と震へつゝ、縋寄つた含羞に、颯と顔を染めながら、露野は小さな幽な聲で、
「叱い。」
と追ふ。
「邪險ぢやないか。お前さんに逢ひに來たんだのに。」
「あれ、若旦那。」
「否。眞個は、寺に珍しい、此の御馳走の香を嗅いで、堪らなく成つて出て來たのに違ひないが。」
で、其に違ひない、對手が化ものでないのを信ずるにつけて、取縋られた露野のために、殊更に綽々たる餘裕を示して、
「御覽、それにしても大鄕子の爺夫に肖然です。面を御覽。」
猫はアグリと口を開いた。
「正のものだ。」

と串戲が、眞個に、……其の首筋許の鯰の汚穢を思ふにつけて、面まで其のまゝ、と苦笑をしながら、袖で露野を庇ひつゝも戲れたが、
「畜生ッ」
忽ち色を變へて叫んだ。
「畜生……畜生。」
烈しい矢聲に、背けて居た顏を、恐怖々々猫に向けた露野が、
「あれえ。」とまた怯えた。
猫が、重箱に向つて襲ひかゝつたのではない。三毛唯一つと思つた、其のあとに、影の如く灰色したのが一匹、續いて雉子猫とか言ふ、黑に褐色の横條の卷いたのが一匹、むざとして顯れて出たのである。
ニーグウ……
「叱！」
ニヤーウ……
「畜生！——爺やさん。」
と弱い事。禮吉は我を忘れて、庫裡の寺男を呼ぶと齊しく、片膝立てて、身構へながら、

「コン畜生。」遁げる處かぞろ〳〵と三疋、怪しい臭を漲はせて、近間へ寄つて來さうなので、狼狽氣味に、火鉢にあり合ふ火箸を取つて、伸掛つて、礫と投げた。

「業畜生。」

フヽンと嘲笑つた體に、嘯面をツンと外方へ向けて、三毛猫が飛びもせず、のろり〳〵と歩行出すと、あとの縞の雉子猫がぬつと、出て並んで行く。

トこゝに變なのは、中に居た灰猫で、汚腐つた尻尾を捲き、後脚をひたと縮め、前脚で引抱へるやうに、面を古疊に俯伏せに埋めて、ずるり〳〵と這出す、海鼠が藻掻くやうである。

退きかけて、急に去らない、執拗なるものの不快さに、づか〳〵と突立つて、

「うぬ！」

と追つて、どた〳〵と足踏をすると、三毛と雉子が一齊に振向いた。

ゾッとして退つた時、雉子猫はちよろり、と庫裡の障子を潜る……三毛猫はドンと躍つて門に向いて取着の障子の破目を、一小間破抜いてヅバと出た。

が、變な其の影法師のやうな灰猫は、何處へ消えたやら、ふつと見えぬ。

何故だか、我袖を拂ひながら、禮吉がきよろ〳〵と、本堂、脇堂のあたりを眴した目に、漸と、いま吻と成つた露野が其處に落散つた火箸を拾つたのが、胸白く衣紋もやゝ亂れながら重詰を傍

にして、恰も、銀の振出しの箸でも持つた様子の、恍惚と薦更た顏を見た時であつた。

「何だい、失禮な。」

と強く言つた。……

門のあたりに響いた聲は、紛ふべくもないお光である。

障子の穴から、最う見える。……

松ケ枝。六つの袖

五十七

「お光さん。」

潛門の際に立淀んだお光が、呀、亂れた銀杏返の前髪かけて、白い布で額を卷いたのに、處々血が染んで、半襟の色の添ふ、蒼白さ、が、凜々しい顏して、出合頭。ウヽヽと唸つて背を立てた三毛猫に、丁と松の枝の折つたのを、片手に振翳した處である。

後に一人、脊も拔群に肩幅の廣い、入道頭に半纏着た、土方體の逞しい。……とばかりで、何處かで見掛けたやうな大親仁が、幾重にも白布で卷包んだ四五尺まはりの、箱形なのを、首に掛

けて背負つたのは、向山の塚なりし、父母の、墓なりし、草葉の陰を幻に世に顯れし白骨と、ハッと捧ぐるやうに、禮吉は兩手を開く。

其の親仁は、骨組に似ず、輕く、いま、ひよいと地に屆んだ。

ぎやつ、とけたゝましく鳴くと、猫は煙の這ふやうに、ちよろりと飛んで、墓所の方へ消えた。

パチリと鳴つたは、猫を狙つて當てた礫の、餘波の音である。

禮吉は何にも言はず。

「姉さん。」

本堂の階を下りて、迎へたのである。

露野は上の板敷に、袖を敷いて手を支いた。

「遲くなりました……兄さん……」

「貴女、眉間は、眉間は。」

お光は事もなげに、

「えゝ、轉んだの、お轉婆ですから。」と輕く微笑みながら、背後を見向いた。

「此方へ。」

老漢は早や背の包を、腕にかへて、白布の箱を捧げて居る。お光はあれなり潛門の方を來たが、

老漢は、眞直に、正面の門を入つたのであつた。

「おゝ。」

と言つた、禮吉は老漢を見て、

「爺さんは。」

前塚權九郎。

「更めまして、後程に御挨拶。」

「兄さん。」

權九郎の手から、假の柩を、禮吉と二人、手に手を添へて受取つた時。

「……御無事に、——お二方。……お祖父さんも、……」

母の黑髮長からむ、土のめかたも腕に響いて、二人の袖に、柩の重く据つたのを視て、露野も密と手を添へた。

唯、これを視て、曇つた聲で、「南無、南無、南無、南無、」

と權九郎は、入道頭で、のつしりと腰を屈めながら口の裡で唱へたのである。

「お土產。」

とお光が言ふ、手には果ものの紅きが覗く。風呂敷は、手向の草の花を取添へた、が、然う言

つて、柩に載せたのは、松の一枝。
「お墓の上に生えたのですよ。」
六つの袖は揺れながら、靜なる松ケ枝の、葉にはら〳〵と露があつた。

五十八

「何、旦那、お笑草だ。……其場へ打着かつて遣ると成れば、俺等より旦那の方が旨うがせう。手練も鍛もあるもんぢやあねえ。冬向、此の小兒が寄つて、雪礫の打つけつこを遣りますが、手もなくあの呼吸だで……お笑草だよ、へつへつへつ。」
——後で權九郎が言つて、氣もなく笑棄てた時は、或は其も然うかと思つた——事實、雪の中で雪に乘つて、町々辻々に小兒たちが群集つて雪礫の激しい合戰、其の戲をするのであるが、力まかせに堅く結んだ石のやうな雪の塊で血を流す怪我過失もあると同時に、避ける事、躱す事も、又飛んで來るのを矢を切る如く、宙でパッと棒切で受け狀にたゝき落す事なども、小兒は自得したものである。從つて、遠くから狙撃に雪礫を擲つことも、蓋し巧なものである。
權九郎は其の術を用るたのだと言つて笑つた。が、手練のほどは、寺へ來て門を入りしなにお光に齒を剝いた三毛猫を丁と打つた礫でも略計り知らるゝ……

先んじて、向山の今日の出來事を、お光が話して、天狗に助けられたと思つた、と言ふのを聞いた時は、聞く禮吉も思懸けない天狗の扶助よと思つたのであつた。
委しい事は、前に於て陳べた、東京でお橘が見た夢を、其を正夢と言つても可い。殆ど同じであるから、こゝに繰返すのは見合せよう。お光は、白足袋も泥に成つたと緣側へ脫いで、横坐りに寬いだ狀して禮吉に話した。——廣袖を着た中山高帽の壯士に、閼迦桶の柄杓でバッシリと額を打れたと同時に、一塊の粘土がびしりと何處からか飛んで來て、廣袖の面をぐしやりと遣つた。廣袖はわつと反つて、じだんだ踏んで、堪らず唾した、其唾も泥で、赤土の面を被つたやうであつた。
「まさか威嚇でせうけれどもね……兄さん、それでも峰打ぐらゐは食はせる氣だつたかも知れません、大鄕子の爺がね。」……
先客の露野は女氣の優しい效に、最う此の寺に馴れた振で、茶の支度を、寺男に相談かた〳〵庫裡へ立つた。こゝに居合せたらどんなに、肩身を消さうとしたらう。
懇に座に請ぜられた權九郎は、強て辭みもしないが、草鞋穿の泥足を洗ひにとて、井戶へとも言はず、裏の藪の前の小流へ行つて居た處であつた。
「拔刀を振上げると、其の額から兩方の目の上へ、目鬘を掛けたやうに、粘土が飛んで來て附着

いたでせう。御先祖代々の刀をバツタリ落して、あつと跼んだぢやありませんか。吃驚する皆の頤へも咽喉へも、あとから〳〵、どんと來ては、べたんと附着くんですもの。あゝあゝと言ふ私もね、兄さん、何處から飛んで來るのだか知らんと見ますとね、平場を一面離れました東北の彼處では一番高い、豆腐を重ねたやうな、四角な形の丘の上にね、出端の處へ股を割つて腰を掛けてさ、大きな漢が象に乘つたやうな形で大きく高い處から、熟と此方を見ながら、大きな口で、銜煙管で、すぱ〳〵と煙草を吹して居るんですがね、高い〳〵土の臺へ大な入道を据ゑた銅像のやうで、影が一杯に映して、凄いやうでしたわ。

其の大な掌が、粘土を引摑んで、アレ捏ちたと思ふと、其の時、どしんと投げました。……又私のね、兄さん、襟髪を引摑んだ、巻脚絆に靴を穿いた男の口を塞いで、べつとりと塗つたんです。

大入道は、のそり〳〵と向うの丘を大跨に下りてお墓へ來ました。

お墓へ雇つた穴穿が（や、お頭）（や、頭）と二人とも言ひましたよ。

皆がね、何をしやあがるんだ、と一齊に、がや〳〵立かゝつて言ひますとね。

ニヤリと笑つたの、（此か）と言つてね、掌を開けて見せると粘土の大きな塊を摑んで居てね、

露

五十九

露は尾花と　寢たと云ふ、
尾花は露と　寢ぬと云ふ、
あれ寢たと云ふ、寢ぬと云ふ。

「上流の鮒屋だね。」

「よく聞えますこと。」

文句は……しかし、唄ふ音〻は鄙めいて、然まで床しいものではなかつた。

（へゝゝ、何と御覽なさる、此の土を摑んで、何も、掌の斑を消す禁厭にするんぢやありませんや、旦那方、お見受け申した處大した偉さうな御仁體だ、へゝゝ）と笑つてさ……」

お光も笑つて、

「兄さん……其の入道が、いやに笑つてね、へゝゝ、此奴あ天狗の牡丹餅だと、ぬつと掌へ据ゑて出した時は、毛が生えて土が光るやうに見えましたよ。」と額の疵より、唇紅う莞爾する。

が、其の露は螢の如く、尾花は蓑の如く、濡々と冴えて明い、且つ粛然な夜であつた。

禮吉は露野と二人携へて、去ぬる年は、夏の夜ふけに、煙管を欄干から落したと言ふ。——おなじ其の天神橋を、いま渡つて、橋の袂の、こゝに人も知つた年古る槻の陰に、一度暗く成つて、隠れ、やがて、向山の麓なる麻野川の其の川縁の徑に、二人とも袷ながら、尾花も露も白く膚にうつりさうに月を浴びて行んだのである。

「いつも鮒屋は繁昌なのかね。」

其家は格別の川魚料理で、恁うして町を離れた上、まだ上流の方へ五六町、次手のない石ころ道を隔てて……其の間には、昔の發句ならねど、短夜や何とか衆の川手水と云ふ景色を想はせる、下流の、あの、前塚田圃の部落に對する上流の小屋が、ごつ〳〵挟まつて居ようと云ふ、筧は流れても、野菊は咲いても、酒や色には隔つた場所なのであるから。

「螢の時分でもありませんと……」

と露野がまぶしさうに、裝上つて、崩れて、且つ靡いて輝いて流る、、中流の水の瀬に面を背けて云つた。

此のあたりは螢の名所、然ればこそ玉敷く露に、其の面影を偲ぶのである。

「ですけど、あの、今夜あたりは、此處いらはお祭でございますから、其の崩れが、もの好に遊

びに行つて居りますのでございませうね。」

「あゝ、提灯が見える。」

其も、消殘つたのが二つ三つ、橋と撞木形に、一條、月に青く山に暗い、寂とした屋敷町に、心細く白ぼけて點れたのに、脚の黄色な、髯の赤い、甲の眞黒な大きな蜆蛤が、くるりと巻いたり、颯と這つたり。……

「然うだ、毘沙門の祭禮だつた。」

氏子の町の軒提灯には、其の神のおつかひめとて、皆蜆蛤を然うして描く。……土塀の低い、荒廃した場末ゆゑ、繪の蜆蛤が、石垣の崩を、ざわ〳〵と動くやうで不氣味である。

唯、目の前なる大槻が、蓋しまた昔から尋常ものではない。梢から砂利を撒くの、棺桶をぶら下げるの、行燈を點すのと言傳へる。……無論今時、誰もそんな事は信じないし、禮吉とても更に念頭には置かなかつた。が、繪の大蜆蛤の遠く明滅して、動くに連れて、ふと視れば、枝繁き中に宿つた、大きな三俵法師のやうな、あの何とか云ふ、圓形い柱の、深々と露を含んだのに、照々と天心の月の光の映るのが、其の柱を晃々と照して、恰も葉の中の槻の枝に、別に一輪の月があつて、怪しく輝く風情がある。

「露野さん。」

此を見せようとした。

「若旦那。」

と露野の方が、用ありさうに、然も怯えたやうに、肩で犇と寄添つて、

「まあ、私、大きな梟かと思つて吃驚しましたわ。達磨さんのやうに屋根の上に乗つかつて居るんですもの。」

と胡粉のやうな指をさす。

山に壓潰されたやうに、屋根ののめつた、二階の折れた、空家の廂に、風が吹くと吠えさうに、ばさりと下つたのは、酒屋のなごりの杉林である。

遊山の客が、水筒や瓢に、此處で滿たすのもあれば、山から買足しに下りるもあり、往還に居酒もりした酒屋であつたが、山を公園にする道路の改築のため、市へ買取られたなり、取拂ひがまだ濟ます、住むものもなく、中は石の枕のある古蹟のやうに荒果てた。

「眞個梟だ、ふツふツ。」

と三つばかり、串戲に杉林に向つて吹く息が、やゝ夜寒に白く、禮吉は笑ひながら、

「それからね、あれを御覽。」

と高く空ざまに指す指を傳つて、露も、聲もありさうに松蟲のやうに動く露野の瞳を、手を返

して、古槻の月影に誘つて、

「あの中に、最う一つ、樹にも、空にも、月が二つあるやうに見えやしないかい。」

「あれ。」

「否、威かす氣ぢやあない。貉が棺桶を下げるの、行燈を點すのつて怪しからん、そんなんぢやありません。此處の槻と斜違に川を隔てて、向合つて、それね、向うの原場。」

霧に湖のやうである。

「廣い野原だ、お辨當持參で、春は摘草に行く處さ。」

言ひかけて聲が曇つた。——ふと蟲の聲が、流を隔てて幽に聞えて、それもりん〳〵と轡に擬ふ。白菊谷へ落人の如くうら若かりし母の、馬に騎したは其處であつた。

「彼處にも、大きな槻が一株ある。」

橋の此處なるは、蓊鬱として、籠れる堂の如く、曠野の彼處なるは、亭々として聳えて塔に似る。

「此方の、此の槻から、對岸の槻まで、恁う云ふ月のいゝ夜は、白い虹が掛ると言ふんだ。霧だらうがね。それを、橋のやうに、月が横傳ひにするゝ〳〵と渡るのが見えると言ひます。」

「えゝ、あのお月樣が。」

「然う、お月様が、ひとりでに其の虹を傳はつて川越をするんだとさ。光を浴びて、揺れて流れる瀬の加減で、宙に映る影なのだらうけれど、不思議の名所に數へてね。此處を月の棧と言ふんだよ。」

途端であつた。

ほゝゝゝゝ、と高らかに冴えた婦の聲が、夜陰の靜寂を、千鳥のやうに破つて縫つて、魔の通るが如く、中空に響いて消えた。

「若旦那。」

と、わなゝいて露野が縋つた。

「何。」

と其の手を取りながら、

「新地で騒いで居るんだよ。」

東の廓と稱する新地は、此の山裾を入江の如く續いた麓に、當夜祭禮なる毘沙門の社に接して居る。何處か、其のあたりの二三階、高樓の笑聲の、風に乗つて來たに相違ない、と思ふにも、袖褄をひら〳〵と、怪鳥に乗つた怪しい婦が峰を飛んだやうで凄かつた。

曠野の霧は深けれど、水は流れる、露は光る、そよ〳〵と尾花は靡く。……敢て幽冥の境でない。

白張ながら、ごり屋と描いたを、ぶら〳〵と提げて、三つばかり。土手沿の其の掘立小屋から、夢がふはりと出た體に、月夜に提灯の贅を見せて、藝妓まじりの、鮒屋歸りが、草の堤を八九人。

露は尾花と寢たと言ふ。

尾花は露と寢ぬと言ふ。

婦も醉つたか、口三味線。

唐突に、——

「奥州街道で南瓜が、何うした。

と、客の濁聲。

眞前なるが、鯰の通り、鰭を揚げて手を掉つて泳いで來る。

片傍へ寄つて道を避ける、禮吉と露野の前を、熟柿が匂つて、芬と通り狀にじろりと視て、

「何だ、こりや。」

と扁平い黒帽子を仰向けに、凧の煽るが如く胸を反して、ぬいと向直ると、抱込まれて居た脊の高い雛妓が紅い帶でこぼれながら、

「……や。」

と低聲で言つた。方言……の事である。釣込まれたやうに、

「あ、上流のやな。」

と、藝妓が一人、褄を煽つて云つた。

渠等の目には狸か、蝙蝠の穴のやうな、いま通過ぎた小屋に生えた嫁菜の、花と、すかんぽに見えたであらう。

露野は、つと禮吉の手を離れて、破屋の軒に隱れようとした。廂を漏れて、はら〳〵と映す月の影さへ、肩に痛々しいまで身を恥ぢる。

頸を覗き、額を睨んで、

「いよう！」

「これは。」

で、ぐるりと立留つた客は只一人ではない。

洋服もあれば、紋着袴、インバネスを着たのも交つて、鯰もともに五人ばかり。

「およしやすや。」

「怪體な。」

と捨臺辭して、藝妓たちは、ずつと橋の袂へ退く。

「廓中にはないぞ。」

「何と此ば。」

「素敵なもんぢや。」

禮吉は、露野が袖を分つた時、自分は齊しく身を躱して、槐の木がくれに、靜に立つた。

そして、洋杖を肱に預けて、中折の庇下りに、澄して見て居た。

「……でも構はん。」

連に、人ありと知りつゝも、醉つたものの、分けて此の國に、位地あり、金子のあるものの習慣である。

「いや、堪らんぞ。」

と鯰が尾を振ると思へば、縊らるゝまで雪の項を打背けて袖で蔽ふ、露野の袂をぐいとつかんで、

「うゝ、畜類め。」

と眞白き頬へ突つけた口は、髯をすぼめて、唇を壺に、宛然の田螺である。

と見ながら、禮吉は靜に彳んで、槐の陰に澄して居た。

單身、横暴なる渠等醉客の人數に對して、力敵せずと斷念めたか、とても路芝の露である。た

とへ掬んでも消ゆるものを、と見棄てたか。

恁る時、假令婦が仇なりとても、誰か身を棄てて救はざるべき。

何事ぞ。禮吉は然も莞爾々々と笑つて居た。

狂か、癡か、血なき蟲か。

否、否、渠が如き力なきものの一指をだに勞するに及ばずして、暴漢はしたゝかに其の無禮を懲さるべく、露野は鮮明に其の姿を保護さるべき、不思議の約束があつたのである。

「馬鹿め。」

禮吉は心で笑つた。

知らずや、露野の今の身は、鬼も、人も、影身に添つて、星の如く左右を守り、前後に齊眉く姫君である。

其れ見たか、——

傍若無人に、露野を手籠に、口を寄せた鯰は、忽ち仰向けに反つたと思ふと、

「わつ」と消魂しく叫んだ。

鼻から頬へ、べたりと塗られた、粘土の面被。

「やあ、こりや、」

「え、、誰だ。」

「あつ大變。」

洋服も、紋着も、口々に、驚くわ、騒ぐわ。顔とも言はず、胸とも言はず、ばちやんと響き、ぺたんと鳴つて、何處からともなく、矢繼早に粘土の塊が飛んで附着く。……

天窓を抱へる、顔を摑む、袖を被る、紋を抱く。素敵に大きな嘘をする。右往左往に慌て惑つて、立足もなく亂れる處を聲を合せて、異變な音で、形は見せずに多勢一團の聲を浴びせて、一齊に哄と笑つた。

「魔が出た。」

「天狗だ。」

「わあッ。」

「ひい、。」

と藝妓雛妓の悲鳴が交つて、遁足を入亂れに、橋の袂を、其の寂しい一條の屋敷町へ雪頽れて遁げると、怪飛狀の肩で叩いて、今は唯一個點れ殘つた、祭禮の提灯を拂落すと、バツと落ちて、めら〳〵と燃えた火が青い。

黑蜆蛎が、取亂した白脛の緋縮緬に搦んで燃える。

「きやア。」

あとは、扨て忽ち人の影もなく、其方の空は、峰の陰翳に暗かつた。先刻、中空を不意に走つた婦の笑聲には慄然したが、此の悲鳴は凄くはなかつた、男女の星は、相見て輕く微笑した。此時に銀河ならず、露白く流るゝ草の徑を隔てて立つた、君臨したるものの如く、怪しき威と品と兼備はの時の風采は、互に此の大いなる城下を領して、つて見えたのである。

仔細を聞け、……

六十

——此より前日、禮吉が菩提寺に、向山の塚の骨を納めた圍欒の座に(もう其の時は夜に入つたが)數を重ねた杯を手にして、大入道の權九郎が、藪の小流で洗つた足の、遠慮のない大胡坐の膝を坐り直して、

——扨て、若旦那——

と更めて禮吉に言つた。

——此の上蔦(露野を言ふ)は、御迷惑でも、若旦那がお歸りなさる時、一所に東京へ連れて行つて頂くだ。……また其處には、御新造の御料簡もあらうが、江戸の方だ、話は分る。……お內に御一所にお置きが願へて、縫針や飯事のお手傳なら、願つたり叶つたり。また御都合で、御夫婦のお見立てで、餘所へ奉公と言ふやうな都合に成つても、こんな鬱陶しい地方でお暮しなさるより、どんなに嬉しいか知れませんや。媼さんは固より其の氣だし、上蔦の心も、よく俺には分つて居ります。

推附けがましうがすけれども、其は其に極めるとして、是非一つ此處に俺どものお願がござりますだ。……

と言ふのは、申すも如何だけれど、俺どもは、これ、恁うやつて……も恐多い、……、言はば、……人間だ。

千石取のお歷々の、此の上蔦の抱乳母が、むかし何を間違へたつて、……の小屋の中から這出さう道理はねえで、媼さんは血統も正しい、しらきちやうめんの婦でがす、が其の婦を……が女房にしたからには、大江山の酒呑童子が、何と、京の女を引攫つたやうな、酷い、情けない、可哀な經緯がこゝにあるで。

媼さんも、前の世の因緣事と斷念めては居るらしいやうなものの、俺がために、おつけ晴れて……の出來ねえやうな身體に成つてから、最うこれ雜と四十年。此方が氣の所爲かは知

れねえが、過般の夜中、若旦那と二人でござつた上臈の顔を一目見て、莞爾したやうな顔は、いつが日にも見えた事はねえくらゐ。

其と言ふも常日頃、餘り世間が俺どもを……にするからだ。

また旅他國も、知らぬではねえけれど、凡そ、此の國ほど、人間の差別を附けて、金錢の多寡や家の由緒、其の人の身分に、甲乙を分ける國は他にやあねえ。

其處へ交つた……でがさ。

不斷の鬱憤を思召さい。町は天氣の、山は晴れても、俺どもの里は水が濁つて、天井も眞暗だ。月とも、星とも、御器量人と、美しい上臈が、其の里へ光つてござつて、微塵も別隔てをなさらねえ。前塚田圃はさらりつと秋晴で、鳳凰のかはりに、きら〳〵と蜻蛉が飛びます。

上臈なんぞは、うまれてから、こんな嬉しい事はないと、媼の膝にお縋んなさる、場所がと言ふと隱亡小屋だ。

が、光り輝く。

あゝ、出來よう事なら、貴方がたを一對に、活きた鎭守に祭込んで、村中一統が家來眷屬、氏子に成つて、三年打通しに祭禮をしてえものだが、婆婆は然うは成りますめえ——」

其の折から、針屋のお光は、元氣らしいが、疲れた狀して、投出した褄も打解けつゝ、葬禮に使ふ小さな火入の箱を枕にして居た。其のほつれ髮に、布白く額に浸んだ血のあとを見るにつけ、古寺の書院につけ、こゝに開かれた重詰につけ、姬路の城の繪を床にして、禮吉は落人の趣を解した。趣を解して、然も昔の落人の、平和と、愛と、親密を知つた。敗北の歡喜を覺えたのであつた。

（一層二人が、長に其の……。——）

但計り知られなかつたのは、兩親の白き柩の前に、左右に點じた蠟燭の燈の瞬く影と、線香の煙の行方であつた。

權九郎は言を繼いだ。——

——處で……更まつたお願と言ふのは、此まで、世間に侮られ、ういめ、つらいめ、虐げられ、恥かしい目を見なさつた事は、俺どもにかはりのねえ、日かげものの上臈を、面晴れに、若旦那、新聞までが目くじら立てる、先生、可うがすかい、お前さんが、此の上臈の手を曳いて、二人並んで、見せつけて、此を見やあがれ、どんなもんだ、と此の城下中を堂々として練歩行いて貰ひてえだ。——

お光は頷く、露野は俯向いた。

——大鄕子が百人、刀が一百、槍が千本あらうとも、矢でも、鐵砲でも持つて來い。隱亡が尻

押だ。路傍の草木どころか、石も泥も皆味方だ。指も指させるもんぢやあねえ。……縣廳前の廣場を、後生だ。えゝと、（お光に）御新造さんの前で言ふのは拙いけれども、頬邊押附けツこを遣つて、一生の思出に、俺どもを嬉しがらせておくんねえ。——

——今晩は——

——今晩は——

何時の間に戸が開いたか、本堂の暗がりに、ずしり、ばたりと、もの音して、然う言つて聲を掛けたものがある。

と眉を擧げたお光の額の血と、禮吉は瞳を合せた。

また本堂で、滑稽けた聲で、

——お今晩——

と言ふものがあつた。

權九郎が肩で呑込み、

——はゝあ、來せたか。若旦那、いや、御新姐、御懸念なものぢやあねえ。皆、それ、晝間向山に、彼方此方、穴穿り、墓の地ならしなんかして居つて、俺がそれ、天狗の牡丹餅をお振舞申してから、あの徒（大鄕子一黨）が顏色を變へて、御新姐さんと俺等に立向はうとした時だ。嘲笑

つて、俺が、へゝ、鞍馬山聲を掛けると、お墓所に居合せた人足二人は言ふまでもねえ。——山中、彼方からも、此方からも、むら〳〵と若いものが大勢出たので。撲合にも摑合ひにも成らねえで、雙方が睨合つて、もの別れだ。——あの若い奴等が來たんだで。

だがね、大鄕子の一味は、若旦那と上臈が此の寺に居なさる事は、最う突留めて居る事は疑はねえんだから、何時どんな亂暴を働かねえとも限らねえ。で、手配をしたでがすよ。大船に乘つた氣で御安心なさいまし、若いものどもが大勢でお夜伽だ——

禮吉は座を正した。

——お重詰と酒を彼方へ、露野さん。ねえ、姉さん、それから燭を、——

——いや〳〵暗中で腰兵粮、皆馴れた徒でがす。たとへば、其の本堂の方へはお配分をすると しても、藪の中まで持運べるものぢやあがあせん。——」扨は藪の中まで人數を配つた。

——釣鐘堂へ上つてるのは誰だの。——

——八だよ、——

——何、蜂だ。虻ぢやあねえか、——

と、暗中で、ひそめいた聲が聞えた。

權九郎は、うなづき顏で、

——皆、人間ばなれのした、生あつて體のねえ、唯、上﨟や貴方がたの影身に附添ふと云つた徒だ。何事も、御心配は決してねえ。——

時しもあれ、門に當つて、

——痛え、——と仰山に叫んだものがある。

別の聲で、

——えゝ、乞食、こんな處に寢て居やがる、ちよつ氣味の惡い、癩め。——

——何だと、——

——寺の門に寢て居りや、乞食か癩に違ひなからう。——

——待つて居た。乞食が癩でも、肋骨を踏まれちやあ料簡出來ねえ、さあ、來やがれ、——

——來せをつた、大鄕子の奴等。……御覽なせえ、一寸お茶番。——

と大入道は苦笑。

門の騷動がやがて鎭つたと思ふと、裏の藪で、怪しい聲して、

——そうら、天狗の牡丹餅だ。——

驚破、其處へも押寄せた。が、しかし其の搦手も、退く敵を追ひながらの、味方の聲が遠く成つて、

——そうら天狗の牡丹餅だ。——

忽ち寂然と、音もせず。

白鷺の城巍々として、隱亡廓の姬の尊さ。

杖の音コト〳〵と、提灯一つ、障子の破れ目に見えつゝ、袈裟衣の老僧、山の囘向から、里まはりの用を濟して歸山の處。

——ほう——と言つて、門から後退をされたは、其處等に人の影法師を、魑魅魍魎と驚かれたのであらう。

額で颯と數珠を掉つて、

——世尊以是神呪。擁護法師。

我亦自當。擁護持是經者……

月影の霜。雪のむかし。紫の花

六十一

「露野さん、眞個に、一所に東京へ來るかい。」

「……」

禮吉は同じ空屋の軒へ入つて、倒れかゝつて傾いた戸に、餘した敷居に、腰を掛けた。が、鬼あり、魔のあつて、冥々の裡に、露野を守護するかと想ふにつけても、更めて襟を正さずには居られなかつた。

廂漏る月は、明白に屋根の杉林を、冠せた如く空に照して、二人は巣に籠つたやうである。

「眞個に一所に來るかい。」

「えゝ。」

と片袖を絞つて頤へ、

「夢にでも然うなりますと、どんなに嬉しうございませう。でも、私のやうな田舍ものは、極が悪くつて、汽車の途中で消えて了ふでせうと存じます。」

と彳む姿は、月に溶け、草に散つて、其のまゝ消えさうな風情である。

其の姿を視め、面影を見ながら、渠は事實、幻の影と成つて消失せはせずや、と危ぶんだ。

ほた〳〵と、其處彼處に、草鞋が化けたやうに影を落した、いま、醉漢を懲戒した天狗の牡丹餅のあとを見るにさへ、餘りに奇しき緣である。

むかし〳〵釣をして居た、白髪の爺さんを、大きな扶持で手に入れたのさへ、君臣、不思議の

奇遇と聞く。……藍子は空拳にして此の月下の美女を、我がものに、親しき友に、妹に、肉親の如くなし得るは、餘りに冥加が思はるゝ。

兩岸の影、月白く、橋には霜や置くらむと、皎々たる天地に對して、渠は、夢かと疑つた。

（――年久しき記憶である。――）

夢とも、現とも、現實の境とも辨へず、渠は廐野川の此の岸に向つて、一種言ふべからざる追懷のあるのを忘れぬ。……

石は凍て、草は氷つて、一望皚々たる雪の景であつた。

恰も、此の上の丘を天神山と稱する、橋の名もよつて名づけられたのである。が、山に天神の宮がある。其處に梅の林のあるのを、峰も橋も路もたゞ白い中に、ふと金平糖のやうに考へながら、酒もまだ知らず、魚の味さへ思はない、父なきあとの精進の身の少年が、とぼ〳〵、（いま見る位置では）向岸を一人通る。

唯美しい娘が一人、それも唯一人、此方の、此の岸を迚々と寂しく行く。

間には雪の流を隔てて――

兩方の岸を、流の上方へ、上方へ何處までも行く。が、一度も顏を上げても見ないで、姿容は

よく分る。

間には雪の流を隔てて。

並んで行くやうに思ひながら、路の嶮しく、山の深きに從つて、次第に左右へ遠ざかる。

何處を志すのであらう。我が行く方を、音に聞く白菊谷か、とすれば、娘の行く方は、黒百合の峰であらう。

山颪颯として、濛々としきり降り來る白雪に、やがて掻消えて、姿が見えない。

見えなく成ると、百里、千里、互に世が終るまで又めぐり逢ふ時のなく成つた事を知つて、手足は凍ゆるのに、熱い、甘い涙が、ふりかゝる胸の雪を、恰も白銀を溶かすやうに流れた。

其の思、其の景色を、骨に刻み、血に描いて、未だ嘗て忘れない。

あゝ、其の娘が、此の露野にあらずや。

露野とすると、恁う易々と手を携ふるのは、天地の約束に背くのである。

我が運命に逆するのである。

「露野さん。」

「はあい。」

と、姫は愈々藪更ける。

單に其ばかりではない。……

尚ほ稚い記憶を辿れば、上の宮に、山坂を刻んだ、高い三段の石壇がある。其の眞中の小松の平地に、しよろ〳〵と清水の湧く池があつて、小さな太鼓橋が架つて居る。

其處に、燕子花が咲くのである。

山靜に、宮は神寂びつゝも、路は荒れて、八橋の形も朽崩れ、太鼓橋の欄干も缺けて、清水も時に涸々ながら、藻に交つて、たゞ葉ばかりの伸びた中に、一輪二輪、忘咲きに、紫の花の開くのが、胸を抱くばかり可懐しく嬉しかつた。

小兒は、よく一人で其處へ上つた。

村里は遠し、野は廣し、館邸の庭の池はもとより、餘所のもの。町家の兒は、おのづから水に咲く花が、奇しく、珍しかつたのである。

守るものも、垣根もない。

小さな石の金魚鉢一つ、我家の垣に小溝があつて、其處へ移して植ゑて見たさに、名玉を盜むばかり、可恐さも可恐し、震へながら一株を根こぎ

にして、花を抱くや、蝶の如く飛んで遁げた。次の段まで駈下りると、高き社に打驚かす太鼓の音もせず、追つて來る神官の形も見えぬ。

吻と息して、其處の御手洗に溢るゝ水に、手の泥や葉の土を洗はうとした時、唯見ると、石を嚙んで水を噴くのは、赤い口を赫と開けた、金色の青龍であつた。

が、燕子花を取らうとする、是非に迷つて逡巡した間に、白晝早やいつか黄昏れて、日は北海に傾いた。城の森を拔ける鐘が、ゴーンと龍の鱗に響くと、ざわ〳〵と裏山の草が風に鳴つて、峰からずる〳〵と尾を曳いて、活けるが如くはたと睨む。きやつと叫んだ、燕子花を水に投げて、——此の天神橋まで投げられたやうに遁げたのであつた。

いはれなき燕子花の一本さへ。

此の艶なる美女を。

禮吉は我を忘れて熟と視た。

「露野さん。」

「はあい。」

「一層、東京へ歸らないで、お前さんと二人、前塚田圃へ引込まうか。」

と遣瀨なげに身悶して言つた。

露野は一寸身を寄せて、

「まあ。」

「眞個だ。」

「でも。」

「何故。」

「勿體ない、そんな事が。」

「何が、勿體ない。……勿體ないは私の方だ。」

よし、運命に逆せよ、龍も祟れ。

「えゝ、まあ、此處にお掛け、一所に、……」

「あれ。」

しやらんと鳴つて、しやんと響いて、流の面を打つやうな、あれ〳〵不思議な轡の音。月に白銀の轡の音。雲を騎る神馬にや、ひづめは聞えず、しやらんと鳴る。

禮吉は、すつと立つた。

と絕えて、續いて、轡の音。まさしく對岸の曠野の霧を潛ると聞けば、高く中空を抽いた其の

大槐の幹を横に、月に湧いたる駒の影。

鞍に一人、婦人の姿。

肩、弱腰のたよ〳〵と、空を行くと思ふばかり、黒髪の隠れたのは、髻籠むる霧でなく、月影の襞あり〳〵と、練衣か、小袖か背をかけて、すらりと頭から顔を包んで深々と被いだので。

……世を忍ぶやうな形容を、瞬きもしないで見た。

「あツ、お母さん。」

と呼ぶと、草の蜾をずる〳〵と辷つて、蛇籠に撞と落つるや否や、衝と立ち狀に早や枝流の川水を、足を柳に巻かれたやうに成つて、ふら〳〵と渡つた。

霧の海の轡の音。葦間の紅

六十二

時々の水の瀬に、鶴とも龜とも、形は定かならないけれど——過ぎし夏の夜に、此の流に遺失した煙管が、心あらば、おもひ草に成つても生えようと——薄もむら生ひ、草も離々とした中洲の磧が此處にある。

下駄なんぞ何うしたか、そんな事の覺えはない。

禮吉は、づぶ濡の跣足で、ざぶりと水を散して其の中洲を踏んだ、此を越えて、又水を一直線に、對岸へ渡らうとするのである。

實は、一戻りして橋を渡る間が待てなかつた。一生に唯一度、二十年餘り前、同じ處に同じ姿を見た、……今は早や昔、世を隔てた母の面影が、其處に霧の中に朦朧と顯れて、駒が光るのを歷然と見た。其を、誰が幻影と思はずに居られよう。

絶着くには分秒も後れては成らぬ、一呼吸の間にも、消去つては、再び相見ゆる事の期し難い、其の果敢なさを知つたのであるから。

唯、洲に乘つたその脚を、いま亂した流が、千筋の絲に成つて、するく〳〵と搦んで、すつと引く。……我が頭髪の伸びるにあらず、背後から黒髪が、長く冷々と絡つて、ぐいと引戻すやうである。

見返ると、青白く露野が光の瀬に入つた。

玉が散るやうである。きら〳〵と流る、水は、たかく揭げた白脛の白さを裏透して、澄みつゝ走つて、褄の友染の紅が涼しく蜿つて散亂る、。

片袖を脇へ掩いて、片手で緊と小褄を取つた、女氣の水に恐れて、裳は堅く守りながら、淺い

川波の寄る毎に、脛も腰も、ふら〳〵と、揺れつゝ其のたびに崩れさうな、亂れさうな。
解けた衣紋も、おくれ毛も、我が胸に引寄せて、いま見たまゝの美しさ。
流に乗つた足許より、上の空に、此方を見ながら渡つて來る、眉が恍惚と、瞳も大きい。
「危いよ。」
水のさつと鳴る中に、鳴く蟲よりは透る聲で、
「いゝえ、淺うございますわ。」
「淺い……淺いたつて危いよ、危いよ、來ては不可い。」
と強く言つた。
「……」
其處に、ふと堰留められたやうに成つて立つたのを視ると、其の、脛をもぢつて水の中を來る時より、却て息を切つて駈出すやうに感じられて、露野の動悸も我が脈も、戞々と鳴るばかり水底の礫に響く。
あゝ、白山の朝ぼらけに、夏草の霧を飛んだ、其の容子が髣髴と目に宿つて、いづれを影とも幻とも分かず、一條の扱帶の解けかゝる紅色にも、生々と血が通つた。
「……尚ほ不可い。」

と禮吉は爪立ちながら、
「其處へ立つちやあ、早くおいで。」
「參りましても可うございますか。」
と肱を銜へるやうに袖に俯向く。
「可いも不可いもない、早くおいで。」
あれ〳〵、あの鈴の音、と胸を捻ぢて聞澄しつゝ、水の流の、さゝつと近きに、横狀に兩手を伸すと、その探手の覺束なさにも、露野は身を任すやうに手を預けた。
露野の胸は、ふはりと輕く、禮吉の腕に掛つて、濡々とした褄ばかり、磧の露に重みを添へた。
搔据ゑるやうにして、其のまゝ邪險らしく手を離すと、口を利く間ももどかしかつた。
婦人ののつた駒の影は、ハツと思ふばかり古槻の下、霧の海に隱れた。が、消え失せたのではない。鈴の音は、却て近く成つたらしく、向岸なる、松と柳の水の影が、月に綾を織るやうな裡に響いて聞える。が、聞くうちに上流の方へ遠ざかる。
禮吉は、何を思ふ隙もなく、再び、さつと瀨に入つた。中洲で、岐に成る、此の分流の方は、萍の池に小波の立つやうな、いま渡つた如きものではない。
川の名も浪立つて、水も深し、流も急なのである。

尤も徒渉に危険な事はないのであるが、露野なぞが、何として、……

「危いよ。」

「……貴方こそ、……」

と洲の端へ、うろ〳〵と寄る處を、

「あゝ不可ん。」

と繁吹のやうに浴びせて言つた。

「御一所に……何うぞ、私も。」

「危いと言ふに。」

「でも、私は些とは泳げますもの。」

これに、一驚を喫しながら、

「馬鹿な、行先は、冥土だか何だか分りやしない。」

と我ながら規を越すまで、女を留めて激しく言ふ時、冷い水の香が芬と打つて頭腦に沁みた。

……

流は脛を越して、早や、股にまで及んで居る。

急に、川が前後に廣く成る氣がした。

橋も、山も、ずつと遠い。

「でも、何うぞ御一所に。」

と、あの柔順な女が、肩を掉り動かすまで、何故か拗ねたるやうに言つて、そして、ひれふしても肯入れて欲しさうに洲に衝と低く居て、手に草を握つたのが見える。

可哀さと優しさに、血の沸え、胸の湧く聲は、一層激しく、

「不可いんだ。」

と屹と留めた。聲は水よりも、其の人なき月の橋に響いた。

踏む歩も蹌踉と、忽ち凄じい流の力が身に應へて、横狀に押流されようとした。……あとは唯半ば夢中で、こゝに言傳ふる其の月の棧を空に摑んで渡るやうに、手を空に、月を抱く心地がして、胸も肩も眞蒼に光ると思つた身は、どうと龍の背の蛇籠に抱着き、石垣に倒れかゝつて、短い草を引摑み〳〵、其の石垣を岸に攀ぢた。

月も離れて衝と高い。

土手の松を、立ち狀に視れば、其の松枝と、柳の梢に背を渡して、やゝ遙には成りながら、駒も、馬上の影も行く……

其の未だ消えないのを確めて、幻影でないのを認めて、現實の土に我を据うると同時に、露野

は、と見れば、無慙にも、大川の洲に一人凍着いたやうに成つて、力なげに弱腰を倒して、草に俯向けに黒髪を伏せた。

「あゝ轉んだか。氣落をしたか。」

いや、我が手に突倒したも同然ではないか。

また、不思議に、然うした此方の堤が高く、水の淀は淵の色を湛へて、足許の暗いのに、差覗く洲の磧には、瀬とともに早や霧が掛つて、流るゝともなしに、其の、あはれな、さみしい姿を呑まうとする。

銀の矢。白衣の笄

六十三

淵川のぬしにも紛ふ其の水面を這ふ霧は蜿々と、大いなる白蛇の形して、黒髪をはじめ、露野の白い頸脚を、さて呑まうとするのに、婦が萎伏した袖裾の草は、葉を分け、莖を立てて、露に明白に、根に水を巻いたやうな笹の繁りさへ見分けらるゝ。が陰々として、もの寂しい。

唯、其の中に、薄い影のやうな、露野の袖の振か、脇明か、踏亂した蹴出しの色か、帯の模様

かとも思はれて、色紙を折重ねた形に、紅い色が一所、冷く底光して、月に晃々と、不思議に金色の雲母を鏤めたのが、ぱつと目に映つた。

一目見ると……禮吉は、悚然として四邊を見た。白羽の矢が、ひやうと一條、颯と來て、其の紅いのに弗と刺つ、と同時に其の姿が消え失するぞ、と感じたのである。

たとへば、あはれに、床しく、可懐い月影が、木に水に謎を白銀の光で掛けたやうな鞠唄の一條が、ふツと此の世から失せ去つて、訪ぬるよすがのないやうに……

轉瞬の間ながら、禮吉が猛然として憶起した、恰も此の豫言かと驚く事實がある。

七八歳の頃であつた。

町の氏神の社の境内を隔てた、此の麻野川に臨んだ、一つ丘の如き廣大な地廓を占めた邸があつた。

黒門の奥深い式臺の前に——思へば矢張り年經たる槐の根から、二株に分れつゝも、幼い目には、大空を仰ぐばかりの樹があつた。

二つばかり年紀上の、其の邸の兒と、友としてよく遊んだ。

槐の横に、木戸があつて、其處を入ると一面の芝生で、芝に巌組して、巌に牡丹が咲く、其の

中に石の反橋が掛つて居た。……但し杜若も植ゑなければ、葉も伸びず、池もない。石橋の獅子の眞似、やはらの搏戯、太刀打をして遊んだ。組んで落ちても、轉げても、此の芝の雲あるために、身は蝶よりも輕かつたのである。

が、それは措け……此の中庭を、もう一つ木戸をあけると、其處は廣々とした背戸で、林檎、李、梅、桃など、果ものの樹の數林の如く、瓜、茄子の畠もあつた。垣根外との地境に近く、四邊の町家からは何の窓からも皆見えた。こんもりと繁つた大きな椎の樹が一株。

——あの中に天狗の巣がある——

友は然う言つて、友自らは敢て恐れないのを誇つた。

瓜の畦には大蛇が棲む、竹藪には狐が鳴く、茗荷畠の下は、土龍の御殿ださうである。

——さあ、背戸へ退治に行かう。豫ての手練は何のためだ。——

秋の暮方の事であつた。

石橋の上で、恁の企を起して、友は半弓を持つた。禮吉はおもちやながら、小兒に手ごろな薙刀を脇挟んだ。

時に、芝生の飛石の數を隔てた、母屋を離れた離家の、數寄づくりなる下座敷の縁に近く、簾を捲いて、友の、上のと、中のと、美しい姉が二人、カランカラ〳〵と賽を振つて雙六をして遊

んで居たのが、二人の扮装を視越して、莞爾すると、

——瀧夜叉め——

と友が言つた。

二人揃つて、腕を出して、たゝいて見せつゝ、まつすぐに木戸を出た。

薫のするまで、藤豆の花盛。

——そら〳〵、あの大きな冬瓜が動くです。すぽんと射るかな——

と半弓を左手に立てたが、

——お祖父樣に叱られた——

と其の半弓で、頭を敲いた……

椎の樹が、眞向うに——蓊鬱と圓く繁つて、小山を伏せたやうに見える。……其の根から、薄いが、むく〳〵と煙が立つて、土手を突いてずらりと續らした生垣に、二條に分れて、夕暮を罩めつゝ、淡く靡いた。

——天狗が御茶を沸すの？——と禮吉が低聲で訊くと、

——うゝむ、魔が火を焚くのは、樹の天邊です。……根の處だから彼奴山賊だ。……手練を見せて遣れ——

と弓にカツキと引番へた……

——唐土の楊雄よ……日本ぢやあ鎭西八郎爲朝だ——

——えゝ！　若樣——

と椎の樹がくれの煙の下から、高い鼻のかはりに、長い頤を、ぬつと出して、慌てた聲を掛けたのは、邸の老僕で、其處に木の葉を焚いて居たので。

——わツはツはツはツ——と友の若樣は、豪傑だから高笑をして、

——今度は竹藪へ行つて妖怪退治だ、——

途中なる、茗荷畠の土龍如きは、ものの數でもないのだけれど、歩行いて大分間のある、背戸も西北の隅なる其の大竹藪は、眞晝眞暗なほどの難處であつた。然も晩景。

——唔いんだね。——

と面打つ陰氣に、思はず言ふと、

——富士の人穴でも、八幡の藪不知でも、僕が附いてら——

ぐる〳〵廻つて、ざわ〳〵と分けつゝ、大きな蜘蛛の巢に、時々、玩弄品の面が二面引掛つたやうになりながら、しやがんだり、ゆがんだり、ふう〳〵呼吸を吐いて奥へ入ると、落葉朽葉の溜つて、蔵草の香の蒸すやうな崖へ出た。覗くと溝の深い底に水があつて、藪越の西日も早や弱

弱と成つた薄あかりに、小流が雜草をちら〳〵と潛る……

向うに、低い崩垣の、其處にも生えた此の藪のわかれを隔てて、たふ〳〵と響く流の音は、麻野川が町中を過ぐる瀨なのである。

唯、此の溝の別れが、大川へ灌がうとする角あたり、暗いより眞黒な草の下に、水に浮いて、ちらりと眞紅な色が見えた。

颯と飛ぶ翡翠の影かと思ふのが、見直しても其のまゝ消えない。……そして、晃々と其の紅に金色の雲母を鏤めて、暗い處に、深く光つた。

——ぬしだ。——

池が、沼、淵が、溝でも、ぬしと言ふものの、幼兒の耳に響く驚異を想へ、ばさ〳〵と藪を退る處を、

——見ろよ、臆病め。——

と友に罵られて、恐々、遁腰を宙に据ゑて、密と覗いて、ちよつと見て、我を忘れて、何とも知らず、あゝ、美しい、綺麗だ、と思つた間もない……

友の胸に、ブンと鳴つた弓とともに、兵と飛んで白羽の矢が、其の紅に衝と當るのが、却つて我が胸に響くと齊しく、色はハツと消えた。

が、友が慌しく遁出した。

藪を出ても、目が眞暗であつた。

——鯉だよ。——僕ん許のぬしなんだからな。知れると叱られら。……默つて居たまへ。……

あいつが暴れると、僕たちより大きく成るです——退治たなあ——

と一矢殘して持添へた、半弓なりに腕を敲いて、

——へむ、汝は弱いぜ。……何うだ、見ろ、書寫山の鬼若丸だぞ。……知つてるだらう。武藏坊辨慶だ——

——それぢやあ僕は牛若だ——

——ちえつ！

其から喧嘩した。口も利かない。

禮吉が、一人黑門を、神社の境內へ出ようとすると、

——受けて見ろ——

禮吉は屹と立つた。

友は、槐の大樹を小楯に、半ば木がくれながら、半弓を眉の上に引絞つた。白羽でせめて、きりきり其の唇の緊るのが見て取らるゝ。

——あつ——

と飛ぶと、裾を拂つて、薙刀の下に矢が落ちた。——老僕は魂消たが、鏃のないのは、よく知つて居たのであつた。

……大川に續く、友の邸の溝は、國の藩主何代の時か、時の幕府と隙があつて、山を閉ぢて戰はうとした時、名譽の參軍が、城の追手から十五六町張出した、要害の掘割で、驚破と言はば大川の水を引いて湛へようとしたのであるから、唯一幅に過ぎないが、深さは深い、祕密の堀が、その後、數の增す町家の下、藏の底、厠など人知れぬ處に朽ちて埋れた底を、用水が流れて大川に灌ぐのであると言ふのを——後に聞いた……怪しいぬしも棲むであらう……

が、友が藪の溝に、紅い色を射た當時は、同じ色の帶が、見隱れに大川を流れた。けれど、其の身投の女は、何處にも死骸が上らなかつたと言ふし、いや、心黑いものが衣だけ剝いだ、死骸を裸で流したとも言ふし、其の藪の裏なる小さな芝居小屋で、過失つて衣裳を流したとも……四五日是沙汰があつて留んだ。

其の矢、其の矢が、其の色を映した露野の姿に、……

否、單に露野ばかりではない、白羽の矢は霧を切つて、我を射伏せる心地がして、禮吉は瞬間、

堤の其處に立すくんだ。

忽ち思返したのは、隱亡廓の姫を守護する、可怪い野川の神である。山の立樹も人影に見える。

「別條あるまい。……詫は後で――」

尚ほしかし、前途から射掛くる矢に、立向ふ思で、腕を擧げて、支へて額に當て狀に、半ば目を閉ぢて、衡と洲の草の紅の露を見棄てた。

渠は身を以て投出す如く、馬上の婦人を追つたのである。

駒は束の間に遠ざかつた。道の蜿に影も見えない。

しやらんと幽に轡の音、松の梢で鳴るかと聞ゆる。堤に枝をさしかはす處を――片側に田畠は次々に展きながら、見る目は却つて、むかし、あの邸の大竹藪を潛つたやうに暗かつた。

其の松、柳、松、柳。やがて松ばかり一處、堤に投げて、月下に小さな影で一人出ると、川もやゝ左に隔る。田圃は右に愈々廣い。山國の此の裂目は、恐く雲ならでは白山の麓まで遮るものはなからうと思はれる。

渺々たる霧の中に、堤の路は、一條見えがくれに狹く成つて、早や處々大なる巖角に切れて、切れては續く。

切れ目を結んで、又一つ、低く架けた橋がある……渡る音が巖に觸れ、流に響いてカラ〳〵と

鳴ると言つて、鐸緒の橋と稱へるのである。

橋に、名所の名のある處は、水も溪に深からう――此の前途、此の奥には、二股尾にも、白菊谷、小黒部にも、最早越中の山、飛驒谷まで、橋と言ふ橋はないと聞く。

其の鐸緒が、白絲を曳いたやうに、すら〳〵と靡いて、流の音に搖るゝかと思ふを前に、駒も姿も、霧を渡つて浮いて行く。

月も、薄雲も一所に行く。

清らかに、涼しい其の薄雲は、水にも田にも、ちら〳〵と、散つて、映つて……近づけば其が堤にも石にも宿る。白蓮の花がぱつと咲き、且つさつと散るやうで、禮吉は脚を爪立てた。

駒の尾も、たてがみも白く輝いた。

馬上の姿に、色はなく、すらりと被いだ白衣の頭に、黒髪の限は映らぬが、月影は、其處にのみ、鼈甲の艶を照すやうである。

ひづめの音の、我が跫音を消すのを知りつゝ、渠は暫時は口も利けなかつた。

「あツ。」

古風な案山子の、屹と弓を番へた、頬摺の影に喫驚して、思はず聲を漏したのを機會に、渠は端ぎながら呼んだ。

「馬士さん。」
駒が大きな巌に似て、間に挟る。
「一寸……」
「……」
「一寸、馬士どん。」
駒が尚ほ、銅に似て、路の門を塞いだ。
禮吉は爪立つばかり。
「馬士どん。」
と、やゝ高く呼んだ。
「うはッ、はッ、はッ。」
いま呼びつゝ、駒の横腹を傍へ通つて、出ようとした端を、此の梟が笑ふやうな、唐突のしやがれ聲に、びしりと又灰色の羽で拂はれた。
路傍に、野萩の中の、地藏尊。
「うはッ、はッはッ。」
禮吉は知りつゝもぎよつとした。重ねて又馬士を呼んだのに對して、此の笑聲は、地藏尊が噴

飯されたかと思つたのである。
「はい。」
と故とらしく駒をあやつつて、けろりとして行く。
扨て、留むべき程のものか。
「馬士どん。」
「何、これ。」
引叱られたやうに思ふと、以ての外穩で、
「へい、人間ぢやあござりましねえ。」
「……」
「大丈夫……はい、はい……人間ぢやあござりましねえ。」
「それは、神でも佛でも、」
と其の口について禮吉が言つた。
「えゝ、お前らに饒舌るでねえだ。」
と突慳貪に撥かして、
「何も、憂慮さつしやりますな。馬士どん、馬士どんちて、はい、私等を呼ぶものは人間ぢやあ

ござりましねえ。」

あゝ、馬士は、馬上の白い被衣した婦人に言つて、渠を人間でないと言ふ。

「えゝ〳〵、何、これ、人間でないちても、可恐がらつしやりますな。狐でも狸でもねえで。……はい〳〵。」

しやらんと。

「そこに、靈驗な地藏樣がござらつしやる。地藏樣にも聞かつしやりまし。……案山子でござりますだよ。はい、馬士どん、馬士どんと呼ぶ奴は……何が、これ、夜さり夜中、ぽつねんと獨り田圃に立つて居りますで、妖も、人間の形をしとりますだけに、秋の長夜ぢや、えら寂しがつて、たま〳〵通りかゝるものを、時々は、あゝしての、もの、呼ばるものでござります。山家、山路、山奥ではの、それも又呼ばれるものの、氣慰みでござります。はい〳〵、はて、舌を出いて化けた處で、たかが案山子ぢや、うはツはツ。笑ひ棄てざまに、老いたる咳。

「ごぼり〳〵、こぼん、うゝ……はい〳〵はい。はい。」

「案山子です。」

禮吉は駒の横を、胴の半ばまで迫つて居た。聲が近いので、俄に婦人にものを言つたやうに聞

えた遠慮から、言直して、

「案山子だ。……案山子だから、聞いて下さい、一寸聞きたい事がある、……馬士どん。」

「馬士どん、馬士どんと……案山子だら、はい、はい、其のほかに澤山饒舌るもんでねえだ。……えゝ、馬士どんか、……はい〳〵、はい。また馬士どんか——はい、はい。……

馬士どん、馬士どん、此方の森から、向うの森まで、道のり何ぼ。

丁ど道のり、二里半餘。

二里半餘をいくらで參る。

げんこで參る。

げんこと申すはいくらの事ぢや。

五百錢の事ぢや。

五百錢ぢや高い、またぎに負けろ。

またぎと申すは、いくらの事ぢや。

二百錢の事ぢや。

二百錢で行くなら、私のお馬に、私が乘つて、ヒンヒンどうどとめかして參る。

此奴、太い奴。其へ直れ、手討にいたす。

おつと承知々々お手討ならば、饂飩か、蕎麥か、大平、卓袱、鴨南蠻。……

馬士が、はい、殿様に勝つた處でござりますが、何これ、案山子が化けた處で、うはツはツは

ツ。」

ごほんと咳く。……

案山子は……案山子は——其の母が、炬燵で、また日南の縁で、身に煩ひなく、病なく、機嫌のいゝ時、うたつて聞かせて、いま其の聲が耳に殘るのを、馬士の口から聞くと齊しく、滑稽けた唄に、胸を絞つて、涙ぐんで、其の馬士よりは、仰いで、月の沁む白衣の、露に際立つた姿を熟と視た。

餘りの事に、腹立たしいやうに口惜い！……隔つるものが魔にもせよ、鬼にせよ、母に似た姿は、我が母に似た姿である。馬士が何を知る！……

禮吉は、小兒のやうに、大きく睜つた目に一杯の涙を湛へつゝ、しがみつくやうに、が手は密と薄青い荷鞍の上にすらりと垂れた衣の端を輕く曳くや、堪ふまじく、得ならぬ、心ゆくばかりの留南奇の薫が、はつとすると、氷のやうな羽二重の手觸りに、我が血が赫と紅に湧く時、月を渚が打つばかり、白衣の姿がさつと搖れた。

「あ。」

とばかり、さながらに、刻める天人、女神に、聲あるか、と聞くかとすれば、

「何をするだい！」

と荒く喚いて、つと引向けた馬の面とともに、馬士は離さぬ手綱を其のまゝ、向顱卷にしさうな見脈。もうろく頭巾の裡に目を光らして、横狀にひよこりと來て、

「不可ましねえ、不可ねえだあ、これ。」

と胸を突いて、突退けながら、

「はて分んねえ。山家ものの私等がの、これ、お前樣がたに抵抗うて、理窟ぶつではねえけんども、餘りちば聞分けのねえ事だ。何が、お前樣がたの目から見さつしやつたら、古蓑とも破笠とも思はつしやるべい、こんな山家の爺が、何を見損うて、お前樣を案山子と言ふべい。

可えかの。

雪邑樣の旦那樣でも、御親類方の顏でもねえで、お館に、はい、勤めしさつしやる人か、それとも、御緣者分だかも知んねえだが、あんだけに、堅え／＼約束しただ。の、どんな事が、はあ、あればつても、途中すがら、傍へも寄んめえ、また口を利くめえと。

そりや、はい、お身體を案じさつしやるは無理もねえだが、其の案じ事も、心配事も、城下町中、仕方も法も盡きたから、恁うして山へござらつしやるだ。

途中は措けさ、山へござらつしてからも、はい、鹽梅のよく成らしやりまして、めでたうお館へ歸らつしやるまでは、親子、兄弟、旦那樣にも、決して、お逢ひなさらねえ約束だ。何も、はい、私が言ふではねえ。が、何としてぬしたちに、お逢ひなさるべい。口い利く處でねえ、人らしいものが傍へ寄つても、どんねに、其が御心痛だか知んねえではねえかの。だで、私が無え智慧の才覺して、ぬしをば案山子と立てごかすだに、鳴子の雀ぼども肯分けのねえ、何の事だ。

こゝで、ぬし等に、お顏さ見せての、話い打たつしやるくらゐなら、何を道樂に、山奥なんぞへ……立派なお館にござらつしつて、御典藥で、養生だよ。此とて私等が言ふではねえ、旦那樣はじめ御親類方と、堅くなさりました、夫人樣の御約束だ。

……

もう、御自分では、婆婆を離れた氣で、白小袖で居さつしやります。お姿につけてもよ、ぬし等が寄りつく法はねえだ。が、何としても、お身體へ觸らうとするならせい。私等が馬に、私が、ちやんと預つた、誰方樣でござらうと、荷鞍の端へも寄着かせねえが、何うするだ。」

爾時、——

「お爺さん〳〵。」

と、靜に言つた、しかし禮吉は聲も胸も震へて居た。

世に誰か、生れると知つて生れて出よう。不思議に逢ふのに不思議はない。……渠は今は、明かに馬上の婦人を、月の中なる雪邑のお楊と知つた。

生命をかけた戀なれば、見ても立處に消えもすべき其の身の、尚ほ消えないのを怪むほかには、馬士の甚兵衞である事さへ、些少も怪しむ氣はなかつたのである。

渠は覺悟したやうに、また靜に言つた。

「白菊谷のお爺さん。」

「や。」と目で銜へて、鼻で舐めた、馬士の甚兵衞は、手綱とともに呼吸を引いて、

「立木の坊樣、坊、立か。」

「お爺さん。」

「此は何うぢや。」

と頭巾を剝ぐなり、地を嗅ぐ馬の鼻とともに、芋苗葉のやうな腰を落いた。

「何うしてなう、こねえな處へ。」

「案山子に成つて、」

思はず言つた。言つたのは、親仁に怨みを言つたのではない。渠は心に信じたのである。

「隠蓑、隠笠、金の弓、お寶の案山子！」

と皺も顔も刻んだが、縦に其の弓弦を張つたやうに、馬上の夫人と、禮吉の顔をまつすぐに目で見張つて、しばらくして、

「えゝ、不思議の、因縁ぢやの。」

と眉を伏せると、落葉したやうな、手の甲に、ほろりと泣いて、

「待たつしやりまし、……えゝ、待たつしやりまし。」

と、むず〳〵と向を替へ、つくばひなほつて、

「えゝ、夫人様。……一寸、馬を留めまするで。……地藏様も御覧じまし、些とも、へいお憂慮な事ではござりませぬ。これはもし、私どもが、親子も、孫も一方成りませぬ。……」

禮吉は、ヅキ〳〵と胸が疼んだ。

「一寸もの、話をしますで、御免されませ。えゝ、くどうも申しますなれど、決して、へい、お心遣ひなさりますな。……立樹町の麻川ちて……」

「あゝ、お爺さん、」

と身悶して留めた、流を渡つた裾の雫の見すぼらしいのを、いまはじめて心付くとともに、禮

吉は冷い汗を流して言つた。

「……貴女は何にも御存じない……」

「はあ、なれど、御安心をさせませいでは。」

と、獨で頷いた皺面を上げて、又熟と禮吉を瞻つて、

「坊様、どねえして、なう、こげいな處へ。」

馬の頭をこき撫で狀に手を掉りながら、

「へい、案山子ぢやなんて、言はねえでよ。」

「月を見て居て、」

「ほう。」

「天神橋で。」

「ほう。」

「然うすると……お爺さん。……」

「おゝ〳〵。……」

「然うするとだね、お爺さん——、いつか、いつかの、あの時、……」

と禮吉半ば目で言つて、

「あの時に宛如——月は二つはないけれど、水に映る影よりも、あり〳〵と其のまゝの姿を見たんぢやあないか。」

「母上様だね。」

「覺えて居るかい。」

「はあ、忘れましねえ。」

と、大なものの摺寄せる、馬の横面を、すぽりと、敲くやうに平手で撫でて、

「此馬が先々代の馬の頃ぢや、久しいあとだが忘れましねえ。……私等もの、恁うやつて、夫人様のお供のしてお館を出た時は、我が身で、我身も、はて世の中には不思議な事も出來かるだ、御大家の夫人様を私が馬で、私が山さへお供するのはと思うたがの、はい、坊様が言はつしやる其までは氣は付かずに居つたでよ。……何が、町端の野原で、あのお前様、大木の下を通つた時、薄暗い葉の中で、月明をふかりとの、此のお姿に映さしつたのを拜んだには、私等あツと打魂消て、あれまあ、此の世界が二十何年後戻りをして、何の事はない極樂の道を二度歩行く氣がしただ。因緣だ、道理だ。」

と唐突のやうに、がツくりと頷いて見せながら、

「其處で以て、坊様は。」

「僕はもう。」

とだらしなく小兒のやうに、

「突如、川へ飛込んだです。」

「ほう、何でや。」

「見たのが、川向うの土手からだつたからね、橋を廻るのがまだるツこかつたし、それだし、昔からよく恁ういふ場合には、中に大川が隔つて、それがために傍へ寄られなかつたと言ふ話を、いくらも聞いて居るものだから。」

「おゝ、緋の袴めしたのや、美しい裲襠引張らつせたのかの、富士の人穴の繪にもあるだよ。何でもはい、不思議な人に逢はうとすると、前に大きな水があるとの、えゝ——夫人様。」

と甚兵衞は、話の中に眉を仰向けに、鞍の上へ笑顏造りに聲掛けて、

「何にも氣に掛けさつしやりますな。十萬億土の噂でもするやうでござりますが、はい、此の坊様が、大に亡く成つた母上様を戀しがらつしやる話でがすでの、此處はもし確に鐸の緒橋の處でがすで、はい。」

と調子高に、又聲を密めつゝ、

「ほれで、坊様は、どねえさつしやる。こんな處へ來さつせえて、」

「お爺さん、私は餘りに可懐しい、可慕しい。……」
「おゝ。」
「人間でも、狸でも、犬でもない、案山子だと思つて連れて行つてくれないか。」
「や、又其を言はつしやるかい。」
「否、決して拗ねるんぢやあない、案山子だから。」
「はて、まあ何處へ行くだ。」
「あの時と同じに……白菊谷まで。」
「えゝ、當事もねえことを。其處まで婆婆は逆戻りは出來ねえだよ。馬にめしたも、お姿も似てござらつしやるちて、坊様の母上様が此の世へ歸らしつた次第ではねえ。——此はお館の夫人様だよ。」
「失禮ながら。」
と禮吉は、やゝ向直つたが、
「存じて居ます。……だから人間と思はないで、案山子も、それも跟いて歩行くのがお可厭だつたら、澤山の案山子が馬の行く路傍に幾つも一列に成つて立つて居るのが、一つに見えて歩行くのだと、其の分にして許して下さい。許しておくれ、お爺様。」

「夫人様。」
甚兵衛は捻らうとした煙草をやめて、其の掌を揉みながら——こゝで禮吉の母が、渠を伴つて、ともに白菊谷に赴いたいはれを語つた。……要は、禮吉の意を體して、馬上の夫人に、同行の許を求めたのである。
少時して甚兵衛は、夫人に揉みつゝあつた手を、ぶらりと力なく禮吉に下げて言つた。
「不可ましねえ、はい、坊様、こりや私等が間違えだ。……料簡違えしましただ。初つから、貴女にお願のうするだけの事はなかつた。見さつしやる通り返事一つ打たつしやらねえ。人にものを饒舌らせて、一言も言はつしやらねえ、そでねえ、御方ぢやとの、怪我にも坊様に思はせたら、そりやはい私等の遣損えだ。もの、勿體ないと思ふほど、馬士よ、爺よ、と貴女がたのやうでもねえ、優しう言葉をお掛けなさつて、女中はしたの手も多いに、端近にござる時は、お茶一杯も、お手づから、こんな泥土の手に下されるお方ぢやで、可いかの。
母上様を慕はつしやる、坊様の心を汲んで、口も利けねえ、お返事も成んねえ、斷るすべを御存じねえだで。や、貴女に願立てするがものはなかつたと、私等が言ふは此處の事だ。深い様子があらつしやつて、……白菊谷へ清水浴びに行かつしやる、間さの、親兄弟、旦那様にも、一目

だつて逢はつしやるどころか、誓文ものも言ふまいとの。……」

禮吉は沈んだ聲して言つた。

「知つて居るよ。」

「其がの、一通りや二通りの次第ぢやあねえだ、何が、お生命にも係らうほどの事でよの。」

「かさねゝ失禮ですが、醫師にも、お見せなさらない。……心ゆかしの藥だと言つて、此の川の姫鮒とかを、底を浚へて、捜すんだけれど、それさへ、なか〳〵お手にはひらないと伺つたんです。」

「それぢやゝ。」

と頤の下で手を拍つて、

「何が其の姫鮒と言ふものが、白菊谷の菊の雫で頭に花を唉かすと言ふだ。……雫を飲んだ鮒でさへ利くものぢや。ぢかぢけに其の清水、其の流れに、お身體を浸しなさらうならの、拭く處を洗ふのぢや、洗ふ處を流すのぢや。目の前に御本復は知れた事よ。……私等もの、何一つ知つたでねえが、其の姫鮒の噂から思付いて、豫てのお出入、不斷したゝかの御恩報じに、斷つておすすめ申した次第だで、くどいやうながお館にござらつしやると同じやうに、誰にもお逢ひなさらねえ約束だよ。……大概樣子は分つたんべい。……だによつて、此處は坊樣、あきらめなさろ、あきらめてくだつせえ。よ、私等も賴むだ。」

賴む爺は、禮吉の母のために——甚次郎……其の子を一人、半ば殺したほどの山の中なる神である。

「……」

「此處さ道は狹うても、何が天下の往來だ。俺が足で俺が行くと言はつしやるまいもんでねえだが。」

「いや、そんな事は誓つて言はない。一人立つて歩行くどころか、いま唯かうして、ものを言ふのも、お爺さんの孫の霜ちやんに、生命を助けられたお庇だもの。」

と其につけても涙ぐんで、しめやかに聲が曇つたが、

「あツ」と云つて、胸を反して、路傍の草に片手づきに胸を開いた。

駒がツト頭を月に擧げたのである、其の鬣は霧を拂つた。

「どう……此奴めが。」

手綱を取つて立狀に、

「山戀しう成つたんべい。はあ、坊樣よ。何事も、貴女の心を察しての、あれ、見さつせえお袖が震へる。……可憐げな、お寒さうな。夜風がお身に沁みるだつべい。」

「濟みません——濟まないけれど、私は何うも。」
「何、何が、何がの、夜風がお身に沁みる分だら、むさうても馬士半纏、此の綿襖など被せても進じよ。……はて、はてな、こりや、鐸の緒を橋の鳴る、風が誘つて、りん〳〵と……」
地藏の萩が下伏せに、駒の背おろしに野分して、月も痩するか、白衣の姿。颯と振るたてがみに漾ふばかり、鏘然として轡の音。
「橋が鳴るか、お爺さん、馬の轡が響くんだ。」
と仔細は知らず、急に攀んで眉をしかめた甚兵衛の、面色の懸念さに、打消すやうに且言つた。
「うんにや〳〵、其の橋の鳴りやうで、——あれ上が暴風雨ると言ふだ。おゝ、鳴るわ、巖に異様に流が響く。……や、東の空を見さつせえ。月の影が暗う成つた。——道理で馬が歸途を急ぐぞ。七十九歳で此はぬかつた。——坊様よ、氣いつけて。」
「……」
「畜生、いきばれ、そりや稼げい。」
と、手綱の端を衝と當てる。
むく〳〵とひづめが上つた。
「あゝ、お大事に。」

と絞つた聲も、手綱のたけが早や隔たる。明星聲あり。
「禮吉さん。」
淸しく、優しく、しめやかに、
「——御堪忍——」
と、被衣の裡を透明る……
其の黒髪。瞳。眉。
月は輝き、駒が光つた。野分白く、水靑く、小草の露の飛ぶひづめに、人もなき橋の鳴る時、空に練衣の袖はら〳〵と、濡れたやうに、其の玉の如き聲を包んで靡いたが、あしずりして見送るものの頬を撫づるは、横に流るゝ霧であつた。

六十四

大雨。朝晴の雁來紅。グレーの詩

「豪い雨ぢやつた。」
「可恐い降雨よの。」

「鐸の緒が夜さり鳴つたもの。」
「流に泡沫も浮いて見えたよ。」
「月夜には珍しい。」
「あの降出したは何時頃ぢや。」
「然れば、彼これ三時であつた。」
と口々に言交はす——昨夜お楊を乗せた駒の、別れ際に月光を浴びて、其の棟を躍越えたやうに、いま想はるゝ——霧の裡に深く眠つた鐸の緒橋の土手際なる一軒家の建場茶屋に、——恁うした雨を語合ふ村里の人たちの目に、禮吉の此の早朝の、容貌と、風采は、怪しき狂人の如く見えたであらう。
着ものは霧に朽ちて、露も雫も乾しあへず、何時何うしたやら帽子もなしに、一本引着けた洋杖も、縋つて辿る杖に似て、父母の白骨を守つて以來、夜もよく寝ない目は血走り、頤も頬も薄汚れて、顔色が蒼白い。
（——昨夜の宿りは凄かつた。——）
一里塚に籠つたのでもなく、辻堂に寝たのでもなくである。が其處には最う親たちの骨はなかつた——假の柩は、あの夜一夜、あけて後、お光の針屋の方へ、露野とともに引取つたのである。
で、其の露野とは……あんな氣の婦ゆゑ、お光も勸めて、權九郎の意を體して、隱亡廓の姫君と手を取つて——分けて、それらの……を、侮辱し嫌厭し人外視する——大々名の大城下を歩行くのに、然まではと白晝を遠慮して、昨夜は夜深きまで思出多き麻野川のへりを逍遙つた次第であつたが……
とすると、何が故に、兩親の柩も、お光も、ともに露野もあるべき、針屋へは歸らなかつたらう。
「決心した……」
白菊谷の天暗く、霧に隱るゝ駒を送つて、石の如くに立つた時。
「私は覺悟した。」
早や目を掠め、我に迫つて、上流に黒く擴る一抹の雲に追はるゝ如く土手を町へ引返す時——
渠はあまたたび心に叫んだ。
決心とは、覺悟とは、世の規、人の矩も避けよ、……鬼も魔も道を開け。斷じて翌朝は出直して、白菊谷に分入つて、いま一度人妻を見る事である。
「禮吉さん……

御堪忍――」

玉、白銀にも黄金にも、譬へんものなき其の聲を聞く事である。

此の決心、此の覺悟を、裂くばかりに胸に籠めて、お光に、露野に――もう其の人は磧のおなじ處には影もなかつた。たゞ流の音が一際凄じく成つて、水は早や白濁りに濁つて居た、大方は隱亡廓の姫の守護神が扶けて橋を渡つたであらうと思ふ――露野に、のめ〳〵と逢はれようか。親たちの靈も許すまい。

夜は更けた。

禮吉は、宿つて、夜の白むまでの雨露を凌ぐのに、其の古寺を選んだのである。

が、其處とても、表向きおのれを名のつて、あの老僧を驚かすべき數ではない。

如法の便宜は、彼處の寺は、夜もすがら鎖さぬ門、戸に隔てない御堂であつた。

途中は、大川の音のみ高く、町々を出つ入りつ、路に川を見る處は、下流に近づくに從つて、次第に其の濁を增した。

古寺の小路に曲る時、立別れた岸の柳は蓬に暗く、月の色も、流も、どんよりと薄赤かつた。

はじめは、御堂の內までもない、石榴の枝を賴む木蔭で、額の掛つた觀音格子の外に、唯廂ばかりを借りて、踞まつて夜を明さうと思つた――門を鎖さぬと言ふ老僧にも、事がらは渠をして、

然までに遠慮させたのである。

が、最う、古寺の小路を、心咎め、氣怯れに、何となく、夜更の跫音もひとり忍ばれつゝ、半ば入つた頃から、二粒、三粒、ぽつりと落ちた。

空は月明も、星もなく、濃い朧と成つて、川ある方は早や眞暗であつた。が、門を入る頃は、ざつと掛つて、肩をすくめても、背を縮めても、なか〳〵堂の軒では凌げなく成つたのである。渠は階をにじり上つて、賽錢箱を探當てて、吻とした時に……不思議に、其のあたりに、ものの氣勢がして、ひそ〳〵人聲が聞えるやうな氣がしたので、

「御免なさい。」

と世にも憚る聲して言つたっが、素より應ずるものは蟲の音もなかつた。

偶と、

「あゝ、繪馬の繪がこんな時。……」

眞夜中には、話合ふ。……惡い妨害をした……濟まない心地で、片隅に小さく成つた。

雨はどしや降りにどツと寺を包んだ。

藪よ、竹藪にかゝる音、卵塔よ、卵塔に流るゝ音、屋の棟よ、屋の棟をたゝく音と、聞靜めたのも束の間で、忽ち轟々〳〵と降埋める。大川に人の形に立つて、寺を抱へたやうであつた。

お楊を乗せた駒の、波を泳ぐやうな幻影が、目に映ると、漸と花瓶の花と、葉の繁つた彼方に、金網の目を組んだ燈籠形の小やかな常燈明のあるのが目に着いた。

眞暗よりも、彌が上に不安である。人の呼吸十ばかり數ふるうちに、大きく脈を打つては、轟くばかり尚ほ降り響く激しい雨に、疊の目がぴた〳〵と瞬をして震へると、臺に積んだ堆い柄杓が、ばく〳〵ばく〳〵と口を開けて、やがて來る浪を呑む氣構への、四邊は一面の沼、池、湖にもなりさうである。

不氣味さと、胸騒ぎに、靜坐に堪へず、居堪らなく成つた渠は、蹌踉と立つた。

近々と御廚子の下の板敷に、本尊の袖に縋らうとしたのである。

古疊を密と通ると、明滅、陰々として、秋の螢よりは、やゝ赤い、蛾の血の燃えるやうな、常燈明の幽な明に、銅鑼、鐃鉢、木魚を見よ。

かくまでの大降大雨の眞夜中には、不可思議な事をする。もの凄い形をする。が、それは、言ふまい。……佛前、神前の樂器の妖をなすいはれはないのに。——

（鮮水楊枝）

字を視て人を可懐んだのでさへ、前日は、白晝亂倫のものおもひする渠を驚かした古物であるから、將に其の人妻に逢はんとして、こゝに雨宿りをしたものの、本尊の扶助を得ようとする身

勝手を、怯して取挫がうとしたに相違ない。……

しかしと齒噛をした。が、渠は、しやにむに御廚子を便つた。

ドーン、——

思ひも掛けず、唐突に、屋根が拔けて、其處へ瀧が落ちたやうに太鼓が鳴つた。

「はつ。」

と引呼吸についた手を、其のまゝ板敷に這ふ如く、辛くも石榴の林に入つた。

渠は禮拜して居すくまつた。

雨はどう〳〵と降りに降る。

然ばかりの雨なれば、音に響は亂れたが、雷鳴も交りはしないが、隙間漏る、暗夜に電光さへ閃くやうで、しばらくは、唯大瀧の底に閉ぢられた。石榴の葉の金色と銀色を、世を離れた巖の角に飛沫の激するが如く見たのである。

一秒を三十分、半時を三時の思ひ。

渠は針屋の納戸を思つた。其處に、お光と露野を思つた——父と母を思つた。……

……遙に、又遙に、かゝる時、おなじ衾に籠るべき東京の家のお橘の、張と意氣地のある瞳を思つた。

が、此の心、此の思ひ、お楊を慕ふ此の心、此の思念が留まずんば、其のいづれにも、一人にも、誰にも、救はるべく、助けらるべく、慰められるべき身ではない。

渠は石に成つて、墓に成つて、身に青苔の生ゆる心持を、尚も忍んで、凄じくおどろに烈しく成りつゝ增る雨を聞いた。

――ニヤーゴ――

「あゝ」

――ニヤア――

「あゝ。」

――ニヤアロ、、――

「あゝゝ。」

何う成る事ぞ、此の上に、濁水が一塊。どろ〳〵と襲つて來たやうに、破疊の横廊下を、朦朧として、手も足もなく這寄るのは、いつかの海鼠に似た灰猫である。ばかりかと思ふと。

――ニヤア――

と恰も我が居る板敷の下で鳴く。

――ニヤアロ、、――

頭の上で又鳴く聲を、得堪へず密と仰ぐと、あれ、いつか怪しき蟲の這つた壁の破目に、ピカピカ〳〵と覗いて光る。電光かと思つたのは、其の猫の目の青黄色に射るのであつた。

聲も、面も、最も憑悍だつた、三毛猫が其らしい。

海鼠猫の不氣味なのは、やがて疊から、此の板敷に襲ひかゝつて乘らうとする。

聲を上げて、追ふ事は勿論、足踏して、驚かす事も出來ない。

老僧の、目ざとく、耳ざとく聞きつけて、眠藏から顯れたらば何と成らう。我が此處に在る可怪しさは、何ものの怪しさよりも怪しさに、いきなり數珠を擧げて、得意の九字を切つて頭から打挫がう。でなければ、いたはしくも氣絶をされよう。

途方に暮れて、禮吉は聲を上げて泣かうとした。

坐つては居られぬ。下から床板は突上がる、壁からは睨めつゝ狙ふ、疊からは襲ひかゝる。

思はず渠は、横と後と下と、三方にくる〳〵と舞つて狼狽へた。

が、たゞし、お楊に遇はうとする、此の心さへ斷たば、三つの惡魔も、立處に失せて退くであらうと信じたのである。

いや、思ひ返すまい。覺悟した。」

吉祥果とて、香爐とて、みな鬼子母神のものである。其のいづれの一つを取つて、可恐き魔を

防がうとしても、人妻を戀ふるもののために、何とて靈驗あらせ給ふべき。

禮吉は、猛然として吉祥果の林の中に、活きて棲める龍と鳳にも較べつべき、二個の其の鬢油入を兩手に取つた。

手に、確と取つて熟と視た。

いかでか〳〵、敵に擲つて打碎くべきではない。

（迦山淨土
夜叉龍女。）

其の一つを、進んでハタと床の端に置いて、猫の出端を遮つて、衝と退いて瞻つた。

あの、目口も分らぬ、魔海鼠の化猫めが、艶かに照る藍の色を、推參な、鮑貝と紛へたさうで、ペロリと舌を吐いてクン〳〵、嗅いだが、何に咽たか、クシツとはなひると、續け狀にクン〳〵と鳴きながら後退りに退つて行く。

壁を屹と睨め返し、床をば膝に確と踏んで、

南海慈航
皈水楊枝

其の一具を取つて、犇と胸、兩の手に抱いて眞俯向けに搔伏した。

あとは雨の音も、猫の聲も、昏々冥々として、單に、胸なる鬢油入の一顆碧玉の如く、且つ輝き、且つ人肌の暖を帶びて、且つ可懷しき人の黒髪の薫を身に占めて、憮然としたのである。

「禮吉さん。――」

昔の此の持主なる、大諸侯の貴婦人か、お楊か、はた世に權化影向したまへる鬼子母神の御像か、面白皙に端麗なる、氣高き女性の、袖に鳳凰の翼を縫へるが、丈高く立つて呼覺すよ、と覺えて、はつと我に返ると、霧は其の像ありのまゝに、隙間を潜つて、身のまはりに彳みつゝ、風少し出で、雨は留んで、猫の目の睨むと思ふ壁の穴に、空が白かつた。

いまだ東雲の雲低く、町も、軒も、雨上りの靄深くして、人目のなければこそよけれ、古寺の地内を出るのに、脛の上まで衣をかゝげねば成らなかつた。門の内は、唯一面の廣い池だつたのである。

途中は誰にも逢はなかつた。

たゞ低い土手には、處々溢るゝばかり水嵩の增した大川べりを、四手を被ぎ網を提げて、行つたり來たり、中には腰を撓めて、流を見つめて、倒に銀河を覗く仙人の如き、頤髯の白い翁あつて交るを見て、橋の數を過ぎた。

――お楊の駒が、其の軒を飛んだと思ふ、棟の低い藁屋の建場に着いたのである。

「鐸の緒が鳴つたから、」
「鐸の緒が鳴つたもの。」
「――鐸の緒が鳴るもの。」
恰も、其方なる橋の鳴る音を聞いて、再び大雨の中を潜る思ひしながら、雁來紅の赤さに、朝の日の紅の滴る露を見つゝ、禮吉は建場に憩つた。
馬もつないである。……
背戸田、裏畑、前畦には、ちらほらと人の影、手を拱んで、銜煙管して、雨のあとにすく〳〵と、健かなる芋の葉、首だれたる、粟の狀を窺ふ農民の姿も視た。
店に居合せた老も、少きも、薪を積み柴を負つて、いづれも城下へ出る輩の、これは、白菊谷、黒部なんど、谷山の深きあたりのものではない。
向うに、鐸の緒橋を渡つた山際に、豆腐に松葉植ゑたる狀に、横隈の霧の朝ぼらけに樹立の見ゆる鐸見村とて、軒をつらねた一村から出て來るのである――平時は歸途でないと、休まずに行過ぎよう、近間なる此の建場ながら、凄じかつた雨を訪ひつ、訪はれつ、互に無事だつた嬉しさを可恐さもまぜて語り合ふ。
橋を渡らない、礎硝たる石の徑は、間道の趣して、遠く白菊谷に通ずるのである。

「御飯が欲しい……飯はあるかね。」
禮吉が土間緣臺に腰を掛けて、先づ何よりも訊いた。
「はい、炊けました。」
と嬰兒を裸おんぶした女房が、うさんらしく、じろ〳〵と視ながら、目を村人に反して、
「咋夜は夜中から、よう寢られんで、雨もざあ〳〵漏るしな、炊立の御飯や。」
と言つた。
「御飯をおくれ、お菜は……」
「烏賊と燒豆腐の煮合せたがござります、鰯のぬたにな。」
「ぬたは不可い、其の烏賊と何か煮たものと……お待ち〳〵。」
尻も草履も擡立てた女房を留めて、
「酒はあるね。」
「へい、ござりますよ。」
「一本頼む、燗をよくして。」
「や、朝酒は嫣々衆賣つてもぢや。きうと遣つたら堪らんぞ。」
「お爺、鐸の緒より咽喉が鳴るべいな。」

と若いのが言ふと、

「そしたら、身代大雨漏ぢや。」と、煙草をすぱ〳〵。

能代の膳の、硫黄が島ほど兀げたのに、それでも奇特や、……銚子と猪口を伏せてつけ、大根と其の葉を刻んだ大阪漬を添へて出した。

皿の烏賊は、燒豆腐とともに皆黒い。膝を寄せ狀、とつてつぐと、酒の中に、もぢや〳〵と足を縮めて、蒼蠅が、然も三疋。

禮吉はゾッとした。

「御飯を早く。」と言ふ。

「旦那樣、御酒はどないで。」

「飲みながら飯を食べるよ、あゝ腹が空いた。」

と一口も飲まない酒を怪しまれまいとして、故と聞えよがしに言つた癖に、裝つて出した一膳飯は、又箸を着ける事が出來なく成つた。

いま、茶碗に箸を取添へながら、ふと裏田越に、淺葱の空に藍を淡く、朝霧に包まれた、芙蓉の髓の如き遠山の姿を、それが白菊谷と眺めた目を、やがて箸に移すと、一點、瞳を射て、黒く衝と飛去つた蟲がある。光つて胴が細かつた。

思はずハタと茶碗を置いた。

「女房さん。」

「へいゝ。」

「此處等には斑猫が居るかね。」

「何でござりますとね。」

あゝ、其の兀げた鐵漿も。

「毒蟲、斑猫だよ。」

「何うでございますかねえ、親仁さん。」

言掛けられた村親仁は、木の皮の胴亂を煙管でコツ〳〵。

「道をしへは、いかいこと居るだがね、さあ、本當の斑猫は……いや、それも時々は居りますだよ。」

「もう一膳おかはりを。……」

「旦那あがりもしなさらねえで。」

「私は大食だ、——一所にして、……茶漬で食べる。」

雖然、それにも氣の所爲か、蒼く光る蟲の髯が目にちらついて、粒さへ唇に乘せ得なかつた。——

「了つた——忘れものをした。」
我ながら、きよと〳〵と立上り狀に、勘定して、慌しく冷汗を掻いて廂を出た。
が、手綱も結ばぬ軒の馬にも、昨夜の霧のうつり香して、流の空の白い雲は、菊の花の面影立つ。
「……白菊谷まで何里あります。」
「はあ、五里てえだが、もそつと道がのびますべい。之れ、旦那。」
禮吉が橋を渡らず、石高な土手に向ふのを見て、中腰に親仁が立つた。
「行かつしやるなら、はあ、些と何うもむづかしかんべい。」
「何故ね。」
「途中の二股尾と言ふが難所だがの。此の大降では、崖がくんで危かんべい。」
豫て其のくらゐな覺悟はした。
「とに角。——」
「之れ、旦那、此の酒は、御飯はの。」
ニヤリとして、
「頂くべいか。」

「さあ何うぞ。」
「御馳走様ぢや。」
と額を敲いて、次手に馬をドウと叱つて、
「難有い——ハイカラなお地藏様ぢや。」
「其の地藏に、狐が憑いた。」
と若いものが低聲で言つた。
草の朝露流るゝばかり、洗はれた石は玉を研いで、水の音は爪先に響く、白菊谷の道、第一折。

Let not ambition mock their useful toil,
Their homely joys, and destiny obscure;
Nor Grandeur hear with a disdainful smile,
The short and simple annals of the poor.

——世に知られたと聞くグレーの此の詩は、詩としてこゝに記す前に、要あつて、千七百九十五年カナダに於ける、クエベックの激流を渡つた時の、名將ウルフが血湧き肉躍つて心も空なる、舟中の兵員をして冷靜を得せしむべく、肅然として低唱した其の趣を顯すために、こゝに引用し

たのである。……

二股越

六十五

The boast of heraldry, the pomp of power,
And all that beauty, all that wealth e'er gave,
Await alike th' inevitable hour:—

The paths of glory lead but to the grave.

國に祕境と稱へらるゝ、白菊谷、小黒部の嶮、二股尾の斷崖にして、まさに生死の危難に面した時、色は紫に似て、句は電の如く、禮吉の腦裡に閃いたのは此の一章であつた。

評すべき智慧もなく、味ふべき餘裕もなく、たゞ、いつか學校に於て教へられたまゝに、垢つかず、汚れず、古びず、新しく純なるまゝに、太陽に輝き、雲に映じて、たとへばAと言ふ字さへ、偉大なるピラミツドの如く睫毛に聳えたのである。

渠が足は、實際もの凄き溪流の一所、碧潭恰も藍瓶の如き淵に臨んで、何百丈とも知れない絶

壁の峻急なる大傾斜に、さながら宙に釣られたやうに、手を開き、胸を反して、蛙か何ぞたゝきつけられた狀に仰向けに倒れて居た。

あらず、倒れたのではない。大崩れに崩れた絶壁の、手がかり、足の踏場のなさに、身體を橫に一歩づゝ、一歩づゝ、辛うじて運んだのが、其のまゝ動かなく成つたのである。

鐸の緒橋から上流三里。

日は正に午後である。

此處を、難所とは豫て聞かないではない。剩へ可恐いほどの豪雨のあとである。……鐸の緒の古老が注意するまでもなく、容易く越えられようとは思はなかつた。雖然とに角、鞍に婦人を安んじて馬の通る路である。——實は恁くまでとは思はなかつた。

それに、鐸の緒の建場から、川について、流に隔りつ、また近づきつゝして、さかのぼるに從うて、赤濁りの水は次第に灰汁に、灰汁は、やう〳〵白く、白きに藍を交へて、やがて、石に激する他は、眞青に澄んだのを見るにつけても、山の奥には早や眞夜中より曉かけた雨の餘波さへなささうで、澄明なる秋空とともに、一點の懸念の雲もなかつたのであるが。

水が二條に分るゝのではない。……斷崖と絶壁と對向に流を挾んで兩岸が最も近く、從つて、山の尾根が嶮しく迫つて、谷は激しく暗いほどに深い處、——

と、過り來た道程を計つて、こゝぞ二股尾と思ふあたりから、巖の根が、雨にゆるんで、槍の如き頂からなだれた土が、落重なり、埋塞いで、土蜘蛛の如く徑をば嚙み、蝦蟆の如く蟠り、斑なる大牛の如く前途に蔓る。

「何だ、此式、――」

吹降の風のあたりやうであらう。……對岸の棧道は、日影に蒼白く靜まり返つて、萩、女郎花を唉かせて居る。

二つ飛び、三つ越え、巖も土も、しやにむに踏んで、もう一息、もう一息、――絶えたる道も、やがて續くだらうと思つたのに。――

踏迷ふ山路の草の丈は、分入るほど愈々高く、東西を失してさまよふ森は、潛るほど益々深く、船を覆す荒浪は一つより次第に大きく、人を捉る山、人を捉る谷は、行くに從うて愈々高く、愈々深しと聞く。

崩落ちた土は、次第に大きく、次第に廣がつて、やがて千丈の峰から切立ての谿河の水面まで、唯一なだれの赤土の瀧と成つた。……

岩を摑めば岩が拔ける。縋るべき木の根もない。徒に土を抱いて崖に抱着き、しがみついて、行くのでも進むのでもない……唯身體を摺らすのであつたが、掌のあとは飛々に次第高に、荒海

の渚を傳ふ鳥の脚跡の如く、此の土雪頽の斷面に印した。

其の跡一つさへあれば、魔は其の手の主を捉へ、鬼は啖ふと言ふものを、――不氣味に、薄汚く淺ましいのを見るにつけても、越方の身の行業が、皆淺ましく思はれて、其の一つ〳〵に、生命が縮まるやうであつた。

石よ、隱せ、草よ、包めと思ふのに、然はなくて、唯兀に兀た土に映した掌の形は、眩き日光の露骨に、宛然皮を剝がれて、血のまゝ曝さるゝばかりに見える。

――人妻を戀ふる罪なれば。……

まだ、しかし、其も命のあるしるしだつたであらう。

やがて、斷崖は愈々嶮しく、渠をば此の世の土から突離さうとするらしい、足をつま立てて、胸を反さないと、縦に身體が保ち難く成つた。

杖を突込んでは縋り、突込んでは縋り、蟲くばかり、は進まないうちに、精も疲れ、根も萎え、汗も膏も放ち盡した、剩へ斑猫を恐れた飢に弱果てて、パタリと仰向けに寢た。

寢たが、まツ直に仰けに立つて居るのと齊いのである。手は確と杖に縋つたまゝ、でないと、ずる〳〵と遙なる目の下の淵に辷込む。……あゝ、いふ内にも辷べる……脇腹を支へた杖は、肩

に成り、頸に成り、忽ち頭の上に成つて、兩手を空狀に張つて、縋つて居る。——恰も杖を釣瓶繩にして、底知れぬ井戸の中途にぶら下つたに同じい。瞰は、もう、揃つて、アレ二つ絕壁の面を離れた。

眞下に、千仞の谷の、溪河の峻嚴たる巖は、激する水の白い雲に包まれて、蒼穹に聳立つ峰、嶽の如くに見えて、崩れたる土の下に、二三輪、常夏の花が唉殘る……

あの花を嚙んで死なう。

雪邑の令室の、優しき唇に擬へて。——此の時であつた。

Await alike th' inevitable hour;——

The paths of glory lead but to the grave.

渠の腦裡に閃いた。

一聯の歌を想ふ時、續いて起るのは、……恁くて溪流を漕拔けた絕壁の頂に於ける戰の銃聲である。——

名將ウルフは敵彈に倒れた。

其の瞬間、部下が、

「ゼイラン。」と叫んだ。

「フウ、ラン?」

將軍は倒れながら、聞いた。

「エネミイ。」

走るは敵の軍である。

「退路を扼せば。」

言ひ終つて將軍は瞑した。

此歌の一節を知得た渠の幸は、戀に死ぬのに、恰も世の名將と同じ光榮を有する特權を獲得したのである。

あの花を含んで死なう。

雪邑の令室の美しき唇に擬へて……

銃丸に胸を射られた、それに較べては、寧ろ罰の當るばかり幸福である。……

The boast of heraldry, the pomp of power.

And all that beauty, all that wealth e'er gave.

渠は唇邊に微笑した。

途端に不思議なものを見た。

小原女の頭にあるやうな柴の束が、二つ、碧潭の其處に、靜に、幽なる渦のある上を、スツスツと舞ふのである。

眞白な蝶が、ひら〳〵と其の上に戯れた。

其が、遙なる我が足の下の谷底とはなしに、仰向けに倒れた遮るもののない遠き地平線上の雲端に描かれた。

「枕は……彼處に。」

思ひ切つて、崖へ落ちようとすると、杖に結へられたやうに身體が動かぬ——確と土に突立てた杖に、手を縋つて居たのであるが、離さうとすると、我が手ながら離れない。いままでの生命の執着が、拳に籠つて、凝つて、粘つて、指が杖を離れようとしないのである。

「淺ましい。」

が、離れない。

秋は深けれども、正午の太陽は赫々と赤く面を烘る。……皮は煎りつきさうである。

頭腦はキリ〳〵と疼む。

舌は鉛のやうに乾いて粘る。

小砂利が、土まじりに、ざら〳〵、ざら〳〵、ばら〳〵ばら〳〵と、緩く、靜に、殆ど同じ間

を置いては、絶頂から崖をこぼれて、目、口、鼻、耳に掛るのが、拂うても、振つても、留まない。昔、水責の水を一滴づゝ、やがて腹の膨むまで唇に滴らすかと言ふ、……それは水、此は砂利と土である。ざら〳〵、ざら〳〵、ばら〳〵ばらと緩く靜にこぼれて、鼻、口、目、耳に入る。

……

何時間、幾月、幾年——續くやら。

渠は死ぬにも死なれない最後の業苦に戰慄した。

「口惜しい。」

齒噛をした齒が、口を埋めた砂利だらう、バリゝと噛むと、毒矢で抉らるゝやうにギリ〳〵と疼んだ。

「むゝ、無念だ。」

自棄に滿身の力を籠めて、兩手で、杖をひし折つて、淵へ飛ばうとした、頭から胸へ、空から眞黒な影が覆被さつたと思ふと、目も口もあかない眞暗な身體は、ふはりと宙へ浮いて、足が離れた。

鷲に攫はれたか、天狗に摑まれたのであらう。

身も心も空に揚つた。

耳を掠めて、ぶん〳〵と、ものの響くを、風の音よと聞くうちに、いつか、絲車の聲、綿を引く音に聞做された。

綿をひく、あの白い綿を、一つまみ、ぶんと引いて、白い絲を、ぶん〳〵ぶんと繰る。

其の絲車は、煤びに煤びて、綿をつむ指が黒い。其の指は、婆々の手で、婆々は白菊谷の甚兵衛爺さんの老母らしい。

と白い綿は、一つまみづゝ、禮吉、渠自身の頭髪から抜けて、婆々の手にかゝつて、ぶんと伸びて、一筋ぶん〳〵ぶんと車に搦んで、する〳〵と輪に廻る。

又一條、また一條、……

それが、耳からも出れば、鼻からも、口からも、絲車の引くにつれて、する〳〵する〳〵と寸切ない。……

見る〳〵芋環が雪が積むやうに白く成る。

我は蠶に成つたか。

否、煮られては居ない。

蓮に成つたらう。

然らば極樂に生れた。

手を擧げても、朦朧として、白蓮、紅蓮は素より、黄なる萼にも見えない。

須臾にして、渠は猛然として叫ばうとした。

が、聲は出ない。

「あゝ、白髪に成つた。……あまりの心痛に、一瞬時にして、」

と思ふ〳〵、昏々として前後をわすれた。

深山の謠。菊枕。戀の卻

六十六

白菊、黄菊、なあ、小菊。

こんな晩には、なあ、小菊、

兎と猿とが、なあ、小菊、

餅と酒とで、なあ、小菊、

遊ぶぢやねえか、なあ、小菊。

お前と俺も、なあ、小菊、

遊ぼぢやねえか、なあ、小菊、
白菊、黄菊、なあ、小菊。

鄙びた、里びた、稚兒の聲々、三四人、手を拍いて、唄連るゝやうに現に聞いて、夢、夢、夢と思ひつゝ、禮吉は又我を忘れた。

白菊、黄菊、なあ小菊。

こんな晩には、なあ小菊、
唄を意識しつゝ偶と我に返つて、生命を心付いたと同時に、ちら〳〵と瞳に映つたのは、果して眞白な耳許の髪毛であつた。

枕して、横に寢て居る……其の鬢が、いま苧環の白絲を、其處に積んだやうに堆いまで、皆白い。

果せるかな、白髪に成つた。

と思ひつゝ、信じつゝ、甘い、溫い、香しい、綺麗な涙が、はら〳〵と溢出た、……枕も浮くばかりである。

渠は、嘗て心に誓つた、罪ほろび、業滅して、髪盡く白きに到らば、美しき人妻にまのあたり、其の戀を語る事を、世も人も許すであらう。

生死は知らず、心も容も、將に其の時が來たのである。

お楊さんに逢ひ得る期が至つたのである。

浮くばかりの嬉涙に、磐石の如き頭も輕く、ふと寢返りした時、枕頭に煤けた行燈が目に着いた。

「あ。」

燈を迎ると、霜を積む頭髪と思つたのは、白菊の花を枕に敷いたのである。——花の明は、端嚴なる、清麗なる人の面影の如く、漆のやうな天井に映つた。

「あゝ、菊の花。」

「はれ、お氣が付かしただかあ。」

と、聞きも及ばぬ聲して、衾の裾の方に、ごそ〳〵と音がすると、ごそりと起きて、膝で摺つて這ふやうに顏を出したは、古手拭を頭に卷いた、老の顏。

絲を繰つた婆々とは違ふ、皺びたが、色の白い、見も知らぬ姥であつた。

「坊樣、ものを言はしつたかいの。」

「菊、……菊、……」

とばかり息の下で渠は言つた。

「はあ菊でござるぞ、菊でござるぞの。」
と優しく笑傾けて、
「――白菊谷でござるぞの。」
「……」
「安心さつしやりませ、お氣は付いたぞ。はあ、御免され、年を取ると、夜さりは太う頭が寒うござつての。」
と手拭をくる〳〵と解いた。祖母子髷に結つた、殊勝げな。
「媼さん。」
と思はず言つた。
「おゝ、坊様。」
略推するに便宜あり、……白菊谷と聞いたれば。――
「僕は、私は何うして此處へ來ました。」
「最惜げに、二股尾の崖で倒れて居さつしやつたさうなげな。猪とも穴熊とも、山坂を駈ずり廻る、私許の悴がの、甚次郎でござるがの、負うて、此處へ連れましたぞいの。」
驚かと疑ひ、天狗かと迷つたのは、――再び生命を救はれた、身代りの少女觀世音、霜ちやん

の其の父であつたか?!
禮吉は身を擲つ如く、どたりと膝に縋つた手を、白菊の花の上にして、姥を頂くが如く熟と視た。
「此のお家は、媼さん、私に取つては神様です、佛様です。……」
と聲も弱々と言つた。
「やれ、も、勿體ない事をや〳〵」
「お禮の申上げやうもありません。……時間は、いま何時頃です。」
「油の加減を御覽じやれ。」
と行燈を少し引寄せて、
「子の刻でござるよ、の、……油皿がちう〳〵と鳴くぞいの。」
と小兒をあやすやうに莞爾して言つた。
「あゝ、子の刻、」
「それも下刻での、やがて一時でござるよ。」
「眞夜中だ――私は息子さんに、然うやつて助けられて、何時頃此處へ來ました。」
「然ればの。」

「先刻……いま一時だとすると、それでは宵かも知れない。小兒たちが唄を謠つて遊んで居ましたね……白菊、黄菊、小菊と言つて……」

「おゝ、喧しうて、お耳づらい事ぢやつた、内に小兒はなけれどの。」

姥は何も思はない顔して言つたが、聞くものの頰には熱い涙が傳はつた。……生きてあり、三十路を五つ六つでも、霜ちやんは、——家に、唯一人の小兒であつた。……

「否、唄を聞いて、菊が咲いたやうでした。」

と禮吉は且つ其の少女の靈を想ひながら、

「然うすると、寢て居て、あの唄を聞いたんですから、あの前に、此處へ連れて來られたんだと見えます。」

姥は頷きながら、もつけな顏して、

「はれも坊樣、お前樣は病氣惡うて、夢中で何も知らつしやらない、小兒が唄を謠うたはの、あれは昨日の晩方ぞいの。」

「昨夜ですつて、……」

「なう、坊樣、こんな奥山の兒どもたちはの、町方のやうにはござらぬ。不精で皆氣が重いで、

三人も四人も連れて、手を拍いて唄ふやうな事はの、月に幾日もござらぬよ。……雉子、山鳥、鳩、木菟の飛びやうや鳴きやうと同じでの、お天氣の模樣にござる。……晴れる時とか降る時とかの。昨夜の唄は、月夜ぢやつたが、霧の裡で、あれは雨に成るのでござる。……今日はまだ降らねども曇つたその、明日は降雨でござらうよ。坊樣が來さしつてから、小兒の唄うて遊んだのは、昨日の晩景だけぢやでの。」

扨は、見る〳〵うちに白く成り行くと、疑つた髮も、絲に繰らるゝ一條に、少くも二十四時を經てゐたのであつたが。

「而して、眞個に、私は何日來ました。」

「坊樣がござつてからの、今夜で五つ寢ましたよ。」

「五つ寢た、——六日間、……」

渠は愕然として目を瞬つた。

「まあ、其の間、あゝ、重ねて御禮の申しやうもありません、どんなにか厄介に、嘸ぞ手厚い御介抱を頂いたらう。全然お庇です。——しかし、よく生命があつた。——起きます、否、起直るぐらゐ何でもない。……不思議に氣分も判然して居る。……媼さん、親身も及ばない御看病はもとよりの事、藥も頂戴した事だらうね。何にも知らない、些とも覺えない。」

「一時はの、えらいお熱でござつたよ。」

「然うですか、何しろ定めし、大變なお手數を掛けたらう。」

「いんね、さして苦しみはなさりませんで、私等が方では、何うして上げう事もないほど、手は些とも掛りはせねどの、唯、うと〳〵うと〳〵と、正體もなう寢てござつて、其が太い心配なで、爺樣と額突合せて、溜息を吐いたぞいの、」

と言ひかけて、姥は深い呼吸した。

「こんな山家でお醫師はなしの、町へ出ようにも、二股尾が塞がつたれば、瓶に蓋をされたも同じ事で、あの崖へ道がつくまでは、お城下へは手足どころかいの、息も通ひませぬ。坊樣は小い時ござつて知つてであろ、內の婆樣が拵へて置かつしやつた、何やら、草を乾集めた煎藥が、お佛壇の抽斗に藏つてあつたで、其をば煎じて進ぜましたよ。……澁い口をして、坊樣は夢中で飲つた。——あゝ最惜げな、二昔前に、こゝへござつて、お母樣と寢さしつた時を知つて居る。……最う乳はまるらねど、貴方の懷に、おいしさうに、唇をつけて、寢ん寢してござつたものを、……嘸、はい、藥が苦からうと、最惜うての。」

禮吉は濕んだ聲して、

「いや、苦くても澁くても、其の藥で助りました。」

「坊樣や。」

と坐つたのを片手つきに、前へ出て、

「藥もの、藥ぢやけれどの、其のの、菊の花が、お病氣によう效いたと思ひますぞの。」

「えゝ、枕にして居ますね。——さあ、屹と此も利いたんです。此處の淸水は神業のやうに萬病に效くと言ふから。」

「其がの、私等は、鈍な事で、淸水は病に效きますだで、飲みも、つかりもしますけれど、菊を折つて……」

と言ふ……

唯、折つてと聞く、折る時の、其の香が芬と、いま薰つた。

「それを枕にさせます事は、根つから氣が付きませんだぞ。處にの坊樣、あなたの枕に敷かせてと、幾度も取替へて、其の菊を下さつたは、毒蟲の療治にござつた、……爺樣がおともをした、えら、美しい奧樣でござるぞの。」

今こそ生命が惜かりき。——

渠は堅く胸を抱いて、

「其の方は？」

「はい？……」

姥が、いまの聲の低かつたのを訊返すと、

「其の、私をおぶつて來てくれた、其の息子さんは。」

と問返した。

「あれかいの、那はの、谷の若衆たちと、皆で、二股尾に小屋掛して、崖崩れの路を切開きに行つて居りますわの。」

「お爺さん、……お爺さんは？」

「はあ、爺樣は、日のうちは內に居てぢやが、夜さりはの。奥樣がお寂しいで、庄屋樣の納戸へお伽に行てぢやよ。」

「庄屋樣。」

と言ふうちに、其がいづれにせよ去ぬる年の、おなじ菊月夜の、我母の浴を思つて、豪健にして老實なる甚兵衞の伽の用意を、……ひとり密に頷いた。

さり氣もなき姥は、

「庄屋樣言うても……町方で、何か、利益づくの間違から、家中、北海道へ行かしつての、村に一つあつた白壁の藏も潰れて、がらん洞の立腐ぢや。それは、たゞ廣い處になう、……奥樣お一

人切で、何うにもはい、お寂しいで、爺樣がまるつて居りますよ。……その爺に、菊の花をことづけて持たして寄越さつしやるだよ。」

「遠いんですか、其の家は？」

「村では、私とこが何處より近うての、背戸つゞきで、些少の隣家でござるよ。森、樹立はあれども、雨戸開けて透いたら、日影も見えようず。えらく、坊樣の臨梅を心配さつしやつて、爺樣の言はつしやるには、夜さり水を浴びに行かつしやる時、每晚のやうに、立つて視めてござつたげなよ。尤もの、御病氣ゆゑ、誰にもお逢ひなさりませぬ。私もまだお顏は見ぬぢやよ。爺樣が、お供して來て、內へ置きますにも、男どもや、女衆にも、斷つて覗いても成らぬと、堅う言ひつけさつての、それぢやで、此處にござつた時もの。……」

「此處とは、媼さん。」

「はれ、坊樣を寢かしますにつけて、奥樣をあちらへ据ゑたで、一夜は此の佛間にぞいの。」

「……媼さん、嗽をさして下さい。……起てます、いや、大丈夫、起てる。」

「其の勢でなう、坊樣や、此を一口まるらつしやれ。墓から蘇返つて、ものを言はつしやるやうな氣がするでの、先刻にから、心では思うても、進ぜる間がなかつたぞいの。」

と眞黒に燻つた、が、鼎にも紛ふ鐵の火鉢は枕許に置いてあつた、小鍋を掛けた五德の下へ、

十能から火を移しながら、姥が乘掛るやうにして元氣附かして言つた。

此の爐は——いま、禮吉が我慢にも褥を起つて、出居から土間へ下りて、下男らしいのが二人、ごろんと寢たのを見ながら、何處ともなく通ひくる、菊の薫、水と霧の香。……香に連るれば、厩の臭さへ可懐んで、筧に嗽いで、蹌踉しながら、佛間なる閨に歸るまで、附添つた姥が、立次手に大圍爐裏から、榾の埋火を一しやくひ、赤さも鮮かに掻起して來たのである。

塗盆の茶碗に、湯氣を立てて、裝りながら、

「……重湯ぢや。まゐれ。はれ、おいしさうな、なう、いゝ鹽梅と言うたらの、坊樣は夢中で、ちゆう〳〵吸はしつたが、何ほども食らぬで、殘りをば頂いたがの、とんと甘露でござるぞの、私なぞが拵へたものではござらぬ。皆の、奥樣がお手づからぢや。」

禮吉は恍惚するまで、膝の上に取つた白菊の花の一輪と、一碗の薄い粥を較べて見た。

「媼さん、眞個に？」

「眞個とは、何がぞい。」

「其の方はね、大層な御大家の方ぢやあないか——自分で、粥の煮炊なんぞ。」

「何がいの、大根刻むから、米磨ぐまで、何でも貴女がお手づからぢや。——まだそんな事かいの、彼方への、住居を替へさつしやるにつけては、疊もほんの三疊か、四疊、お膝容れさつしやるだけを、私等が許から運んでの、鍋も吸子も間に合せぢや。……おゝ、ほんとに、此の土鍋も一つもの、あなたが、炊いてめしたあとで、別に煮さつしたものを、例のやうに、坊樣にと言うての、晩ほど爺樣に託けて寄越さしつたものでござるよ。……さ、まゐれ。」

禮吉は一禮した。

「おゝ、おいしさうに、よう、まゐるぞ。……それまゐつたら、木登りも戰も出來る。……まだまだ、そのくらゐな事かいの、鈍な私等には、分別も、智慧もなけれど、白菊の清水を汲んで來て、それで手拭を絞つての、お頭や胸を冷す事から、隙間の風を塞ぐ事まで、の、雨戸小窓の破めをの、新しう貼つた紙を御覽ぢやい。」

皆白菊の影ならずや。

「塵紙でない、反故でない、こゝらに、そんな紙はござらぬ。皆の、貴女樣のお心遣ひぢや、頂いたお目錄を包んだのも張交ぜたぞの。」

禮吉は俯向いて、默つて聞いた。

再び一禮して椀をかへつゝ、暖まる掌に、袷の上から胸を撫でて、

「媼さん——私に、そんな御心配より、肝心、御自分の、其の方の御容子はどんなです。……第一、清水を浴びると言つて、風呂でも沸して入るんですか。」

「ぢかに、の」
「直接に？」
「尤も、其の方がの、何よりもよう效くのでの、風呂は可厭とおつしやるで、おつしやるまゝにしてあるがの、晝の中は、何として、夜も、此の少い家數も、何處も寢鎭まつてから、お一人で浴すさうなよ。」
「勿論、一人、それは一人に違ひないんだけれど、……水でせう、此の寒空に、どんなだらう。」
「其が奇特ぢや、此の谷の白菊清水に限つてはの、思ひ切つて身體を浸れば寒の冬でも凍えませぬよ。」
「おゝ、然うですか……其のくらゐな事はなさるだらうし、そのくらゐな事はあらうし、そして、毒蟲のかぶれは、どんな御樣子だか、知つて居ますか。」
「薄紙を剝ぐやうに、」
「あゝ、薄紙を剝ぐやうに。」
「……一日まし、其こその、ほんに〳〵玉を包んだ薄紙を剝ぐやうに御本復ぢやげな、私にさへ、爺さまは委しい事は言はぬけれど、斑猫の毒も、やがて、なう、蚤、蚊のあとぐらゐ消えたであろぞい。」

「嬉しいな、……難有い。」
渠は、寂然として、深夜、風の聲もなき山靈に感謝した。
搖るゝは、其處に、——手をおいた、菊花にさし添ふ露である。
「媼さん……砧かい。」
「……」
「あの音は。」
「……」
「聞えないかい、……靜に、いま、トン、トン……と。」
甚兵衞の老女房は、卜小さな祖母子髷を傾けたが、頷き〳〵聲を潛めて、
「透見をするさへお厭ひなさる。お噂するもお可厭ぢやろ。……高い聲では言はれませぬがの、御道理にござる。まだお寢らぬと見えるぞ。……あの音はの、奥樣が、時々、お煙草をめすので、トン〳〵と。……爺樣も吹かしますがの、直ぐに知れるで、ガチガチ〳〵ぢや、音がせねば、掌へころ〳〵でござるよ。」
と皺の中で打笑うた。
それでないと、言憎かつたに、……申戲らしい笑ひにつけて、

「内に煙草はありませんか。煙管もない、私も喫みたい、媼さん、……巻莨も何も持ちません。」

「おゝ、煙草はあるがの、煙草は胴亂ごと爺様が、……悴は喫ます、……」

と案じたが、袖なしを着た背筋で、ほく〳〵、

「はれ、あるぞ〳〵、……」

と立しなに、

「坊様、暗かろ、燈心を增さつしやりませ、行燈の抽斗に。」

「分つた。」

と、心安だてを、嬉しくうけて、其の抽斗をぬき掛けながら、手を留めて、耳を澄した。煙管の音は、フト今留んだが、胸の動悸はトヽトヽと高く響いた。

ぎいと、油が煮えつゝ暗く成る。

「お口には合ふまいぞ。辛い處へ、此の荒きざみは、爺様が痰持ゆゑ、用心に、菊の葉も小枝も乾して切込みますで、……煙管は先の婆さまのぢや。」

と言つた。

禮吉は吐むねを衝いた。

此の煙管で飲む煙草の煙は、數萬の蟲に成つて耳から出よう、むかしから、あの可恐い婆の煙

管の、長い羅宇は眞黒で、魔の持つ杖に髣髴である。

「難有う、緩り頂きます。……媼さん、何うぞおやすみ下さい。……お年よりを、こんな夜更に、……」

「何のいの、まあ。」

「いや、實際、お氣の毒で胸が疼みます。尤も、便るものは、媼さんたちのほかに、石も木の葉もありません。何處か不快ければ遠慮なく起しますから。」

山家の人は、すぐもろく、

「そんなら、御免蒙るぞの、鼠が出ても起さつしやいよ。一寸行燈を、……」

と油を增して、燈心を添へる手の影法師。あの婆ならば凄からう、が、此の姥の其の伸びたる爪も、蓮の實に見えるのであつた。

「御免され。」

と、ごそりと寢床へ、此方の裾を枕にして、敷居越の次の襖際、ちやん〳〵も脫がない看護の眞心。

我に何等の德ありや。

藍子は悵然として端坐した。

弱つたのは煙管である。

偶と、抜きかけた行燈の抽斗を覗くと、鋏、針、絲屑など亂れた中に、玩弄品の簫の笛。ばらりと壞れたのが目に付いた。

「あ、霜ちやんの、……嬰兒の時の、」

持つたまゝ、袖ぐるみ、ひたと雙の瞼を蔽うた。

「霜ちやん。」

鼻をつまらせ、

「御免よ。」

其の小枝さへ、乾かして刻んで交ぜたと言ふ。……我に一服を給へ。と念じて、菊の葉を卷いて、笛の尖へ喇叭を插して、煙草をうめつゝ、口許を夥度吸つた。

煙は水の如く涼しく通る。

トン、トン。

同じ音がする。先刻と同じ音がする。

渠は、拂かうとして、逡巡した。

トン。

此の時、此の夜、山國中に唯一つ、お楊の雪の手が動くのである。

また猶豫つた。暫時して——

トン、トン。

鐵の火鉢に密と當てた。

トン、

訝がするか。……彼方より……

毬の嘲。關手券

六十七

小雨ながら、しと〳〵と、宵よりして小留みのない夜であつた。

夜更けて姥の寢靜まつたのを伺つて、禮吉は寢床を離れた——尤もそれまでとても、枕については居なかつたのである。例の大きな鐵火鉢を前に踞つて、恐る〳〵あの煙管の音を立てたが、其の最初の時、次の夜——二夜がほどは、幽ながらお楊の方からも、それとなく應答があつたのに、……やがては、何の響も通はなく成つた。惟ふに、心あつてする事を、彼方で悟つたもので

あらう。

恁と知つては憚らねば成らぬ。が、せめても煙管の音の、それさへ通はないのは、脈が留つたよりも心細い。

甚兵衛も、姥も、容體を憂慮つて、日の中と雖も、まだ外出を許さない。昨日今日。……我意に此を強ひる事は、其の姥より、爺より、あれまでに人目を厭ふお楊に對して、廣い背戸、深い樹立を隔てて居るとは聞くものの、其の枝から鳥に成つても覗いては濟まないまで、自ら謹まれたのであつた。

が、然うした身に、夜半は天の慈悲である。——人知れず、忍んで樣子が伺へよう。

姥が寢た暗い納戸の、襖際へ行燈を密と摺らすと、持つて立つまでもなく、其の向うが廣い出居で、爐が仄な明に映る。と其の爐端に、煙のやうに坐つた、悄然した婦の姿があつた。ふと露野に似たと思つた、が、其のまゝ消えた。……家のかゝりが過ぎにし夜、前塚田圃を徜徉つた時の權九郎の住居に似て居たための氣の迷に相違ない。

萱の軒の、雨垂の寂しさ……

矢張り爐緣の其處に、人あるが如く、悚然と、身をすくめながら土間へ下りると、勝手は覺えた。

嗽、手水は此處である、水槽の傍は、もう戸も何もない一方の其處が出口で、此の山家の脇腹のやうな處から、顏を出すと、霧雨が早や面を包む。

薄鼠、——(いや、鼠とは言ふまい、馬のために)灰色に見えるのは廐で、手許に暗いのは納屋である。

唯、ごとん〳〵、二つばかり羽目板に當る、ひづめの音、

「あゝ彼に乘るのか。」

母に抱かれて、ともに鞍に縋つたより他に、乘馬に何の經驗もないのに、思はず、そんな心が起きた。また不思議に、母と言ひ、お楊と言ひ、此の奧山の谷に來るものは、二度が二度とも駒の上だつたからである。……處で、手綱を解いて跨りさへすれば、鐸の緒橋で馴染の駒はあの鼻頭をむくと擡げる。

「どう。」

霧を蹈んでひらりと出る……自然に、約束事で、其の行く處は白菊の清水であらう。

此の山奧の眞夜中に、ひとり莞爾と微笑んだ渠は、忽ち仙骨と神通を得たるが如く、身も心もふは〳〵と空に浮いて、疾く既に意氣は森々たる樹立を呑んだが、忽ち取つて投げられたやうにドサリと納戸の前に落ちた。……

「否、然うでない。蹴殺されるのかも知れない。……あの馬に――」

さつと白髪の葉を分けて、面も脚も一所に荒馬の飛出す棕櫚の樹はなかつたが、彼は胸を張つて、ハタと居て、少時、其處に蹈まつた。

で、血は、燃えつゝも體は冷える。病後の皮膚は雨濕りに久しくは耐へ難い。勇氣をば奮ひ起したが、時と言ひ、場所と言ひ、其の所業の目的と言ひ、心の惑亂する事は、――納屋の古壁に掛けた蓑を取るのが、怪しく大きな翁の面、長く土に垂れた白い髯を抜くやうであつた。

固より黒白も分らぬほどの暗夜ではない。

幾日の月か、其の大空の影を、雨雲が立蔽うて、唯一面に紛のやうに降つて居るのである。

菅笠はまだ冠らず、横に抱いて小脇に取つた、づぶ〳〵と濡透つて霧に厚ぼつたいのは、月夜茸とか稱へて、大きな笠で一莖立つて、恁うした夜は、人の前後を照すのが、蓬しき山谷の中に生ふると聞いたに髣髴である。

衝と入つて見れば、笠を被つて支へるほど狹くはなかつた。

……渠の迷へる想は、天馬に乘じて空を架する其ではなくて、何うしても蹴殺される方へ落ちさうだつたために、庭の前を通つて、其處が一條の山道らしい、戸の表へ出る事を憚つて其の庭と、此の納屋の間の、柴、薪、藁などを堆く積んだ、たとへば廂合のやうな中を抜けて、背戸の

方へ出たのであつた。

言ふまでもなく、お楊が住ふと聞く、庄屋の屋敷あとへは、また此の方が近いのである。

裏は、すぐに崖だらうと思つた。けれども、背戸は割合に廣い。目立つほどの樹立もなく、切展かれて、一方に、其の庄屋のであらう、黒々と森が見える。……

星とも言はじ、螢ほどの燈の影もなく唯寂然としたのに、立迷ふ霧がむく〳〵と、幹に枝に高く深く重なり積んで、恰も城の石垣を築いたやうである。

渠は茫然とした。

煙管をたゝく音と音とは、砧同士、壁一重相近いやうに思つた、お楊との間は、市街に於ける其の館よりも尚ほ遠い。

凡てが夢に成つたやうに、茸立ちに、とぼんとして一人立つて明す目に、フト怪しき巖の如く映つたのは、低い藁屋根の出先にぶら下つた、――あの天神橋の山裙なる立腐の酒屋の軒の杉林を思はせる、が、非ず、大きな蜂の巣に似た風呂桶であつた。

渠はきり〳〵と五體が緊つた。

亡き母の浴の奏。

しかし、其の同じ風呂ではあるまい。二昔あまり前の事。

其でも近づいて見ると、板は裂け、たがは外れて、殆ど使用に堪へなさうなのは、……後に別なのを整へて、此は其の時のまゝなのを、まだ斧に當てて焚かないで置くのかも知れない。

此の兎ほどの小僧が、白菊の胸に抱かれて、……

場所は、清き流に沿つた白菊の叢の中であつた。

こんな納屋の裏ではない。

とすると、然うした景色の處まで、風呂を持運んだものであらう。

何となく、心覺えの路が見える。……甚次郎が提燈つけて、落葉を分けつゝ送つた時の、——

扨は其處が、音に聞いた白菊の清水に違ひない。

行け。

笠を取つて、被らうとして、しと〳〵と桶に點滴る雫を聞いた。

桶の裡には、我がための甘き露、清らかなる乳が湛へられたやうに思つて、小雨とともに涙が流るゝ。

その、ものの可懐さ。……こぼれ積つた松の枯葉を分けて、風呂桶の蓋に手を掛けると、べたべたと貼つて、指に搦んだものがある。

布を貼つたやうな夥しい蜘蛛の巣で、納屋の其の屋根裏から、崩れた壁を斜に、蓋を閉ぢて、

いや、したゝかに貼つた。……

「畜生。」

口惜しさうに呟くと、齊しく、圓い笠に角を立てて、颯と横狀に掻切ると、縋るゝ蜘蛛の圍が笠に絡はる、絲の切めを、パラリと散つたのは、色の黑いまで眞紅なる一枚の木の葉である。先刻から、散るにも、搖るゝにも、目に立つて動いたものは此ばかりであつたらう。

掌に据ゑて熟と視た。

——母が與ふる關所の手劵、——

「可し！……」

此さへあれば、魑魅も、魍魎も、木精も地鬼も、神祕なる白菊谷とて遮るものは、よもあるまい。

緋葉を霧に灯す如く、掌に取つて、心覺えの、夢のやうな、路を辿る。……然るにても便なさに、成りたけ森に寄つて、樹の根を傳ふと、霜にあとつけるやうな、縱橫に、ぴた〳〵と足痕に殘つて不氣味である。

それに交つて、栗のいがの落ちたのが、笑ふか、嘲るか、憤るか、口に霧を含んで、ぶつ〳〵と泡を噴く。

「手券を視ないか。」

餘裕を示して、片手を懐にしたのに、觸つたのは煙管に使ふ簫の笛。

笠には蜘蛛の圍、……さゝ蟹の絲、——こぼれ松。

手に緋葉。

いで歌枕見るための、大宮人の意氣がある。

「鼬笛吹き

猿奏づ……

稻子丸は拍子打つ。」

思はず口のうちに打吟んだ。

庭の裏を、斜に廣く切つて、森について、外へ一廻りして、路らしい、雨に艶ある土を踏みつつ、門のあとを左右に樹を分けて、奥深い庄屋の邸の表構を望んで、やゝ反抗ふ如く蓑の肩を聳した。

が、何の！……角ある芋蟲の類に過ぎない。

城の天守を遙に下つて、中間小ものが、酒とも言はず、豆腐を買ひに行く形に似て居た。

頃刻すると、踏辷る足を、辷ると知りつゝ、虚氣と故と辷つて、蹌踉めくばかり、醉つたやうに、ほんのりと、爽かな、清い、深い薫に包まれた。

雨も匂つて、蓑に颯と香が立つ。

一際狹くなつたが。左右の崖は一面の菊である。包んだ霧も、白菊の花が空に唉いた風情である。

渠は恍惚として立つて、我が兩方の袖をばさすつた。

蓑の毛は、一條づゝ、皆菊の花瓣である。

靜なる流の音に、屹と我に返つた渠は、前途の眞向うに、白い山の裾に面して、地のやゝ展けた處を視て、ふと其處が、あの昔、母が沐浴した溪河のへりぞと思ふと、胸、肩の雪なす姿に、憚り、恐れ、恥ぢ且つ謹んで、——一度目を閉ぢた。

が、忽ち其も、隔たつて、幻の其の面影を祕す如く。其處に人の姿を視た。

愕然として、一步退つて、霧に映る我が影かと疑つたが、其のまゝ消えないのに、瞳を凝すと、同じ蓑を被た姿の人なのである。

白菊の蓑。清水の調

六十八

庄屋の方には、別なる道があつて、崖の裂けめを前途へ横合から出たらしい。

其の人は、白菊の露增すほどの雨にも、堪へやらぬ狀に、なよ〳〵として前を行く。

我が影でない證に、其の裾を見た。蓑を漏る夜の色は、朧氣ながら、土を踏む踵の雪を欺く白さよ。

清水に赴くお楊でなくて、霧を逍遙仙女とは誰が思はう。

――お楊さん――

たとへ、其の聲が、我が生命の最後ともなれ、思ひ切つて呼ばうとした。

「待て……」

其の姿である。

我は茨に依る稻束にして、彼は柳に掛けた桂にもせよ。同じさも同じ、蓑蟲にも鶉にも似て、二股尾の淵に浮いた、二束の柴にさへ紛ふものを、――

あはれ、我が知る限り類へんものなき、恁くまで美しく、恁く人品に、氣高く、たをやかなる麗人を、鶉、蓑蟲、柴、なんどの、此の姿にて相見えんは、餘りといへば心なく、且つ可惜しい、……

「誓つて……また逢ふまで決して死なない。」

渠は猛然として踵を返した。

早や霧雨が立籠めて、我が容さへ覺束ない。唯、殘惜さに、菊の葉ずれに身を潛めながら、振向いて見る時――お楊は山の根に巖其のまゝに刻まれた女神の像の如く、すらりと黑髮が見ゆると思へば、肩を辷つて、ずるりと蓑が落ちたのである。

禮吉は戰いた。

「えゝ！」

幾萬年を經たる後には流星と相觸れて、世は碎散つて滅ぶとさへ聞く。……人が人と接するに、何程の事があらう。

禮吉は、星の飛ぶが如く引返して衝と寄つた。

霧を衝く蓑は蒼く燃えた。

背後狀に聲を絞つて、

「お母さん。」
と言つた。
「奥さん。」
と言つた。
「姉さん。」
と言つた。
「お楊さん。」
と言つた。
片褄、清水におりしなのお楊が、とき掛けた帯をすつと手繰留めて、背後向きのまゝ、すらりと菊の中に立直る。
「案山子です。」
と言つた時、土とも、草とも、疊とも、玉の床とも心得ず、渠は蓑の袖を折つて、笠のまゝ膝を支いたのである。
世にも優しき聲して、
「禮吉さん。」

「……」
「御病氣は？」
「……」
「お加減は？」
と、肩に幽に息をしながら、熟として、靜に背を向けたまゝで言つた。
「えゝ、貴方にお目にかゝられさへすれば、生命なんぞ何うだつて構やしません。」
「……」
「お顏を、お楊さん。」
卷けりや、束ねたりや、結べりや、知らず、ほのかに白き横顏の淸らかな耳許に搖れつゝこぼるゝ黑髮ばかり、白菊の裡に搖れつゝ薰つた。
「……お楊さん。」
膝で伸上つて、犇と取つた其の片袖は、一面の菊の叢に、却つて薄靑く映つた。羽二重の白い練衣、神聖なる淸水に浸るための用意と見える。が氷のやうに冷たかつた。
そして、胸高に細腰をしめた、朱鷺色の伊達卷の解けかゝつたのが緩く、雪の柳の枝のやうな

肱に、袖に、する〳〵と掛つて居る。

其の黒髪は……かゝる時、島田髷、圓髷ではよもあるまい。が、一輪の白菊、然も銀の高彫の平打の簪を辷るやうに插したのが見えた。

目の幻覺に相違ない。

世に生れて、はじめてお楊の姿を視た時、其の黒髪に簪されたのは、菊の平打の簪で、父が細工したものであつた。

——藍子は母をなくしてから、さみしさの餘り、町の家の大屋根へ出て山を望んだ。墓のある向山が見え、川が見え、天神橋も見えて、遠方に白菊谷が望まるゝ。屋根のこけらの間には美麗な金龜蟲が這ひ、瓦には、簀して、梅干、紫蘇が擴げられる。

乾いた紫蘇を噛んで、其の昆蟲を取つて遊んだ。

屋根に馴れて、棟瓦を飛ぶと、天に上るやうな氣がする。……廂を走ると、町内の柳も楓も、目の下に流れつゝ、空に舞ふやうな心地である。……氣紛れの蝙蝠や、からかひ面の蜻蛉が一寸來ては遊んで行く。……小半日も屋根に居るのが知れると、父と祖母に危いと言つて叱られたあとで、階子を引かれた。

其には弱つた。

然うすると、裏二階の小部屋の、肱掛窓の外に、前町の大きな菓子屋の土藏のうしろ壁が見えて、其の空地に、一本すつくりと棕櫚の樹があつて、幹も、あの葉の天狗の羽團扇のやうなのも窓を覗いた。

馬に追はれつゝ、死なうとしてから、稚心に、此の棕櫚が可恐しかつたが、屋根へ出る便りのなさから、ふと此に足掛を思ひ附いた。

肱掛窓の小緣から、棕櫚の樹に足を掛けて攀上るのである。

はじめは危かしくて、上よりも下へ辷つたが、馴れると仔細ない。

ひよいと飛つくと、する〳〵と幹を攀ぢる、駒の鬣を撫づるが如く、ドウと敲いて、やと言ふ掛聲とともに、雲から拔けるやうに、眞黄色な花を分けつゝ、粉だらけに成つて、屋の棟へ飛移る。

所作は貂だ、が形は猿で、悠々と棟瓦の上にちよこなんと坐つて、眞青な向山を眺め、雲白き白菊谷に小手を翳す。

「鵟笛吹き
猿奏づ。」

キ、キ、キ、キ。

どつちも古家である。——椋檜の根の石垣からは、眞晝間も幾疋となく鼬が出て、裾繼肩車をして、ちよろ〳〵と褐色の火を燃して戯れた。

キ、キ、キ、キ、キツ！

鼬の然うした惡戯は、火に祟ると言つて、鳴聲のする時は、祖母が臺所へ出て、禁厭に水を流したものである。

耳を澄すと、ざツと聞える。

屋根の上で、其の響を聞くと、長閑な春の日も、夏の日盛も、忽ち空が暗くなつて、急に日が暮れるやうに寂しかつた。

禁厭は其の場ぎりで直ぐに留む。空が明るくなつて、蜻蛉が透通り、天道蟲が輝くのであつたが、いつか知らず、日を經るに從つて、ざツ〳〵と溢れ、さら〳〵と走る水の音が絶えず聞ゆるやうに成つて、目の暗さ、心の寂しさ。

家の中に居ても同一であつた。

屋根に居て聞く時は、——

「山道は路險し。」……

「海道は波高し、

ましてや北陸道は、

雪深かんなるものをや。」

甚兵衛の山家の納戸に、玉暖かなる母の衿に、此の頰を埋めつゝ、聞いた。

（——今も聞く、——）

白菊谷の眞夜中の水の音が偲ばれた、悲しいやうな、生れかはるやうな、消失せるやうな、淚ぐましい思ひに堪へぬ。

いつも響く水の音は、前通の表町から、廣く深く奥を通して、我が立樹町まで續く、其の大きな菓子屋が、菓子だねを洗ひ、米を研ぐ、絕えず使ふ井戸の水で。井戸は壁一重隔てた我が家の隣に近い。而して、池ほどの大きさであると、父にも祖母にも聞いたが。

秋の或日、其の水が湧上り、軒下に溢るゝばかりの音して、人聲の立騷ぐのを、壁隣の大きな空洞と思ふ裡に聞いた。

菓子屋が井戸替をするのだといふ。

戸外へ出ると、小溝は滾々として瀨をつくつて流れて、水は小路に溢れた。

我家とともに、此の小溝を前にした隣家のしもた屋は、當時、菓子屋の一番番頭が住むのであつたが、もとは隱居所で、別棟に裏町へ建てた、菓子屋の地續きであつた。

井戸替の綱は、此の口へ曳いて出はしなかつたけれども、自然の人出入に塵格子がカラリとあいて、見透すと、框にも、すぐの部屋にも人影なく、疊横長に六疊ばかり、箪笥も道具も置いてはない。突當りの板戸が開いて居て、其の中が穴のやうに暗かつた。水氣が立つて、其の奥に、ほう、やツと言ふ鳥を追ふやうな人の聲が籠つて、ざあ〳〵どツと鳴る水の音。

後に知れた、が、此の長六疊は、殆ど通廊下のやうなもので、菓子屋の奥なる、女房娘など、人目に立たぬやう、裏町へ出るには、いつでも此處を使つたのだと言ふ。……お楊も禮吉と知つてから、母が祕藏した草雙紙、錦繪など見に來るのに、一度なんぞ、同町内の懇意づくで、此の六疊を抜けて來た事さへある。——

幼い藍子は、扨て、幾度か猶豫つたが、何故か白菊谷の水の音に似たと思ふもの珍しさと、不思議さに堪へ難くなつて、下駄を摑んで、ちよろ〳〵と疊を過つて、向うの土間へトンと下りた。

土間の廣さ、思つたより井戸の大きさ。ぐるりと廻つて、環に成つて、三四十人の人だかり。水は一面に溢れて、淺い流のやうである。

小兒なんぞは、大川に塵が浮いたも同然、誰も見答めるものはなかつた。

人數は多いが、薄暗い裡に、皆影のやうに動く。

足許の波と見て、空高い破風の明に動くのは、土間の凸凹に流る、こぼれ水である。

遙に、トンネルから透すやうな表町が見えて、其處を人が行き、馬が通る、……

別天地の感がある。

幼兒は奇蹟を見た。

藍子は、其處に立つ人の、物語の裡なる怪しき姫、白袴に緋の袴して、丈なす下髪に、黒々と黛しないのを怪しんだくらゐである。

「そうれ。」

と地の底から四五人一齊に呼ぶ聲に、

「おゝ來た。」

と同音に應ずると齊しく、二十人ばかり、素裸なのが一列に釣瓶の綱を曳いて、どどどどどと駈出した勢に、不意に引込まれて、吃驚すると、足許に打まけられた鯉鮒とともに狼狽へて、一所に哄とばかり雪頽れ狀に、廣い表町へ突抜けた。

七人ばかり、揃つて煎餅を燒いて居るのに、同じ世にある事を知りながら、井底から、打上げられたやうな思ひで、ころびもしないが、ころんとして、大きな菓子屋の軒前に、金米糖の核に成る芥子粒の如く立つた目に、ちらりと映つた、同じ世には又あるまじき、母親に似た面影を、一目見たのは、眞向ひの、何やら、金銀に輝く店前に立つて、此の井戸替の騒ぎを差覗いた、す

らりと丈たかき美女であつた。
髪に、白菊の平打の簪した、……
お楊であつた。
餘所の娘と知つては、似た母とばかり思ふよりは、取散した其の記念の草雙紙の美女の繪に、幾人も、目、眉、口許、其の似たのを發見して、一冊づゝ、選んで懐にしては、時々見較べながら、見較べようとてあこがれ出た。
其の行くのに、いつも折を待得ては、隣家の疊廊下から、菓子屋の廣土間を、野越え山越え、谷越ゆる思ひで辿つた。
誰にも見咎められなかつたのである。
「坊ちやん。」……お楊の機械屋の店から、小僧が駈出して稚兒に言つた。
「内のお楊さんが、繪本を見せて下さいつて、御馳走をしますから。」

「あゝ、美しい。」
と抱きしめて胸のはずみに、カラリと鳴つて、極彩色の口繪に落ちた、平打の簪、其の白菊の、高彫の、父の細工であつたのも、菊に香を添へ、露を添へた、床しい縁と成つたのであつた。田

舎源氏の國貞の繪の藤の方が、よく其の人に似て居るのである。
ふぢのかたは、すぎこしかた、ゆくすゑのことおもひやり、ねぶりもやらぬ、ねやのうち、ときのたいこのきこゆるは、はやうしみつのころやらん、あまどもくらず、しやうじをあけ、つぼせんざいをみるやうに、うちまぎらしつ、そらだきの、かをりをしるべにしのびよる、みつうぢはおづ〳〵と、びやうぶかいやり、こゑほそめ、
屏風は櫻、町は雪——お楊と二人炬燵にして。
「母うへさま、けさほどあげしわたくしの、ふみをごらんあそばしてか、「ヲヽよんだときのそのおどろき、
二人は一寸顔を見た。
「これほどまでにしんせつなと、心でないてそのふみは、はだみにそへてもつてゐる、「さやうならわたくしの、こひをかなへてくださりますか、「かなへる心で、をなごどもは、とほくへねさせて、わたしひとり、ねやしつらはせてまつてゐた。みちにそむくもそなたのため、いのちすつるはかねてのかくご、さアこちよつてねゝしや、——
藍子ははら〳〵と涙を流した。
「おつかさんが戀しいの、おかはいさうに」……とほろりとして、

と手をとりたまへば、みつうぢは、こゑうちくもり、めをしばたゝき、「みづよりきよい、おんみをば、わたくしゆゑににごらせます。此よばかりか、ぜんせから、むすびおいたるあくえんと、おもへばいとゞかなしきを、とよしのまへのべつでんには、おもしろさうにつゞみのおと、それにひきかへあなたにも、

「……」

「……」

「そなたもともに、うきくらうと、いだきよせつゝなきたまふ。

「姉さん、」

と見上げた目の露を、伏せた白菊の花にうけて。黒髪おもく引寄せた。花に颯と影さすばかり、お楊は瞼ほんのりと、

「禮ちやん、一生離れまいね、——私は見棄てはしませんよ。——」

「母さん」

其の練衣の袖に縋つて言つた。

「姉さん。」

と言つた。

「奥さん。」

と言つた。

「お楊さん。一目お顏を——逢つて下さい。」

白菊は搖れ、清水は流るゝ。

「禮吉さん。」

「……」

「私はまだ鏡を見ません。」

と言ふ聲は、香に震へて、薫を運び、

「私は忘れはいたしません。貴方の思つて在らつしやる萬分が一ほどでありませんでも、變つた顏を、お目にかけたくありません。……たゞ人のうはさにも、お楊はひどい容に成つたと、お聞かせ申したくないばかりに、蟲の毒にかぶれましてからは、親にも兄弟にも影を見せないで苦勞しますは、間違つてでも美しいと思つて下さる、貴方ばかりのためなんですよ！

しかし、……馬士の爺さんも然う言ひます。もう大概なほりました。一度鏡を見ましてから、更めてお目にかゝります。」

「否、おだましなさるんです。今夜はこんな不意でしたから、お遁げなさる間がなかつたのです。一度、これ切お別れ申せば、貴女は決してお逢にはなりません。否……お逢にはなりません。」

「まあ、そんな……私はおだまし申しません。……氷のやうに冷い水も、こん夜ばかりは、あなたのそばで、熱いやうに存じますもの。何で嘘をつきませう。今にも、一度鏡をみて、もとの顔に成りましたら、屹とお目にかゝります……おあんばいの悪いのに、濡れては悪うございます。おとなにお歸りなさいまし。」

「……身體なんか構ひませんのに——ですが、しかし、何時お逢ひ下さいます。」

「月夜に、……其のお月様を袞見に、——さうして恥しくありません其の夜に。」

と清しく言つた。

六十九

トン。

トン……

トン——

月も水も山も、人も、人の呼吸も、白菊谷はいま眞夜中である。

身支度して禮吉が、臥床の枕頭に、油暗く、灯の薄き行燈を、恰も廂漏る月影の如く、身に添へて、膝寒く、袖冷く、埋火の火鉢に寄つた。其の狀は、蓑蟲の蓑を脫いだ風情に似て、胸に指先を觸れて見よ、心臟は果敢なくチ、チ、と鳴くであらう、あはれに戀に瘠せて居た。

トン。

其の煙管を當てると、……

トン……

森を隔てて、あれ聞け——庄屋の住居から、お楊が靜に、或る微妙なる間を措いて、應ずるらしい音がした。

此の音は、さながら消えて飛ぶ魂が、膚白うして光ある天上の美しき、星に相觸れた響のやうな心地がする。

山一所、一面の月下の白菊は、たゞ其の星の影に似て……

禮吉の血は、其の響に赤く薰り、全身には月影の刺青した。

「月の明なる夜——」

と、お楊が約束した夜よりして、今夜は數へて五日めである。

其の間、或は曇り、或は降り、或は靄が深かつた。

其の時を過すのは、凡そ晒井の大いなる井戸の釣瓶に掬はれた小魚の、はじめて龍宮に謁した
る如く、菊の花を簪した島田の姿を見てから、二十年餘を過すよりも尚ほ久しかつた。
ひとへに、天晴るゝを待つのみ。人と、ものいふも、ものうくて、唯引被いて、晝も眞暗に引
籠つて居たのであるが。……

「白菊黄菊、なあ小菊、
こんな晩には、なあ、小菊、
兎と猿とが、なあ小菊、
餅と酒とで、なあ小菊……」

日の黄昏るゝより宵かけて、此の奥山家の稚兒たちが、手拍子に聲を揃へて、一人々々、飄々
として、舞ひ散り、舞ひ上る、風の木の葉に乗つて遊ぶらしく唄ふのを聞いた。

其が月明の賦に成つたのである。

思ひ掛けず、爐端に大男が居て、仰向けに寝て居る。

禮吉は山に遮られたやうに思つた。

此の日は、甚兵衛の家に、午過ぐる頃から何となく人の出入があつて、男どもの高聲など聞え
たのであるが、如法引籠つて誰の沙汰も人の話も聞かなかつた。

男どもの寝るのは、此處ではない。

或は甚次郎が歸つたか。

我を救つた魔ものである。

禮吉は、昔もの語に、たとへば願懸の祠、社の廣前に、信仰を試みんとして顯るゝと聞く……
眞黒な牛の背を踏む心地して、辛うじて、しかし、躓かず、轉ばず、倒れずに土間へ飛んだ。
最う跣足で。

……時に廐はと見れば、棟の草もうら枯れつゝ、明るい中に、馬頭觀音のおはします如く、小
屋は塚に似て、駒をば葬つたやうに寂寞として居た。が、却つて、嘶く聲、ひづめの音するより、
もの凄い。——渠は、此の時も、前夜と同じ、もの置と、其の廐の間の廂合を潜つた。
芝暖く、薪も香ふ、破筵も簾を捲いて、忍ぶ細道玉を敷く。……
森の光は流るゝ如し。
庄屋の棟は、月宮殿。

蜘蛛の呪詛

七十

「可し、此の位な事はあるだらうと思つた——覺悟をしたんだ。……何の！——」

渠は背戸山から納屋の出口の、其處を、引返して、更に納屋の中にものを捜つて居た。

蓑か、何にする？　恁る月夜に、……

否、渠は刃器を求めた。

何故と言ふに、あの風呂桶を片寄せた破壁から掛けて、小鳥に霞網を引く如く、前途を覆うて、一面に蜘蛛の巣が懸つて居たから……

それが、キラ〳〵と光つた。

惟ふに、月の中空に充満ちた露の玉が、刻まれて、尖つて、膸を織くして霜に成る時の、深山の現象を、怪しき幻に視たのであらう。

が、拂へば搦むし、引けば粘る、……ばかりでない。前夜のあの小雨の時は、引くに從つてさらさらと鳴つたのは、色染めた木の葉であつた——可懐さに、其の關の手形はまだ袂を棄てない

——が、茲に搖拂ふ絲とともに手繰られて、壁の面に黒くぼと〳〵と蠢出づるものは何ぞ、醜き蟲の影である。大きな蜘蛛に相違あるまい。然も、其の影の動くとともに、虻とも蠅とも分かず、忌はしい音を立てた。

ぶうん、ぶうん、ぶうん——……

と鳴る。

嫗が、痩せさらぼうたる指で絲を引いて、絲車を廻す音。……

慄然と血の冷ゆると齊しく、水のやうに澄む瞳を屹と凝して視ると、指の環ばかりの蟲に、嫗の目が見え、鼻が見え、窪んだ目が見え、くひしばつた唇が見える。白髪が生えて、かき開けた黒い肋骨が見え、耳にスクと立つて、ばさ〳〵と肩に亂れた白髪の、其の一條づゝの數ほど、總身の皺が歴々と顯れて、恰も火の山の燒石に刻んだ、三途河の奪衣婆に髣髴として居たのである。

蜘蛛の絲は、限なく其の車から湧いて出る。

破れば絡ひ、斷てば繋ぐ。其の煩さは、尚ほ忍ぶべきも、堪難いのは、あの車に取る絲の原料は、盡く、こゝに、ひとり苛立ち狂ふ禮吉の身よりして、皮も、肉も、血も、魂も、ずる〳〵と引出さるゝやうな思ひがした事である。

非ず、それよりも寧ろ、堪難かつたのは、月の前に、目が曇つて、山が暗く成らうとした瞬間

であつた。

暗ければお楊は逢はない。

蜘蛛の面はニヤリと笑つた。

腥い臭氣がして、耳がぐわんと鳴つた——今度は、目口から葱の核が無數の黒い蟲に成つて湧いて飛ばうも知れぬ。

渠は頭を摑んで、納屋に刃器を求めに引返したのである。——

筵を探ると、山枌がバタリと倒れた。

此の枌は、錆刀のやうに處々光つた。が、刃があるのでは決してない。……凡そ此の山枌に限らず、古箒も、石臼も、納戸の煤の中に棲むものは、盡く其の性が金銀珠玉である如く、くすぼり返りつゝも靜に輝いた。……屋根、壁の隙間から、漏れなく一つ〳〵影がさすのである。月は天心にあつた。

渠は、やがて一挺の斧を得た。

が、取ると、ぼろりと落さうとして慌てて取直した。……恁る時、其の柄が朽つると同時に、我が皺める手足と、頤に垂るゝ白い山羊髯を見るであらう、と憂慮したのである。

碁を打つ仙人は其處には居ない。

斧を取直すと、決然として納屋を出た。

出しなに、殆ど無意識に眞向に翳して空を切つた。

風の、こゝばかり吹くが如く、ぶん〳〵と絲を繰る音が絕えず我が居處を繞つて響いて、納屋は早や屋根ぐるみ、白く蜘蛛の圍に卷詰められたやうに思はれたからである。

「何を、何を。」

渠は縱橫に斧を掉つた。

就中、巢の濃きかたまりを、刃を扱いて切ると、搦んで、する〳〵と這出す千筋の太い絲に連れて、車は壁の面を廻り廻り大きく成り、蜘蛛は八方へ足を踏開いた。斧の手をしかと凌ぐと見えつゝ、ふはりと乘つて、巢の上へ手足を開いて、ずるりと腹這ひ、ふは〳〵と宙に寄つたのは媼である。

白髪を捌いて、齒を剝く處を、

「あツ。」

思はず退り狀にハタと切つた。首はつけもとからビクリと落ちた。

同時に皆消えた。

月は玲瓏として居る。

時に唯一つ、地に落ちたまゝ、尚ほ消えない其の白髪の首の、次第に豆粒の如く小さく成り行くのを、身震をしつゝも瞳をためると、眞黒な頭に、血のあとの紅、一點を留めて、二筋の髯が、きり〳〵と鋭く、然も鷹揚に、輪を巻いて動く。

地軸に突込むばかり、斧の背を返して犇と打つて、

「斑猫。」

バツと、刃器を棄つるとともに、蹌踉と退つて吻と息した。

此の幻怪なる出來事は、しかしながら、嘗て定められた正本の一節で、我は木偶の如く操られたやうに思はれて、忽ち些の不可思議をも感じなく成つた。

トン。

トン……

あれから、あれから……時はおくれた。

「……待つ——待つ。……お楊さんが——お楊さんが。」

跣足で、はた〳〵と月下を走る——跫音は、怪鳥の羽搏くが如く響いたのである。

巡禮。お楊より

七十一

お楊——雪邑の令室は、低き巖角、石の砧に、露を敷いて、葉も莖も避けながら、むらがり生ふる白菊なれば、花の中に包まれて、端然として、姿を見せた。

清水の流は、裳に近く、月に十三絃の白銀の調を掛けて、玉盤に光を湛へつゝ、麗人の影を奏でて流るゝ。

お楊の容は、さながら滿地の白菊を唯大なる輪にして、其の一輪の蕊であつた。

かよわき肩に、よう支ふる、品よき圓髷にも擬ふ、房やかなる黒髪を楠巻なる、眉の匂はほのめきながら、袖を置く手もすんなりと、膝もなよやかに、さしうつむいて居たのである。

「お母さん。」

「はい。」

胸を打つて、あとの聲が續かなかつた。

呼吸をのんで、

「姉さん。」
「え、禮ちやん。」
ついで出すべき言もなく、
「奥さん。」
と言つた……
「あゝもう、禮吉さん、」
とばかりあつて、肩、黒髪も、やゝ斜に、
「貴方……奥さまは。」
「女房は持ちました。」
「御一所に。」
「否。」
「東京に、」
「否、」
「それでは。」
「女房は此處に居ります。——否——……私と一所に、こゝに、……私の心と、私の身體と一所

に居ると言ふ事なんです。——お楊さん——失禮ですが、お楊さん、私は女房を持ちました。しかし女房は世の一切ではありません、女房のほかに、日も、月も世界もない事はないのです。現に、こゝに月の光があります。白菊が咲いて居て、清水が流れて、清水には其の薫があります、其の上に月の光があります、其の上に、……」
渠は凝と視た。
「其の上に、貴女がおいでなさいます、事實ですもの、お楊さん、女房のほかに、貴女をお慕ひ申すのは、女房と二人して、月を見ますのも同じです。身も心も私と一所ですから、こゝで、貴女に言ひますこと、申しますことは、女房も聞いて居ります、いや〳〵、聞いて居るより、一所に話し、一所に申し、一所に言つて居りますも同じ事です……」
禮吉は言ふことも、露に、葉に、置く手の場所も、しどろに成つた。が、僅に氣を沈めて、改めて、
「貴女お加減は？」
とやゝ落着いた。
「……最う、やがて二月に成りませう……お月樣は今夜はじめて、……」
帶の合せめ、やゝ伸びて、少し衣紋を正したが、

「……漸と、あの顔を上げまして、照されながら見ましたよ。ですけれども……禮吉さん……貴方に見られますのは、……私は恥い。」

と肩のふるへを、おくれ毛に幽に傳へて、うつむいた顔を上げた。上げたのは禮吉に背けたのである。背けた片頬の雪なすを、削るが如き月の影かな。

仰いで、二十年の昔の面影の、微に痩せたと見るばかり、年紀も端麗さもかはりはなかつた。菊を透せば、菊に隔り、葉をさしのぞけば、葉に隔る。

やあ、餘り是では、かばかりの美しさは、霧が嫉んで呑むであらう。

目を下に伏せた時、低くついた我膝近く、跣足の雪の素足があつて、愼ましく深き褄はづれに、しつとりとかゝる袵に、僅に片足の其の爪さきの、密と漏れつゝ、裳に反つたおや指が白く幽に震へたのを視た。

「あれ……」

「否、否、お楊さん、……生命を掛けて申します、私は生れました時からの約束のやうに、貴女を、貴女を戀ひ、こがれ、慕ふんです——雨も降り、風も吹き、霧も、靄もありますから、晴曇は知らないこと、大海の潮と一所に、片時も、此の世の中に、否、私に、貴方と云ふ月の影の離れた事はありません。毎夜のやうに夢を見ます、夢さへ夜の夢ばかりです。——それだけまでに、

貴女を慕ひ、貴女にこがれ、貴女を戀ひはしますけれど、……しかし、決して、誓つて、そんな氣で、心で、いま觸つたのではありません。餘りに、貴女の足が、……足がお冷たさうです、懐中につけて暖めて差上げたいと存じました。……うつかり失禮をしましたのです。」

月にめかたのあるやうに、其の重さに堪へやらず、風なきに菊の枝のしなふばかり、腰掛けた巌もしなやかに、ツと崩折れて、

「まあ、あんな事を、」

と、たしなめるやうに云つて、ふと微笑むかとすれば、はら〳〵と落涙した。

涙は取る手に熱かつた。

「母さんは、貴方の母さんは、此の山奥で、貴方をお抱きなすつた時、どんなお話をなさいましたて。」

禮吉は、月に命ぜらるゝ如くに言つた。

「海道は波高し。」

「……」

「山道は路巌し。」

「山道は路巌し。」

「まして北陸道は雪深かんなるものをや、……」
白き項が禮吉の肩にかゝつた。
「いざ〳〵伊勢路にかゝらむ。」
「禮吉さん。」
「……」
「お母樣を念じて下さい。觀音樣を、鬼子母神樣を念じて下さい。」
「……」
「巡禮がしたくなりました。」
「私が貴方の手をひいて、……」
「あゝ、お楊さん。」
途端である。
背後から、眞黒な影が小山の如く蔽ひかゝると、ものをも言はず、一棍の山杖が禮吉を一擊した。
其は甚次郎であつた。——
此方は殆ど本能の力で、ハツと躱した頭は、のめつて、僅に前へ避けたばかりで、首筋を掛け

た背骨を縱に、氷の裂けるが如き打撲をうけた。
唯、項は折れて、頭が離れたと思ふ渠の首は、しかし首ばかり、最期の一念を籠めて、お楊の胸に縋つた。が、首には縋るべき兩手がない。……と現に直覺した其の首は、口で縋つた。離れまいとして食入つた唇は、柔かい白い胸に屆いて、いまは世に思置くこともあらずと思ふと同時に、我が頭は、頭赤く羽黑くして髯ある毒蟲に殆ど其のまゝであるかに迷つた。
僅に、袖を漏れた、二の腕に羽の留つたのでさへ、此の麗色を汚し、爛らしたのである。
齒と唇はお楊を殺さう。
耳はもがいて、摺つて離れようとする首筋の、しかし確とお楊に抱きしめらるゝと感じた時、お楊の黑髮が颯と亂れた。
忽ち暗く成つて何も見えない。
日も知らず、時も辨へず、冥々たる霧の裡に、駒が黑い。——其の上に渠は騎して、美しき神の如きお楊の姿が、悄然として其の前を行くのを視た。
幽に水の音を聞いて、下に千仞の斷崖を臨んで、二股尾を過ぎる、と心着いた時、眞蒼な淵の上に、二つ舞つた柴の束が、見る〳〵一つ沈むと、一つはふは〳〵と輕く浮いて、風に乘つて、ふつと來て、我が手に抱かれた。濡柴は蓑に似て、其の蓑に、優しい女の顏があつた。

其の顔は露野であつた。

露野は禮吉を慕つて、あとを追つた。……町を離れた人なきあたりで、凌辱を加へようとした大郷子等一類と、かの姫を守る隠亡等と捲闘した。其の修羅道は、身を以つて脱れて、單身白菊谷にあこがれたが、あはれ、二股尾の悪路にして、多人數の土方のために捕へられて、露野は身を淵に投げて、眞日中に消えたのであつた。……

禮吉が再び意識した時、病院の臥床に横はつて、其處で——妻のお橘を見た。

大郷子等が、うよ〳〵と集つて居る——見舞をす、と稱へて、且つ嘲り、且つなぶりに來て居たのである。

渠等に對して、病者の身の楯に成つて、激しく目を見据ゑて居たお光の顔は蒼白かつた。が、お橘は瞼を活氣に染めて、勇ましく言つた。

「確乎なさいよ。骨は私が拾ひますから。」

お橘は當時、喧嘩のために傷ついたと思つたのであつた。

さて、名もなき詩人には、藍子には、寧ろ本懐であつたであらう。戀を刻んだ、白骨の彫刻も

のと成つて、お橘の袖に抱かれた。

渠の父母と、露野のとを合せて、四人の骨を守るのに、お橘ばかりでは、其の胸に、重さに堪へまい。……

お光は、一年の暇を取つて、ともに東海道を抱いて上つた。

上野に通ずる北陸線は、秋の霖雨のために、途中故障があつたからである。

東雲であつた。

汽車が箱根を越すと、雪の富士は頂を薄りと桃色に、紫、濃紫に裾を曳いて、霧のいまだ暗い裾野の田家には、早朝の燈が映つた。

「目をお覺しなさいな。」

と、お橘が袖で包んだ白いものに言つた。

「箱根を越しましたよ。」

お光が其の時、帶の數珠を取つて、手にかけて、目を閉ぢた。

熟と此を視ると、颯と色をかへて、四邊を忍ばず、お橘は、包むべき手巾の隙もなく、はじめて、ハツと泣いた。

——此の生れたまゝの江戸兒は、田舎でなんぞ死んだものは、箱根を越しやあ、誰だつて目が

紫障子

覺めるやうに蘇生ると信じて、それまでは涙一滴落さなかつたのであつた。

葬式の日に、お楊から包が屆いた。丈にも、疊にも餘るべき黒髪に、名香を卷込めて、——

音信が添つて居た。

……

……

いま一度、斑猫に咬まれ申したく、さ候へば又白菊谷にて、お目にかゝられ候こととそれのみ念じ候〳〵。

……

麻川様

御奥

楊より

一

戸外には黒い雨が簾のやうに降つて、颯と繁吹いて雨戸に當ると、ばら〳〵と斷れて礫のやうに亂れながら、隙間洩る闇の灯で燬と白く成つて入交りつゝ、ばら〳〵と枕頭の障子を敲くと、其が浸込むやうに、ばら〳〵と鳴つて、面を打つて　目、口、鼻を飛塞ぐ。其の鬱陶しさと言つたらない。

が、拂つても落ちず、撫でれば、掻けば、粘々と附着いて、其のまゝ痘痕に成りさうで、生暖く、臭い、腥い。

其のおなじ事を、繰返すうちに、吐あげるやうな、咳込むやうな胸苦しさに堪へないで、アッと思ふと、京都の宿で目が覺めた。否、目が覺めたと言ふより、正氣づいて我に返つたのであらう。半ば夢心地に魘されて居たのであるから。……

木菟は　私の友人を恁う名づける、木來はA氏とかB氏とかすべきであるが、たかが平民の上方見物、旅費さへあれば何もアルフアベツトまで借りて使ふ要はない。しかし此の話の男が內

內との事ゆゑ、（鶯が、鶯が、たま〳〵都へ）の童謠に因んで假に鶯と名づけて、次手に題も鶯が可からうと思つたけれども、形、恰好、何う見ても鶯と云ふ柄でない。然し晝間は憚として居て、夜に成ると、珍しい事を見よう聞かうで、耳を引立て、目を圓らかにしたと言ふさへあるのに、吶々としてもの語るに口を尖らかす工合が、いや、可笑いほど何かに似て居る……然うだ、肖如だから木菟とする。

扨て木菟は、石を括りつけたかと思ふ重い枕から、漸と頭を擡げて、先刻からの寢苦しさに自然と夢の中で悶掻いたと見えて、肩が拔けて、ぐつたりと寬かつた、胴着の袖ぐるみに、苦しい胸を反して起上らうとして、ぐつと手を支くと、羽二重より柔かな、ふつくり滑かな手觸りに、毛爪に掛けて、雛鳥か何ぞ引摑んだか、とハツとして、肩を捻つて身を開いた。

並べた厚衾に、美人が一人、梅、松の光琳模樣、朱鷺色地に處々、色紙を淺葱で鹿の子に絞つた、紋羽二重の掛蒲團、おなじ白羽二重の裏つけたのを二枚、ふはりと掛けて、こんもりと透つた鼻の半ばまで、輕さうに襟を被いで、枕を近く、然りながら、柳が霞む黒髮で、すや〳〵と眠つて居る。

木菟の今度の旅行に取つては、唯一の同伴なり、案內者の、大阪南地の蘆繪と言ふ藝妓である。眉毛をほんのり横顏で、眞白な百合の花を喰かせたやうに、柔く、甘く、暖かさうに蒲團に投

げた手の上へ、起きるはずみの肱をついた。木蔕は吃驚したらしく胸を横へ引いて起直つた。

唯見ると、風が誘つたやうに女の腕の其の白百合が、微に揺れると、白羽二重の袖裏が縺れて、緋の板〆縮緬の肌着がちら〳〵と夢を囁く、夢も嘘ぞ燃立つばかり紅であらう。と思ふ、藤紫の半襟も、微に汗ばむらしい。萌黄の地に、百合を白く、淡いと濃いと、葉を藍緑の友染の長襦袢の肩を、一輪白く覗かせたのが、胸も露白、と見えつゝ、其のまゝ静に蝶の翼の寝息を續ける。待て、面影さへ寄添うて、随分手枕に貸しさうな其の腕を、怒つたら詫るまで、うつかり觸つたのを驚いたのではない。

木蔕は美しい寝鳥の夢を破つて、目を覺さすまいと思つたのである。

二

「嘘ぞ疲れたらうな。……頼まれて引受けた義理とは言つても、義理ばかりぢやあ怎うは出來ない。あだには思はれません。あゝ、つい昨日のやうだけれど、今夜で三晩か、……大阪で一晩、昨夜は奈良で一晩、……夕方の汽車で宇治、桃山を通つて京都へ來た。――」

宿つたのは八坂の塔を、森に仰ぐ、並樹のやうな松原の片側町を、奥深く、一軒家に似た、襖も疊も、姿見の中に色を其のまゝ透通る、綺麗で、閑な、芝玉と言ふ家であつた。

「餘り旅行をした經驗がないとか言つて、此家も萬事が行屆いた家だと言ふ事を、おなじ宗右衛門町の友だちから聞いて居て、連込んでくれたのだが、日が暮れて、七條の停車場へ着いた時、何處からも言込んで置かないのだから、然うでもない。……先方が立籠んで斷られでもするやうな事があると、旅宿は他へ取つて、代へるにしても、一日でも道中、泊をまごつかせるやうでは申譯がない、と言つて、そんな事にも心遣ひ。――一つの大な氣扱ひより、此の何でもない、細い、小さな、セコンドを刻むやうな心配をする方が、どんなに氣を使つて、心を疲らせるか知れません――あゝ、然うだ、大阪から掛けて、奈良と、怎う一つ座敷に寝て居て、此方が一寸でも動くと、煙草にも、灰吹にも、直ぐに目を覺まして、(火はありますか。)(お湯を上げませうか。)と、寝ながら、南天の實を散して、枕に雪の手がつもる。……」

と寝苦しい夢に苛まれて、ぐつたりと成つた顏を、染色も模様も對な掛蒲團に押着けると、熱い我が鼻息が、密と靡いて、露白な其の白百合の香を吸ふやうに膚に響く。

木蔕は手で我が呼吸を遮つて、

「あゝ推參な、口說いたら、枕に貸しさうだなぞとは沙汰過ぎた。此は、いぎたなく寝忘れたのではない。寝ながら張詰めた氣の油斷なく、此方の身動きに連れて、咳をすれば、(かぜひくな)で、すぐに掛蒲團の襟を壓へる心構へをするのであらう。

蘆繪姐さん、目を覺すんぢやありませんよ。……」

彼は逆に手を伸して、枕頭の煙草を取つたが、ト吸附けようとすると、其さへ何故か煙が胸に閊へさうで、獨り卷莨で額を壓へた。

「眞個だ、……宵に七條の停車場へ着いて、自動車を雇ふ時も然うだつけ。——奈良を立つ時は曇りだつたが、京都は雨だつたと見えて、びちや〳〵と燈に黑い艶を見せて濡れて居た。……何うやら直ぐに東山の影が倒に映りさうな、あの廣場を。急に陽氣も冷く成るし、……早く落着く先へ落着かせようと思ふ、此の人の深切から、一寸……眉毛の上へ、篝火で白魚の影が映つたやうな、舞仕込の小手招ぎくらゐでは、づらりと並んだ大な目の光る自動車が寄つて來ぬ。

何とか云つたつけ。……渡舟を呼ぶやうだとか言つて莞爾して、まだるツこいと、あの濡れた地を、草履で構はずひた〳〵と、世帶崩して、大輪の銀杏返の鬢を搖つて駈出すから。——

此方は、汽車が籠んで袖を押合せて居た思ぢやあ、太郎坊の袖にぶら下つたと云ふ見物ではない。天人の翼から落ちたやうに、停車場前の人脚の中にぽかんとして、信玄袋一つ無しに杖をついた處は、雁が留まつて、沖の凪に、ふはりと浪に乘つたやうな樣子だつけ。……」

三

木菟は思續ける。

「出番の都合か、先約でもあつたか、蘆繪が最初掛合つた自動車が、オイソレと捗を遣らぬ。並んだ次のに掛ると、其が煮切らず、三臺めが又埒が明かぬ。（行くのかい、行かないのかねえ。）（然うどす。）とか言ふのが聞えて、茶色の鳥打を耳まで被つて、もつそりと大外套を被つたのが二人まで唯のそ〳〵と步行くのが見えて、蘆繪が（困るわね、焦つたい。）と、並んだ七八臺の自動車の間を、縫つたり、拔けたり、足袋をチラ〳〵と褄を捌いて、出つ入りつ間を廻る。模樣の花は、濡れても露で好いとして、雨にしとりを見せてむくりと頭を並べた發動機が、巨大な牛の面に見える處へ、ふツと地を摺つて青白い光を放つ電燈は、這奴が鼻嵐を噴く形で美しい、姿は、其の間に挾つて、上品な紗綾形の濃い紫紺のコオトを被た姿くるみ、一束に挫折つて、鞍に着けられさうで、痛々しかつた。

呪詛はれたやうだ、牛の時詣に——怪我をしよう。

で、飮續けの酒に疲れた聲を絞つて、（私は構ひませんよ。步行いても、お前さんと連立つて、京の町を通れば光榮です。）（あ、そりや私の方こそ……ですけれど最う出來ました。）と其の時極つたらしい自動車の窓に立つたのが、自分で扉をよつと開けて、（さ、お乘りやす。）と、何うかすると其のまゝの阪地言葉に成る。……

それもサ願はくは、構はず、うまれたまゝの舌の小唄を、自由自在に聞して貰ひたいのだと、此のおのぼりは言ふのだけれど、聞取り悪いと思ふ所爲か、それとも調子が合はせいゝと思ふのか、窮屈さうに（ですよ。）（ねえ。）で言葉を合はせる、時々舌ッ足らずに成つて、仇氣ないが、可笑いと、言ふものゝ、且つ以つて自分への心遣ひ、これしかしながら心中する時、先祖の宗旨をかへるの意氣だ、粗略には思はれません。」

と頷くやうに、傍の寢顔を見る下から、つい目を瞑つて、苦い顔して、「それに、身に染みて優しい事を言つたつけ。……然う〳〵、自動車がまつしぐらに、宵暗の、巻繪の京の燈の中を飛んだ時だ。——いや、また此の女が窓を開けた。と成ると、容色と言ひ場所柄で、牛車の簾を捲いた風情であつた。ト並んで對に成つた處は、吉野紙に包まれて白粉の薄霞に籠つたやうなものだつけ。忽ち烏帽子でも被つた氣で、木曾將軍此にありと、なけなしの髯を反らしたまでは可かつたが、つむじ曲りの牛飼めが、目にもの見せむず意氣込やら、疾風の如く大路を飛ばせる、宵の口の人通りさつ〳〵と一團りづゝの黒い影が粉に成つて散る度に、腰は据つても、肝はヒヤイさに宙に躍つて、ふためく、轉げる。堪らぬと、窓を敲いて、（やあ、運轉手、急ぐ旅ではないよ、遅くても構はない、人達に怪我

のないやうに、可いかい、裡に居る二人なんざ、些と壊れても構はない。）と正直な處を云ふと、（眞個にな。）と此の女が莞爾して、一寸膝に手を置いたが、片手で前途を熟と拜んで、（もし、清水の觀音樣、これからお傍へ參ります。誰方にもお怪我のないやうに。）

やがて、ぽつと霞の花の咲いた中を、眞青に水が流れる、岸の柳が燈ながら、夜の黒地の羽二重に友染の影を流した、大橋の上を、靜まつてスツと抜けると、成程、見當は（お傍らしい。）が、颯と掠める、窓の音が松風の聲と成る……狐に魅まれたのだと、此の邊で、肩を合せた此の別嬪が、フッと消えて向うの辻へ、石の地藏が立ちさうな、松原並木の片側町。

二ッ三ッ四ッ、忍べ、と謎を掛けたやうな、扁暗く門深き、みがき格子の磨硝子の軒燈がちらちらと彼方此方、松葉を歌の色紙の影。」——

彼は蒲團の色紙を見た。

四

「自動車がする〳〵と行過ぎて、がッ〳〵と齒を噛んで、一つぐい、と小戻りをして留まると、髪を低めて扉を出るのが、雲を離れて降りるやうで、（あ、此處だんな。）と、春の朧の玉芝を、眉ほんのりと仰いだが、（一寸、待つておくれやす。）と續いて巣の裡から耳を出す木蔦の顏を留め

ながら、宵から三寸下つたやうな格子戸をガラリと開ける後姿が、座敷がなくて斷られうか。で、覺束なさの瀬踏だけれども、手綺麗に門に嵌つて、さすがは藝者の、一寸横町へ湯歸りめいて、色つぽいのが賴母しかつた、……トばかりあると、一度消えた跫音がばた〳〵と響いて引返して來て、（さあ、何うぞ。）とひつたり窓に倚せる顏に、埃だらけなのを觸らせまいと外套の袖を圍つてポイと出て、……（お世話樣）で、恁う松の中に、ぽツと濡色で映る、何とか（だんご）と書いた掛茶屋めいたものを、明日は茶を飮まう、とゆつくりした心に成つた、可懷しく傍見をしながら、——（自動車屋はん、一寸待つて、）と言棄てた此の女と、……待てよ、格子を入つて敷石が露地かと思ふほど深かつたので、大阪の泊で、炬燵で聞いたのを思ひ出す。——

お前の袖と私が袖、……

トンと地唄の合方で、カタ〳〵と入ると辷つた、いや胸を反して辷つた。（あれ危い。）留南木が衣紋の突支棒、滑かな石に水を打つて清めてあるので、田舍もの〳〵と、低聲で呟いて、發機で摺合つた片頰を背けて見返つた時に、入口に裝つた、まだ新しい裝鹽が、裝鹽と知りながら、松はあり、渚の波、とふと旅の心の催すトタンに、ぽつりと白く、三石、碁石が並んだやうに見えたんだ。

——はてな……」

——と思ふと、アツと込上げる、胸を厭へて、衾に突伏しさうにすると、火も點けないで持つた卷莨が、ポロリと落ちた、が、切なさの餘り我知らず手先を藻掻いたと覺しく、卷きめがほぐれて、ほろ〳〵と解けて、落ちて、白と薄紅梅の掛蒲團の小枝に掛つたのが、一寸結玉章の風情があると、精々もの綺麗に氣を持替へて、胸を透かさうとしても、炬燵越にホツと立つ、媚かしい香水の薫さへ、吐くなら吐け、と藥が利くやうで、アツと又嘔上げる。……

心を轉じて、氣を外へ移さうと、種々に宵からの事を辿るうちに、ハタと碁石に折衝ると、ゲツと、其が、胸先へ支へたのである。

「……簾のやうに黒く降つた、雨が碎けて白く飛んで、障子を敲いてばら〳〵と、枕を打つて、亂れ掛つたのも、交つた碁石。……」

と、うゝ、と口一杯の唾を、漸と嚥下して、吻と息した。

「馬鹿な、何を食つた紛れにだつて、碁石が腹へ入りさうな譯はない。……が、しかし變だ。あれから廊下へ通つて、……」

と木蔕は獨で、密と胸尖を撫でさげ、撫でさげ、

「通ると、其處へ、はじめて人柄な圓髷に結つた女中が突當りへ迎ひに出て、（おいでやす……何うぞ此へ。）と更まるから、自然と此方も、（はい、はい。）と慇懃に通つて、見事な手水鉢だ、あ

あ、好い梅の樹だ、思ひきな石燈籠だと、庭を前にした奥座敷、次の室で、もそりと外套を脱ぎながら座敷を視ると、最う整然と、爐を二個、緞子で切つたやうに褥設けをして一つ挟んで、中を措いて、桐火桶が對に出て居る、行屆いたものだつた。

唯、先づ脊筋を、揺つて、衣紋を通して、床の間を背負つて、天井を憚らず立つ處へ、波に片帆の三ツ紋、薄色の羽織に成つて、春ながら京の雨の冷さに、些と蒼味を帯びた色の白い中肉なのが、一寸おくれ毛を拂ひながら、着崩れた片褄長くはら〳〵と百合のほのめくのが、亂れた白脛に紛つて入る蘆繪の風情は。……」

五

「恁う、其の、新婚旅行にしては兩方が碎け過ぎる。……芝居から歸つた女房のやうでもあり、病上りを見舞はれた妾と言ふ狀もあり、いや、荷物が無くつて立つた處は、泊りに着いた落人の體もある。……

と思へば、霞に棧を描いたやうな、障子に寄せて、黒檀の唐机を据ゑて、蒔繪の硯箱を飾つた。いづれも品ものの、づツしりと落着いたのを視れば、一夜假寢の心地はせず、御殿の奥で反魂香を焚いた中へ、高尾が化けて出たとも見える。

少し窶れて、金紗縮緬に飛模様の絞りの蝶が萎々と成つて、胸高な帯さがりに淺葱の扱帯の、青い水のやうに浮世を覗いた狀は、膚の白さを湧出づる清水のやうで慄然とさせた。……

寒いと言へば、京は音にも聞く底冷のする處へ、餘りに片付いて掃除が屆いて、襖も障子も透通りさうなのは、夜氣が染みて冷たかつた。惡く言ふのではない、柱さへ天井さへ玉で刻んだやうなのだ。

恁うなりや野郎の玉の輿だ。

ふはりと緞子へ、度胸を据ゑたが、半分浮いたやうな腰を沈めると、此の女が、坐つた蒲團を少し辷つて、(お疲れだすやろ。)と斜に手を支いたから、此方も會釋をして、(御苦勞樣。)は一寸妙な形だつたが、——(もの閑で行屆いた好い家ですね。しかし、寒い。)と肩を縮めて、此の女の媚かしい其の膝の上へ蔽被さるやうに、水鉢に噛着いた處へ、女中が來て茶を入れる、出來合の殿樣、袖を拂つて居直つたと。……(大阪からお出でやしたか。)(違ひますさ、奈良から。)(えらい、いゝ處だんな、お樂みで。そやけど寒うおましたやろ。二月堂さんのお水取がホン濟みましたばかりやよつて。)……

成程、奈良でも旅籠屋で、然う言つたし、大阪へ着いたばかりで梅田の停車場から乘つた車夫も言つたが、一年中の寒い時ださうで、どつちも嚴しかつた。が、今夜の京は一入で。……胴震

をするばかり。と見て此女が胸で壓すやうに氣を入れて、（御酒を早うな。）（はい〳〵、お肴は。）其處で、すき燒で鴨を誂へた。

此の鴨は旨かつた。……待てよ、空腹で熱燗で、じわ〳〵と來た處を、舌を燒くばかり、ホツと云つて、——あれが、何も胸へ支へたとは思はれない。……他に海鼠、と一鹽の若狹鰈……焜爐の火が赫々とするから、火鉢は一つ向うへお隙で、此の女も、氣疲れやら、何やら立つけた四五杯の遣取りに微醉と成つて、一つの火鉢へ凭掛つて、襟脚も白々と覗かれる肩を含すばかりにして、あの若狹鰈を、綺麗事に、何と雛へでも供へさうに、細い指で鰭を放してサツと搓つてくれたつけ。……

鰈が中毒る理由は無い。

が、はてな、あの時の、此の蘆繪の手は、碁石を持つた其のまゝであつたらうか。」

彼はけだるさうに、肩を窘めて首を掉つた。

「……黒石だ。……が、一體此處の内で、碁石を視たのは、あの鰈を搓つてくれた前だつたらうか後だつたらうか、卜然うだ、前だ。

四五杯立續けた杯を、焜爐火鉢の端に置いて。——女中は立違つて居なかつた。——煙草を取らうと、手捜りで、火鉢の附根で、手が此の女の袂に觸つた時、コトツと指に當つたものがある。些と大袈裟だが、然うでない。……ヒヤリと指が切れさうに冷くツて、氷の鈇片のやうに應へたから、一度落したのを、又拾つて撮んだのが、あの碁石だつた。

仔細あつて、——蘆繪が一石、黒の碁石を持つて居るのを知つて居たから、（袂から出たんだね。）（あ、眞個に。）と、此の女が、掌で一寸見て、指で辷らしたと思ふと、袂ぢや、つい、又溢す、机の上でも大業だし、だつたやら、くの字に成つて、うしろ向きに手を伸して、障子の桟へ、（五ツめ）と忘れないお禁厭だらう、一人で言つて載せた時か、……」

六

「蘆繪が、別に開けもしないで、障子越に、偶と氣付いたさうで、（あゝ、亭のやうな、いゝ離亭がありまんな。）とか言つて、熟と覗いて居たつけ。

其處どころぢやなかつた。此方はいまので煙草を取つて、火を點けて、唇へ持つて來ると鼻を突いてプンと嗅い。糠のやうな、油のやうな、腥いやうな、何とも堪へられぬ臭氣がした。酒も煙草も座にあるものの、あんな惡臭を放つのはない。……指だ。

いま碁石を拾つた指だが、其にしては、變だ、希有だ、と思つたばかり、何の穿鑿をする隙もない。……一度其の臭氣を嗅いだばかりで、あゝ、可厭だと思ふと、今食べたばかりの、鴨には

羽が生え、鰭には鰭が湧いて、胸間と思ふ處で、ピチ〳〵、バタ〳〵と跳ね廻る。アッと壓へて肘を支いて横に成つたが、掌に觸る耳が冷いほど、何故か一時に慄然とした。

いや、まだ其の上に、其の以前から胸に支へて居たものがある。

京へ入つたのは夜だつけ。——四時何分かの汽車で奈良を立たうとして、猿澤の池のほとりの勝手屋とか言ふ旅籠を出て、障子の破れのぺら〳〵と風に動くのが、白い舌を出すやうな、古ぼけた白晝の廓を拔けて、町通りを導者づれに交つて、古道具屋の店の人形の西行にも、葉茶屋の銘の喜撰にも、紅屋の看板の小町にも、活きた生のものに逢ふやうな氣がしながら、蘆繪と二人づれで、ぶら〳〵と歩行いて。……」

——風は冷く、砂はさら〳〵と捲いた、が、それも黄色な幕を絞つて、古い都の面影を通りがかりに覗かせた。奈良の町の風情を思ひ浮べると、こみ返す胸も、やゝ靜まつた。が、まだ煙草を飲む元氣も無しに頽然として、それでも背けて居た顏を、蘆繪の寢姿に向け直した。

「あゝ、此處に寢て居る人は、其處を百合の褄の水際立つて、外套と並んで歩行いた、可懷い……其の時は、氣ぶりにも、こんな、むか〳〵する可厭な心地がしようとは思はなかつた。

其の後だ。……然も自分の發議で、町端れの一瞥めし屋へ入つて、輕石のやうな玉子燒を食つて、其が胸へ支へたのは。……

あゝ……彼處で、此の女が碁石の黒を一石拾つた。……

餘り暢氣で、停車場へ着くと、あゝ〳〵彼がと言ふ汽車が、むく〳〵と煙を噴いて大な首を掉つて、埒外を出て行く處——待つ間の怠屈に引返して町へ入ると、(寒いわ、お一口。)と勸めたんだ。いまが今まで、猿澤の池のほとりで、炬燵に屛風で飲みながら、其の三味線で、……梅川の風俗人目に立つを包み兼ね……何とかして忠兵衞が、と言ふのを蕩けさうに成つて聞いた處。——(何屋と名がつくと億劫です。昨日、)と然うだ、昨日の晝過ぎ大佛殿をはじめ、東大寺、興福寺の巡禮をした時だ。——(二月堂の傍の繪馬堂へ入つて、燒豆腐と雁もどき、並びに蒟蒻、狸の煮込みの皿盛で、釜から引こ拔いた熱燗を遣りましたね、あれは甘かつた。酒も良かつた。あ、言つた店がありますなら。)(眞個においしうございましたな。)と何が、此の女に旨からう。

言なり次第に、跋を合せて、彼處等の餅屋だ、飯屋だ、と覗いて歩行いて、(御兩名樣、もしもし。)なんか、旅籠屋の軒に立つた、古風に矢立を腰にさした紺の前垂掛の宿引に呼懸けられるのを振切りながら(可さうですぜ。)(はゝ。)と入つたのが、煮込のおでん、赤飯を盆づけで、店の暖簾は氣に入つた。が、眞暗な土間を拔けて、おつとこんなものがある、椅子や卓子に躓きながら、ほんの腰掛と薄暗い中座敷めいた處へ通ると、疊がじと〳〵して汚い緣側に、おかはが見える。……

奇特に卓子臺を置いたが、手を掛けると、むら〳〵と埃が立つ。いや弱つたつけな、鼻の下の赤爛れに成つた七つばかりの小女が、指をアングリと銜へて、ベソを掻いたやうに、框でじろじろと此方を視ると、五歳くらゐな次男坊が、頭から、向足までどく〳〵な一つ身で、糠味噌桶から引出したどぶ漬の茄子が化けたやうに土間で跳ねる。……」

七

「見たばかりで、最う胸が一杯に成つた。が、誂を聞きに來た女房の、前掛が煮染めたやうで、禿げた紺の鯉口の垢光りに光る奴の、黒く生えた手の爪を竊と視ながら、とに角、酒を、と言つて、後で此の女も氣の毒な。何だか悄氣た體で、框まで立つて出て元氣の無い懐手、半襟を銜へて引きながら、土間の暗い隅を覗いて居たつけが。……

此方を見向くと、寂しい笑顔で莞爾して、一寸頭を掉つて、さし足と言ふ見得で歸つて來て肴を見たが、鰤も比目魚も皆どろ〳〵、煮込も形なし、汚くつて、申譯に玉子燒を誂へた。と言つて、あの小女が幅つたく引曲げて、よち〳〵と運んで來た膳の上の銚子を取つて、大形の缺けた猪口へ、濕氣拂、と酌をしようと、袖の搖れた時、カチリと卓子臺の上へ轉がつたのが、……碁石だつた。——轉げた時は天井から鼠のふん、とギヨツとしたよ。……

あゝ、と拾つて、（私の袂からだんな。）（然うらしいね。）と、中庭の薄明に透かして見ると、此の碁石に彩色がしてある、と此の女は言つたが、然うでない。黒い質緻へ、縦横に細い絣を見るやうに、青いのだの、薄蒼いのだの、黄色だのの性を驗すのに、然うやつて、碁石の黒に磨込んで試る事だ、と聞く。……其に違ひない。が、此の女の袂から辷つた……あの、其の出處だ。

——出處に就いて、あの時も話合つた。が、此は其まで居た旅籠屋のに相違ないので、……」

——と言ふ次第は、——

肝心な處だ。……翠帳紅閨、玉芝の一室で、蘆繪と衾を並べながら、獨で、胸を嘔氣がつて、のツつ、反ツつして居る男の思出を辿るのなんぞに委して置けない、——やがて、其の金彩藍粉の一枚の黒石か、燦爛たる惡龍毒蛇の鱗か、とも疑ふべき、不思議な事が起つたのであるから、こゝは作者が引取つて話すとしよう。

其の前日、所々見物をして、春日様の鹿は、今日は、とお辭儀をして煎餅を食べるし、おのぼり木菟はいやです、で、繪馬堂の煮込を嘴る、と知つたあとで、晩の泊を、菊水か、ホテルか、と案内者の蘆繪は言つたけれど、スリッパで廊下を辷るのは、此の土地に相應はない。膳にお平と中壺のついて出る昔の本陣とでも言つたやうな旅籠を、木菟の註文で。組合の旗を立てた車夫

に訊くと、それぢやあ唄にもある通り、「奈良の旅籠屋になさいませ。」で、轅を相國寺へ巡らした後、芝生に鹿の掻伏す頃、猿澤の池の汀を一廻り、蘆吹く風は無かつたが、入相の鐘に波が立つ。廣野の中へ打撒けたやうな、あからさまなあの池は、深くも暗くもないけれど、唯人の行く方へ、箕のごとく傾いてサラ〳〵と動くと言つた。が嘘らしい、木菟の目がチラついたに相違ない。

櫻の中の錦川も、春淺ければ、木の葉と小石。細い柳の石橋を渡つた角へ、ガラ〳〵と車を二臺曳込んだ。

「此が、名代の奈良の旅籠屋やて。」

「三輪の茶屋と一所に、唄にありますやろ。」

と掛合で車夫が遣る。

「成程。」

と鍵形の通庭に、昔の遺物を其のまゝな、八間の下に立つて、木菟はきよろんとして、

「大い佛ぢやによつて大佛と、……先刻、四國の觀光團に、坊さんが棒を持つて教へるのを見て覺えて來ました。奈良の旅籠屋だから、奈良の旅籠屋。」

「へゝゝゝゝ。」

「ほゝゝ。」

出迎へた番頭、女中の笑ふ中から、蘆繪の手が、友染の萌黄に白く穗に出でて、

「早く、お上りや。」

と袖をぐいと曳いて、トン〳〵と二階へ上る、壇の途中で、肩を捻つて、笑ひながら木菟の手を取つた。

八

欄干越、……二階へ上り切らない前から、最う見えた。上の、横手大廣間に、煙草盆を配つてずらりと三十ばかり席を取つて、まだ一人も人影は見えないが、座蒲團が並べてある。

「まあ。」

「何、賑かで可いぢやありませんか。」

定めし、多人數の團體客が泊込む待設けであらうと思ひながら、おとなしい小娘に導かれて廊下に掛ると、其の取着で件の大廣間とは壁で背中合せに成らうと思ふ十五疊敷くらゐな座敷に、おなじく十五六人分の座蒲團が並んで、此處には、其の座取の數と同じやうに、膳が並んで、然も皿、椀、鉢のものまで丁寧に揃つて居ながら、……同じく誰も居ない、とばかりで通り抜けし

なに思はず差覗く、トタンに顔を背けた、が、艶々と圓髷に結つた、姿の細りした大屋の御新姐か、それとも豪商などの妾か、と思ふ人柄。何處か媚かしいのが、庄柱を背後にして、火鉢に悄乎と寂しさうに端然と坐つた。其の背けたので薄明い中に横顔を見たばかりで、案内された。——間に一室置いた、——座敷へ導かれて入つた、が、一寸妙に思つた。

待うけの、其の大連の座の空しいのは然る事だけれど、膳が並んで、婦が唯一人は受取れない。其の唯一人も寂しさうに見えた、と思ふと、氣を引かれて、さつと陽氣を障子越に、すぐ前なる猿澤の池の水に吸込まれたやうに、一齊に目も暗く、座敷も冷たく、血の氣を引攫はれたかと、悚然とした。が、それも束の間、ふつくりと、旅の袖の袖近く、蘆繪の姿が蝶の模樣で浮織に成る處へ、大きな臺十能で、小娘が、火を赫と運んで來たので、桃は白と紅と一所に開いて、敷流した中古の絨氈も、紫雲英を唆かせ、春に成る。

で、火を入れた眞鍮の獅噛火鉢を、座勝手に引かうとすると、いや、重き事鼎の如し。で、ビクとも動かぬ。……逢魔ケ時で、狸が附着けたのでは決してない、旅籠屋が老鋪の身上、輕んずべからざる重量である。

其處で、隣室（叩いて居たが）の襖へ些と寄過ぎた、が、清閑を其處へ敷いて二人座に着くと、襖際の何とか書いた横額の下に、碁笥を整然と飾つて碁盤があつた。

ハテ、此を飾つて置きさうな床の間は、と視れば、山水の大幅はやがて黄昏に紛れつゝ、置ものは青銅の狂獅子、銅の平盤にそなれを活けた他に、床柱の掛花活に、紅白の牡丹の大輪の造花は面白い。

「炬燵がよござんせうな、あの、姐ちやん、お炬燵を、何うぞ。……」

と次手に酒肴を急がせた蘆繪が、見物疲れに、うつかりしてた木菟の顏構、目の冴えないのを怠屈ゆゑ、とそんな事まで氣を揉んだが、

「如何。」と言ふに、チリ〳〵と蟲の音のやうな石の音。

「本碁、……」

「井目置きますから、何うぞ。」

と、最う並べるのを、慌てて留めて、

「串戯ぢやない。……私に碁が打てれば、お前さんを口説きます。」

「まあ、あんな事ばッかり。」と、掌で輕く其の碁笥の蓋を扱く。

「五目、なら。」

「何うしやはる？」

「枕を、——」

「あの、枕を。」
「驚いちや不可ません、賭けるんぢやあない、取かへるんです。お前さんが負けたら括枕、私が負けたら船底枕、つまり負けた方が、枕を取替へて寝るんです。」
「おほゝゝ、おいでやす、さあ。」
「面白し、……」

九

木菟は松みりとした聲で、
「蘆繪さん。」
「はい。」
「お前さんが聞けば、昔奥州の夷の話柄かと思はうが、下總國成東と言ふ處に溫泉がある。東京から道程は近し、それに手輕だもんだから、五人づれ友だち同志、暑中休暇に遊びに行つた事があります。……面白づくに飲むわ食ふわで、勘定が足りなく成つて、皆が心當りへ無心して呼金の來るのを待つ間、其の始末だから、帳場へ對して、大廣間には陣取つても、心持は行燈部屋です。……一人前の鰹のさし身を五人で剝がして、此の中へ後生だから、一合、もうたつた一合と、

徳利に仕切をして見せて女中に強請る境遇さ、酒が來ると皆の咽喉が鰌のやうにキユウと鳴る、いや、お話に成らないんだ。
晝寢の眠氣ざましに、五目をしませうよ、と馴染の女中が來たから、私が對手に成るとね、姐御姐御と私たちで言つた其の年增がね、——銚子の酒屋に許嫁の有るのを嫌つて、こんなしだらに成つてるが、あゝ、彼處へ緣着いて居れば可かつた、あんた方に首つたけ酒が飲ませられる。——首つたけは可訝いが、指で徳利を劃るからです、其奴をしんみりと言はれた時は、思はず美しい涙が出た。
恁うして、まあ、何年ぶりかで碁盤に向つて思出すんですが、此の間から、ふんだんの灘の酒で、奈良の旅籠屋の碁の對手が、南の藝妓ぢやあ職過ぎますよ。」
「飛んだ事。」
と消すのを壓へて、
「眞個さ、それも此も、皆友だちの情です。」
「あの、征矢さんは。」と蘆繪が言ふ。
征矢は友だちの姓なのである。
「……湯治場で徳利を劃んなはつた、其の時のお一人だつか。」

「何うして、征矢は大家の若旦那だよ。しかし仲よしでね、一昨年から會社の都合で大阪に勤めて居る。今度の旅行は上方見物とは言ふものの、……唯あの人に逢ひに來たのが、定なんだ、……處が生憎、其の會社の急用で土佐まで行かなけりやならなかつたもんだから、四五日して歸るまでを、下宿の二階に放込んで置きもしないで、お前さんの袖に預けられた。……天下は太平、鳳凰の羽に包まれてると思ひます。」

「ま、こんな袖を。」

と俯向いて、袂を引く時、碁石を落して、

「消えたい、隱れたい、蓑ですわ。」

「お前さんの名の通り、繪に描いた蓑は、成程鳳凰の着る蓑かも知れない。……しかし……何しろ不思議な知己だね。」

次手に言つて置かう、彼が蘆繪を知り、見て、且つ名を覺えたのは、先日東京を立つた神戸行最大急行の夜汽車の中であつた。……木菟は、鷲やら、鷹やら、鳶やら、びらしやらとした孔雀やら、蝙蝠も紛込んだ夜半の暴風雨の巢の中を、もそ〳〵と出て食堂へ入つたのは、それは眞夜中の二時頃で、豐橋のあたりであつたと言ふ。……誰も居ない、正面に（禁喫煙。）の揭示を置いて、給仕が四人固つて、饒舌りながら、其の癖煙草を喫して居た。濱松で最う火を落した、煮燒したものは何も出來ない。……湯はあるから燗はつけようと、言ふから、酒を賴んで待つ處へ、一人スツと入つて來たのが、此の蘆繪。——

とも無論知らず、寢臺車の方から、目覺しく容子のいゝのが、と思ふと、一人の給仕が何と間違へたか、ツカ〳〵と導いて、「此へ。」と掬ふやうに其の婦に腕を下して教へたのが、木菟の居たひとつ卓子、差向ひの椅子である。おつとりと逆らはないで、「お許し。」とか、「御免やす。」とか言つて、すなほに其處へ掛けようとする途端に、背後から夥間が二人聲を合せて、「違ふ〳〵。」と氣立たましく言つた。

十

吃驚したらしく、「ア此方へ。」と、退くに連れて、何にも言はず、嬌態で會釋して、片側の椅子へ、——其處で、背後向きに優容に腰を掛けた。

見惚れて、酒を飲むうちに、其方へは、誂へらしい、紅茶と、水菓子とが出た。が、すぐに女が、素湯を一杯、と賴んで、やがて持つて來たので、皓齒で吸つて藥を飲んだ。……飲むと、そのまゝ勘定を濟して、何にも食べたくはなかつたさうで、蜜柑を二つだけ、絹手巾に一寸包んだのを提げると、椅子を立つて。——と立つたなりで猶豫つたが、振向いて、振向いて艷麗に目禮

した。

硝子杯を措いて、會釋を返すと、スッと褄を捌いて出た。

「南地だ。」

「蘆繪さんだ。」

と、がや〳〵と給仕の言ふのが聞えたと思ふと、一人が飛出して、其の女の卓子に置いた林檎と芭蕉實を皿ごとチロリと取るのを見て、三人が六本ヌッと白服の腕を突出すと、ひよいと其の皿を天窓へ載せて指でペロリと剝いた目が、林檎より眞赤に見えた。

——其處で、名も人がらも覺えたのであるが。——

「しかしね、蘆繪さん。」

碁盤に凭れて又話す。

「大阪へ來た思出に、お前さんに逢はせて欲しいと言つて、素面で、征矢を口説いた時は、極り が悪くつて冷汗が出たよ。——征矢が私より、ずッと少いんだからお察しなさい。勘當中預けられてる叔父に向つてヤケに遊ばせろ、と言ふよりか餘程弱つた。——負惜みを言ふんぢやないが、征矢の旅行をする處にさへ衝突らないで、二人で遊んで居られたんだと、そんな野心は起らなかつたかも知れない。——とまあ、して置くけれど、廣い大阪三界に只一人其の人を便りにした征

矢が、退引成らない社の用で、然も其の日の夜の汽船で、神戸から土佐へ立たなけりや成らないと言ふんぢやないか。

お前さんと食堂で一所だつた。あの汽車が梅田へ着いたのは晝前十時頃だつけ。……寒かつたね、實を言ふと、停車場へ出る時なんぞは、只友だちの顏を見ようばツかりで、一つ處へ出て來さうなお前さんの姿を、改札場から眴はさうなんぞの野心はなかつた。

が、周圍が赫と賑かに成るにつけて、急に心寂しく成つたのも、蟲の知らせだとか言ふんだらうね。……留守か、それとも一晩泊で旅行でもして居やしないか、と妙に征矢が居てくれさうもない氣がして成らない。——マヽよ、居なかつたら、次の汽車で東京へ引返さうくらゐに覺悟をしたほど、——誰にも恩には被せないけれど、——私は一人旅が心細い。

每日勤めて居るのは知れてたから、俥で、會社へ志した。——寢不足はして居るし、汽車の辨當で舌は荒れるし、寒さは寒し、兩側の看板に並んで通抜ける向風の面色は、もの干で吹曝されるやうで、ガタ〳〵震へるくらゐだつた。——寒いなあ。車夫と、思はず言ふと、(然いで、奈良のお水取やさかいな。)と言つたがね、——譯は知らないけれど、朝湯の風說より冷いよ。

道修町の會社へついた時は、石壇に、車夫を待たせた。征矢が居なかつたら、すぐに停車場へ引返さうと思つてね。——

給仕に名刺を出して、一寸待て、で、事務室の方へ入つて行く半分洋服の白いのを見送りながら、まだ逢へるか逢へないかと、危ぶんだ、が、其の給仕が、向うでお辭儀をした、肩の締つた背後向で、卓子に向つて何か、かきものをして居るらしい男がある。其の背後姿を視た時は、こに血を分けたのが居る、と思つたほど可懐しかつた、征矢なんです。」

「まあ、好かつたわ。」と、最う分つて居る事ながら、蘆繪が吻と安心の息を吐く。

十一

「右へ向つて、ペンを持つた手が擧る、と名刺を受取つたつけ、すつきりした片頬が見えたが、見る〳〵心持聳えた肩は、春日山、此の若草山の十ウぐらゐ、腕で堪へて乘せさうに、力が籠る。……あゝ大きな會社を背負つて立つ、柱だ、さすがは賴母しいと思つた、が、然うぢやあ無かつた。私と言ふ不意の重荷が掛つたのを、心で堪へた、我慢したのが姿勢に成つて顯れたんです。

ペンを置いて、づいと立つと、袴で向直つた、が、引緊つた顏でずツと出て來た、……ト顏を合せて此方は最う魂を向うへ取られた、うつろな聲で、やあ、と言つて、だらしなくニヤリと成ると、やあと、幽に眦へ笑の影で、荷物は、と言つて、私の家ぐらゐ片手で引立てさうな確乎した片腕を最う恁う差出し加減で、つか〳〵と玄關の石へ下りる。此ばかり、何もない、と風車のやうな信玄袋を振つて見せるのを、ぐい、と取つて、應接室だらう、中へ入る、と慌てて、私は賃錢を渡したつけ。待つてた人の好い車夫の老夫が、(逢ひなされたなあ、可い塩梅や。)と髯斑な口で嬉しさうに和笑としたのを見ても、どんなに私の嬉しさうだつたかが知れるでせう。……信玄袋を卓子の上へハタと置いて、(困つて了ひました。私は今夜土佐へ立たなければならないんですよ。)と爽な聲で言つた時、ものに動ぜぬ征矢の、凛々しい目の瞼へ颯と血の色が出たんぢやありませんか。

私は思はず胸が切つた。

(此で最う十分だ。)

と信玄袋を膝へ取つて然う言つた。——

其の信玄袋を、征矢が又引立つて卓子の上へトンと置いて、(何うにかします、一寸失禮。)(あゝ、心配しちや不可ません、)と言ふうちに最う見えなく成つた。——過ぎた事を、何故、電報で打合せてくれない。)なぞと愚癡を言ふやうな男ぢやあない。圍まれた城なら敵を破つて出るのみだ。——此方も勇氣に引立てられて、逢つたばかりで歸るのを何とも思ひはしなかつたが、それでもね、滑かな大理石の床が砂利で踏むやうに痛かつたのは事實なんです。——おつと三々に成りますね。」

木菟は、避けて一石パチリと入れた。

「給仕が來て御馳走ぶりに、ドン〳〵焚いてくれる瓦斯暖爐も寒いやうな氣で居るうち、待たせましたね。

小一時間。——抱くと私の身體より重いくらゐな、倫敦仕込の大外套を引抱へて入つて來て、(殘念です、八方電話を掛けました、重役とも熟議をしましたが、是非がありません。)と面を正して言つた、(しかし屹と何うにかします。)……(飛でもない、何うにかするなんて。)(否、土佐へ立つのは何うにも仕方がありません。が、何とでもして四日間歸つて來るまで引留めます。)……何にも言はせず、(とに角、戸外へ出ませう。而して食事を。……)

此から歩行き出したが、私は、幾重にも、征矢が心配をしないやうに、そして、晝飯を一所に食べて、夜汽車で歸るのが決して不愉快な事ぢやあない、却つて洒落てるから、と言つても洒落なんざ大嫌な征矢だから、洒落にしないで、心配をしてくれる。……から、其處でお前さんの事を言つた。——

言つた、が、極りが惡かつた。私は立停まつて、電信柱を小楯に取つたんですがね、——何處だか方角も何も分らなかつたけれど、後で聞くと、毎日新聞の横を曲つた處だつたさうで、眞晝間です。

のつけに藝妓に逢ひたいとも、さすがに言出せないから、(御飯は何處で食べるんです。)も、とぼけて居ませう。

征矢は何の氣も付かないから、(其も考へてるんですがね、今新と言ふ金麩羅屋があつて、一寸うまくもあるし、濟側で景色も變つてますから其處にしよう、と思つても見ましたが、入込ですから——些とでも落着いて、話をしたいのには。……矢張近處ですから鶴家と言ふのにしようと思ひます。が、何ですか、註文がおありですか。)——悠う問はれたのには少なからず弱りましたよ。」

十二

「唯、行詰りながら、(其處は藝妓が呼べますか)サ、何うです窮したものでしたな。(さあ、呼べませうが、其の方は別に算段がしてありますから。)で、尚ほ弱つた……牛屋の割前のあとが、お互に羽織を脫がうぜ、紐を取つて置く事さ、くらゐは腕の古疵、覺えのある强兵だけれども、素面で、眞晝間で、町の角で電信柱で、剩へ風立つてヒユウと寒さが身に染みる、汽車で外套が皺だらけで、凹んだ信玄袋を紐長にぶらりと下げて、日向でまぶしくツて、砂ぼこりで鼻をしかめて、トやつた處が征矢の方が、ずツと年下で居て、脊が高いんだから、形もつかなけりや

壺も嵌らず。こゝで口説くのは、奥同者が木願寺を拝んで、あの屋根を歩行いて見たいと言ふやうなものでね、（實は、）と言ひ出すと胴震ひをして、汗と涙が一所に出る。

いや、笑事ぢやあない。——

……だから、其の蘆繪と言ふのを視せて下さい、そして一所に晩まで飲めば、大阪に思置く事は誓つてなし、君は、神戸へ、私は東京へ、擦違ひに——と事實決心をした證據は、對手のあの大な目を屹と視ながら談じたので分ります。

——人が見て通りまさね、辻に突立つて居るんだから。——

馬鹿も、此の位に成ると超越と云つてね、一つ上を通越して、人に眞面目な心配をさせます。」

と、彼は獨言に成つて歎息した。

「此の日其のおのぼりに對して、吹曝しの辻に立ちながら、征矢は苦笑もしないで、眞面目に心配して、……知らない藝妓だ、それだし會社の便宜上、曾根崎の方には萬事を承はらせる茶屋もあるが、南地は宴會で知つてるばかり。……何しろ、今朝一所の汽車で大阪へ歸つた婦が、つい、おいそれの間に合ふか覺束ない。しかし、北の仲居に元老株のきゝものがある、腕を振はせて見ませう、と鶴家で食事をしたあとを、北の、あの百川へ出掛けたんです。」

「お身體も、貴方、それに氣づかれもおましたやろ。……藝妓はん大勢の中で。醉つてお了ひなさいました。お酒の花が滿開頃にな。征矢さんがすゝと立つて、私を一人別室へお呼びやして、あの、凛としたお聲でな、——（蘆繪さん、）と更まつて、（僕が土佐から歸るまで、あんじやう引請けて下さい。）とお袴に手を懸うおつきなすつて、あの目で顏をお見やしたばゝかりで、私は最う身體をも忘れて了ひました。恥かしい事ですけれど、內證はな、世話に成つて居ります人と、出るわ、引くわの悶着があつて、身の上の相談に、東京の芳町に待合をして居ます、姉の許へ、相談に行つて歸つたばかりの處でした。けれどもな……あゝ、心易うて言ひました、貴方、まだ御心配なさいますな。あの、凛々しい方が、私のやうな、こんなものに、貴方を賴むと、膝を正してお言ひなすつた、志で、二十五の此の年で、殿方の氣がはじめて分つて、夜があけたやうに思ひますわ。」

と忘れたやうに、碁盤の端へ頰杖しつゝ、無意識らしく一石黑をカチンと繼いだ。

「ま、此の延びた事をお見やす。うつかり〳〵お話して居て、……何處までも、……」

唯心付くと、石は、白と黑をづる〳〵と、幅二寸くらゐに繋がつて、盤の上をずるりと這つて、暮れかゝる色に冷く輝いたのが、鱗の小蛇に紛つたのである。——と言ふのも後に心付いたので、其の時は何とも思はなかつたさうであるが、艷々と盤が光つて、……又何となく其處へ人影が映したやうに思つたので、ふと目を上げると、襖を細目に、影のやうに立つて、蒼白い瓜實顏で、

頬に片手を添へながら、やゝ打傾きつゝ差覗く、早や天井の夜を籠めて、黒髪に黄昏の色を吸つた圓髷の婦がある。——

片手頬をば支へた手首に、市松らしい友染縮緬、裏の淺葱が冷く搦んで、凄いやうな、盤面の石も此の影か、瞳が大く、すらりと脊が高い。

十三

木菟は一目見て、一室に大勢の膳を並べて、唯一人寂しく居た先刻の婦人を思つた。

「お樂みどすな。」

と、爾時言つた。

「如何です、貴女も。」と、つい言つて、盤を向けて一膝開いた。

「御免やす。」

と、すつと入る。……

「蘆繪さん、お願ひなさい。……貴女、此方は本當のが打てるんですから。いや、敗軍々々！」と陽氣に饒舌つて、遁げるやうに、もう出來てる置炬燵へすぽりと入つたのは、避けたのでも何でも無かつた。木菟は、——不意に顏を出したのが、征矢ならば、と思ふと、急に寂しく成つて、一人で、ものを思ひたかつたのである。

海が見える。

波を打つ。

水の色が襖に映つた。

猿澤の池が面影に立つのであらう。

霞の中を、供奉して鳳輦のきしるのは、畫視た繪馬堂の額の土佐繪の幻である。萌黄の筆彩、黄金の刷毛。

流海の船の甲板に、すつくと一人外套の黒い姿は、征矢の影、朝日がさし、夕日が映る。

怪しく美しき鳥の、嘴を接して、幽に囁く如く婦二人の聲を聞き、盤は花園に似て、袖の花唉き、手の蝶の戯るゝのを見つゝ、彼は虻と成つて、うと〳〵した。……

「あ、失禮、頭痛がして、ま、こんな事。」

と、言ふ聲を現に聞いて、ふと我に返つた時、蘆繪が、金口の女煙管を、吸つけて、卜向けたにつれて圓髷の婦人が、生際つめて額を結へた紫の煙管筒を解くのを視た。透通るばかり白い顏の、蒼褪めたのも一つは其の色の映るのであらう。市松の繻袢の淺葱がまたチラリと照つた。

「やあ、寢ましたか。」